



オレの愛しい
王子様

瑞原唯子
YUIKO MIZUHARA

「まだそんなズボンはいて僕とか言ってんのかよ」

創真がなかよしの翼をさそって園庭のすべり台に向かっていたところ、やんちゃな男子三人組がおせんぼをするように立ちふさがり、いじわるな言葉をぶつけてきた。創真ではなくその後ろにいる翼に。

彼らはいつもそうやって翼をいじめるのだ。

しかしながら翼は何を言われても決して言い返そうとしない。いまも困ったような顔をしてただじっと下を向くだけである。代わりにというわけではないけれど創真がカツとして啖呵を切る。

「おまえらにはカンケーないだろっ！」

「気持ちわりーんだから関係あるぜ」

「なにい?!」

思わずこぶしを握りしめて突っかかろうとしたが、翼に後ろから腕を掴まれた。その手は非力だったものの無理には振りほどけない。なすがまま園庭のすみっこのほうに連れていかれてしまう。

「逃げんのかよ、よわむしー！」

「タマついてねーもんな」

背後からはそんな嘲笑の声が聞こえてきた。

創真は耐えきれずに振り返ったものの、そのときには三人ともこちらのことなど見てもおらず、何事もなかったかのようにジャングルジムへ駆けていく。

「なんだよ……」

消化不良のまま、創真は微妙な面持ちで翼に向きなおった。

「なあ、おまえもイヤならちゃんと言い返せよな」

どんなに嫌なことを言われてもただじっと我慢しているだけなのが、創真にはもどかしい。しかしながら翼はまるで当然だとばかりにさらりと答える。

「ケンカは悪いことだからやっちゃダメなんだ」

「だけど、あいつらがさきに言ってきたんだぞ」

「それでもぼくは西園寺の後継者だから……」

「コウケイシャ？」

聞き慣れない言葉に創真が首を傾げると、翼はふわっと笑う。

「うん、おとなになったら会社のいちばんえらいひとになるんだって。だからいい子でいないといけないんだ。勉強もいっぱいして、かっこいい立派なおとなになれって母上にいつも言われてる」

「ふーん……」

いじわるされても我慢するのがいい子だなんてなんだか納得できない。えらいひとになるためにいい子でいるというのも窮屈に感じる。それでも翼自身ががんばろうとしているのなら――。

「じゃあ、オレがそばについてやるよ」

「ついて……？」

きょんとした翼を見つめて、力強くうなづく。

「うん、さっきみたいにいじめられてたら助けるし、えらい人になれるように手伝う。勉強もいっしょにしよう。おとなになってもずっと翼のそばにいる」

自分で言いながらとてもいい考えだと思った。

翼といっしょにいられたらうれしいし、翼の力になれたらもっとうれしい。きっと翼もとなりで笑顔を見せてくれるはずだ。

「約束する、ほら」

創真のよりもひとまわり小さな手を取り、小指と小指を絡める。

大事な約束はこうやって指切りするのだと聞いた。ゆーびきーりげーんまーん、うーそつーいたーら——軽く手を振りながらそう歌うと、翼はだんだんと顔をほころばせて幸せそうに笑ってくれた。

第1話 オレの愛しい王子様

「僕を待たせるとはいい度胸だな」

夏休みが終わり、二学期が始まるその日の朝。

諫早創真（いさはやそうま）がいつものように西園寺の邸宅へ迎えに行くと、すっかり準備を整えて待ち構えていた西園寺翼（さいおんじつばさ）が、うっすらと笑みを浮かべてそんなことを言った。

迎えの時間は決めてあるもののそう厳密なものではない。腕時計を見てみると、確かに二分ほど過ぎているがおおよそ時間どおりである。このくらいの遅れならいままでもとときどきあった。

「おまえといれば度胸もつくさ」

どうせ気まぐれでからかっているだけだろうと思い、軽くそう返したが、予想に反して翼の反応は怖いくらい真面目なものだった。

「なら罰を受ける覚悟もできてるな？」

「え、マジで言ってんのか？」

「何かしらのペナルティは必要だ」

「ペナルティって……」

困惑する創真のまえで、翼は目を伏せてじっと思案するような素振りを見せる。やがてふいとわずかに視線だけを上げたかと思うと、ニツといたずらっぽく笑った。

「冗談に決まってるだろう。度胸がついたというわりにはビビリすぎだぞ」

「おまえなあ」

創真は大きく安堵の息を吐きながらそう言って、じとりと睨んだ。

「あまりからかっていると創真くんに愛想を尽かされるぞ」

笑いを含んだ声が、天井の高い広々とした玄関ホールに響く。

振り向くと、仕立てのいいチャコールグレーのスーツを身につけ、悠然とした足取りで階段を降りてくる壮年の男性がそこにいた。翼の父親で、由緒正しい西園寺家の次期当主に指名されている征也（せいや）である。

ただ立っているだけでカリスマ性を感じさせる美丈夫でありながら、身のこなしも洗練されており、また仕事ぶりも素晴らしく、後継者として非の打ちどころがないと評価されているようだ。

そんな彼に、翼は幼いころからずっと憧憬と尊敬の念を抱いていた。創真は本人から飽きるくらい何度もそのことを聞かされてきたし、実際、父親といるときの表情を見れば一目瞭然である。

「父上、創真とは仲良くやっていますから大丈夫です」

「幼なじみというのは得難いものだ。大切になさい」

「はい」

いまも尊敬のまなざしを隠さない。

こんな目を向けられてはくすぐったくなりそうなものだが、征也はいつもながら照れた様子もなく鷹揚に受け止めて、再び足を進める。

「あ、おはようございます」

「おはよう創真くん」

目が合って思い出したようにあたふたと挨拶をした創真にも、やわらかく微笑み返してくれた。用意された革靴を履き、後ろに控えていた妻の瞳子（とうこ）からビジネスバッグを受け取る。

「行ってくる」

「行ってらっしゃいませ」

「父上、お気をつけて」

瞳子と翼がそれぞれ声をかけるが、創真は何と言えればいいかわからず無言のまま頭を下げた。普段、征也はもっと早い時間に家を出ているので、こんなふうに見送ることになったのは初めてなのだ。

しかしながら彼は気にする素振りもなく軽く頷き、颯爽と玄関をあとにした。

「さあ、翼もそろそろ行かないと遅刻しますよ。あなたは西園寺の後継者になるのですからね。常にその名に恥じないように行動しなさい」

「はい、母上」

西園寺の後継者になるのだから——瞳子のその言葉は、創真でさえいいかげん耳にタコができそうくらい聞いているが、翼はうんざりする様子もなくいつも真面目に受け止めている。むしろ期待されていることをうれしく思っているようだ。

「行くぞ、創真」

「ああ」

翼は颯爽と足を進め、そのあとを創真は小走りで追いかけていった。

九月一日は、まだ真夏のような気がする。

午前の早い時間だというのに、すでに刺すような強い日差しが容赦なく降りそそいでいる。日が高くなればさらにきつくなるだろう。秋らしい気候になるにはもうしばらくかかりそうだ。

創真はじわりと汗がにじむのを感じてネクタイを緩め、そっと隣に目を向ける。

自分と違って、翼は暑さなど感じていないかのように涼しげな顔をしていた。汗をかきにくい体質なのでそう見えるというのもあるだろうし、表情に出さないようにもしているのだろう。いつだってだらしなく見えないよう努力しているのだ。

「翼くん、おはよう」

「おはよう」

明るく声をかけてきたクラスメイトの女子に、翼は甘い微笑を返す。

すっと通った鼻筋、形のいい薄い唇、甘さを感じさせる目元、白くなめらかな肌、栗色のゆるふわショート、すらりと姿勢のいい長身——その凜々しくも中性的な容姿から翼は王子様と言わ

れていたりする。

半袖シャツにネクタイ、スラックスというありきたりな夏の制服も、手足の長さもあってずるくらいさまになっていた。とても創真と同じデザインのものとは思えない。見比べると絶望的な気持ちになる。

幼稚園に通っていたころは創真のほうがだいぶ大きかった。けれど小学四年生のときに抜かれて、高校一年生のいまは翼のほうが十二センチも高くなってしまったのだ。こんなはずではなかったのに。

さらには成績も遠く及ばない。私立の進学校として名高い桐山学園高等学校の中で、翼は常に学年トップの成績だが、創真はかろうじて半分より上というあたりである。このままでは同じ大学に進学するのも難しい。

こんな自分が翼の隣に立つことなど許されるのだろうか、翼を支えていくことなどできるのだろうか、翼のためにいったい何ができるというのだろうか。ときどきふとそんな思いにとらわれてしまう。それでも――。

「ん、どうした？」

「いや……」

不躰な視線に気付かれたことに内心であわてつつ、曖昧に目をそらす。それが不自然に映ったのだろう。翼は不思議そうな顔をしながらわずかに小首を傾げる。

「悩みがあるなら相談にのるぞ？」

「ん、まあ……」

創真は言葉を濁して黙り込んだ。悩んでいるといえばそうだが、自分の中では決着のついていることなので相談する必要性は感じていないし、そもそも当事者である翼には話したくも知られたくもなかった。

その心情を察したのか、翼はあきらめたようにうっすらと苦笑した。

「おまえ、意外と秘密主義だよな」

「は？」

いくらなんでも秘密主義と言われるほど秘密にした覚えはない。創真はムツとしてすこしぶっきらぼうに言い返す。

「おまえにも言えないことくらいあるだろう」

「創真になら言えないことなんてないけどな」

「……………」

胡乱な目を向けると、翼はそれを受けてふっと口元に笑みを浮かべた。

「じゃあ、聞きたいことがあるなら聞いてくれ」

「何でも正直に答えられるとでもいうのかよ」

「ああ」

だったら、翼の――。

喉元まで出かかった質問を創真はグツと飲み込んだ。その答えは聞くまでもなくほぼ確信しているが、こんな形で問い詰めるべきことではないと思うし、何より同じ質問を返されてしまう可

能性もあるのだ。

「……考えとく」

そう受け流して、この話題を曖昧に打ち切った。

「おはよう、西園寺くん」

校門をくぐると、翼はあちらこちらから女子生徒に声をかけられる。

彼女たちに愛想よく返事をするのはもちろんのこと、遠巻きに見つめている子たちにも甘やかな笑みを振りまくので、黄色い声が絶えない。それはもうすっかり日常の光景と化していた。

「ごきげんよう。相変わらずあなたのまわりは騒がしいわね」

「桔梗姉さん」

ずっと翼の隣に並んで声をかけてきたのは、姉の桔梗（ききょう）だった。

彼女はこの桐山学園高等学校の二年生である。翼と同じくらいの身長でやはりモデルのようなスタイルをしており、容姿端麗で頭脳明晰、さらに自然と人を従わせる雰囲気があるため女王様の異名を持っていた。

ふたりが並んでいると、相乗効果でいっそうまわりの目を惹きつけてしまう。

ただ、隠しているわけではないので知っているひとも少なくないし、むしろそれを面白がっているひともいたりするのだが——実のところ、とてもじゃないが仲がいいとは言いがたい。

「調子に乗ってアイドルにでもなるつもり？」

「姉さんのようにお高くとまってないだけです」

「あなたは軽薄で品性に欠けるのよ」

「そういう姉さんも大概だと思いますけどね」

きらびやかな笑顔を見せたままの応酬は、なかなか怖い。

もっとも今に始まったことではなく、幼いころからずっとこんな感じで反発しあってきた。創真も何度となくその現場を目にしている。翼は認めないが、いわゆる同族嫌悪というやつではないかと思っている。

それでも桔梗には年上だという自覚があるのだろう。だいたい先に引き下がるのは彼女のほうなのだ。今回もそれ以上は言い返さず、ただあきれたとばかりに溜息をついて冷ややかな視線を流す。

「西園寺の名にふさわしい振る舞いをなさい」

それだけ言い置くと、腰近くまである艶やかな黒髪をなびかせながら、反対側にいた創真の隣に軽やかにまわりこんできた。

「ごきげんよう、創真くん」

「おはようございます」

さきほどまでとは別人のようにやわらかく微笑む桔梗に、創真は軽く会釈した。

彼女とは幼なじみといえるほど親しくないが、幼稚園や小学生のころは一緒に遊んだこともあるし、いまでも顔を合わせば挨拶くらいはしている。そのたびに翼は面白くなさそうにしていたけれど——。

「桔梗姉さん、創真に絡むのはやめてください」

「あら、挨拶しただけじゃない」

「姉さんの魂胆はわかっています」

「あなたにとやかく言われる筋合いはないわ」

「創真に話しかけることは僕が許さない」

ここまで強硬な態度を示したのは初めてだった。

自分の頭ごしに言い合うふたりを交互に見ながら創真はおろおろする。魂胆がどうかという話からすると、ふたりのあいだで何かあったのかもしれないし、それもわからないまま下手に仲裁するわけにもいかない。

しかし、そう思ったときにはもうすでに口論が途切れていた。先に引き下がったのはやはり桔梗のようだ。言葉の代わりにいかにもうんざりしたように深く溜息をつき、そっと創真に目を向ける。

「創真くん、こんな狭量な人間に仕えるのは考え直したほうがいいわよ」

「いや、オレは……別に……」

返答に窮していると、彼女はどこか同情めいた笑みを残して昇降口へ向かった。そのあとを何人かの生徒があわてて追いかけていく。友人というより信奉者か野次馬かといったところだろう。

そして、こちらにもクラスメイトの女子三人組が駆け寄ってきた。

「朝からお姉さんとのバトル大変だったね」

「バトルってほどじゃないよ」

「私たちは翼くんの味方だから！」

きやいきやいと目を輝かせてはしゃぐ彼女たちに、翼はにこやかに応じる。しかし桔梗と言い争ったことで疲れていたのだろう。そこにほんのすこし苦笑のようなものが混じっていたのを、創真は見逃さなかった。

教室に入ると、ふたりはそれぞれ自席に着いた。

翼は窓際のいちばん後ろで、創真はそのひとつ前だ。席はくじで決めているものの、ふたりが前後になったのは偶然などではなく、翼がその席を引いた男子に替わってもらったからである。

私語でざわつく中、創真はスクールバッグから筆記具や教科書を出していたが、ふいに後ろからグイッと強く肩を引かれた。振り返ると、翼がひどく思いつめた顔をしてこちらを見ていた。

「さっきのことだけどな」

「ああ……」

近い、近すぎ――。

他のひとには聞かれたくないのだろう。常にはないほど顔を近づけて声をひそめる翼に、そのときかすかに感じたほんのりとあたたかい吐息に、創真は内心どぎまぎした。頬もすこし赤くなっているかもしれない。

しかし、翼はそれに気付いた様子もなく真顔のまま話を続ける。

「桔梗姉さんは創真のことを欲しがっている」

「は……？」

一瞬、頭が真っ白になった。

あまりに突拍子もなくわけがわからず啞然としてしまい、もはや胸を高鳴らせるどころではなかった。ひどく混乱する頭を必死にめぐらせながら言葉を紡ぐ。

「欲しがってって……え、どういうことだ？」

「自分のそばに置いておきたいみたいだな」

「桔梗さんがそう言ったのか？」

「最近、よく思わせぶりなことを言っている」

おかしい意味ではなかったようです。こしほっとしたものの、そばに置いておきたいというのはやはり信じがたい。桔梗ならどういう意図にしる選び放題のはずなのに。

「オレなんかを欲しがるとは思えないけど」

「僕から大事なものを奪いたいだけなんだろう」

「……大事なものって、オレか？」

「それ以外に何がある」

まあ、話の流れからするとそれ以外にはないのだが。

思わずにやけそうになるが、それを見られるわけにはいなくて必死にこらえた。翼は怪訝そうにほんのすこし眉をひそめたものの、すぐに気持ちを切り替えたのか真剣な面持ちになり、まっすぐ創真を見つめる。

「いいか、くれぐれも姉さんの甘言に惑わされるなよ。おまえを気に入ってるとか言ってくるかもしれないが、そういうわけじゃない。あとで知って惨めな思いをするのはおまえだからな」

「オレは、翼から離れるつもりはないよ」

そう答えると、翼はようやく安堵したように表情を緩めた。

ただ、創真としては桔梗がそこまでするとは思えなかった。ちょっとした嫌がらせとして思わせぶりなことを言ってみただけで、行動には移さない気がする。とはいえどちらにしても創真の答えは変わらない。

ずっと翼のそばにいて、翼を支える――。

幼いころにそう約束を交わした。自分に支えられるのか悩むことはあっても、誰かに何かを言われたからといって離れるつもりはない。翼にいらないとと言われるまではそばにしようと決めている。

ただ、それは決して義務感や責任感からではない。創真自身がそうしたいと心から望んでいるからである。そもそも約束を持ちかけたのは創真なのだ。そしてその気持ちは当時よりもずっと強くなっている。なぜなら――。

始業開始のチャイムが鳴った。

肩を掴んでいたほっそりとした白い手が離れて、創真は前に向きなおる。それでも後ろに翼がいることを意識すると、自分の背中を見ているのではないかと思うと、すこしだけ鼓動が騒がしくなる。

そう、胸に秘めたまま誰にも打ち明けるつもりはないけれど、創真は幼なじみで親友の翼を、幼なじみとして親友として以上に愛しいと誤ってしまっているのだ。それを翼が知ることは、きっと、永遠にない。

第2話 帰国子女の編入生

「おー、そこ席に着けー」

創真たちの担任がガラガラと扉を開けて教室に入ってきた。

後ろのほうに集まっていた男子生徒たちを注意しつつ教壇に立つが、教室は静かになるどころかいっそうざわめいていく。その視線は、担任が連れてきた見知らぬ男子生徒に注がれていた。

顔はきりりと端正で、背が高く、適度に筋肉がついており、全体的にしっかりと男らしさを感じられる。それでいてさっぱりと清潔感があり暑苦しくない。老若男女に好かれそうな見目だ。

「えー、今日からこのクラスの生徒になる編入生を紹介する。東條圭吾くん。親御さんの仕事の都合で幼いころからずっと海外にいたそうだ。日本語は普通に話せるから安心していいぞ」

そう言って、英語教師である担任はいたずらっぽくニヤリと笑う。英語ができない生徒のことを揶揄しているのだろう。情けないことに創真も英会話は苦手なほうなので、苦笑するしかなかった。

「じゃあ、東條、何かひとこと」

「はい……東條圭吾です。十年ほど日本を離れて、イギリス、フィンランド、ノルウェーに住んでました。学校のことも日本のこともあまりわからないと思うので、いろいろと教えてください。よろしくお願いします」

帰国子女の編入生は違和感のない発音で挨拶すると、お辞儀をする。

そんな彼にクラスはあたたかい拍手で歓迎の意を示した。一部の女子はかっこいいなどと興奮ぎみにささやき合ったり、熱いまなざしを送ったりしている。それでも彼は真面目な表情を崩さない。

「おまえの席はこの一番後ろだ」

「はい」

担任が示したのは翼の隣だ。

夏休み前までは何もなかったそこには机と椅子が置かれていた。登校してそれを見た時点でどういふことなのかみんな察しがついたし、一部では男子か女子か予想して盛り上がりたりもしていた。

編入生は背筋を伸ばして机と机のあいだを歩いていく。自分に向けられたまなざしやひそひそ話には気付いているだろうが、どこことなく居心地の悪そうな顔になるだけで目を向けることはなかった。

「よろしく」

彼が席に着こうとしたとき、翼は隣からそう声をかけてにっこりと微笑んだ。彼はすこし驚いて、こちらこそと戸惑いがちに返事をしながら座り、そのままじっと探るように翼を見つめる。

。

「君、どこかで会ったことないか？」

「え、どうかな。僕には覚えがないけど」

「……悪い、変なこと言って」

「いや」

まるで下手なナンパだが、気恥ずかしげに黙り込んでしまったところを見ると、おそらく本当に既視感を覚えただけなのだろう。その様子を目にして翼はひそかにくすりと笑っていた。

「東條、もしよかったらこれから学校の中を案内するけど」

終礼後すぐ、翼は帰り支度を始めようとした隣の編入生にそう申し出た。

小中学生のときもよくこうして転校生の面倒を見ていたので、翼からすればさして特別なことではないが、それを知らない当の編入生は驚いて目を瞬かせていた。

「いいのか？」

「もちろん」

「じゃあ頼む」

フレンドリーな翼につられるように、彼も笑顔になった。

創真は横向きで頬杖をついてふたりの様子を眺めていたが、会話が一段落すると席を立ち、スクールバッグを肩にかけながらあらためて翼に向きなおる。

「案内するところは絞れよ」

「わかってるって」

いつもあちらこちらと案内しすぎて時間が長くなるのだ。しかしながら翼は心配いらないとばかりに軽く笑い飛ばすと、スクールバッグを肩にかけて創真の隣に立ち、まだ座っている編入生に声をかける。

「行こうか」

「え……ああ」

彼は小さく頷き、あわてて帰り支度を整えて立ち上がった。

おそらく翼とふたりきりだと思い込んでいたのだろう。そしてそれを望んでいたのだろう。平静を装っているものの、一瞬、そこに落胆の色が浮かんだのを創真は見逃さなかった。

「そういえば自己紹介がまだだったな」

教室を出ると、翼はそう切り出して隣の編入生に振り向く。その表情はいつもよりも華やかなよそいきのものだった。

「僕は西園寺翼。西園寺でも翼でも好きなように呼んでくれて構わない」

「ああ……じゃあ翼って呼ばせてもらおうかな。俺のことも圭吾でいい」

「わかった」

眉目秀麗で男性的な体格の編入生と、凜々しくも中性的な容姿の翼が並んでいると、それだけで絵になる。桔梗と翼のきらびやかさとはまた違った雰囲気だ。放課後の廊下で談笑していた女子たちも目を奪われていたし、やたらざわついてもいた。

「創真も自己紹介しろよ」

「うわっ」

ふたりのすぐ後ろを歩きながら物思いに耽っていた創真は、いきなり翼にグイッと上腕を引か

れて声を上げた。蹴躓いてよろけながら翼と編入生のあいだにおさまる。

「ったく……」

翼が強引なのはいまに始まったことではない。軽く溜息をつくと、自分より頭ひとつ大きい編入生にちらりと目を向ける。

「オレは諫早創真。翼以外にはだいたい名字のほうで呼ばれてる」

「諫早くんだな」

編入生はにっこりと確認するように復唱した。

ただ——翼のことは迷わず呼び捨てにしていたのに、なぜか創真は君付けである。小柄で童顔なので無意識に付けてしまったのだろうか。面白くはないが、わざわざ指摘するのも癪なので黙ってこくりと頷いた。

「ここが図書館だ。なかなか立派だろう」

図書館はガラスを多用した透明性の高い近代的なデザインだ。エントランスは吹き抜けになっていて、それ以外のところも天井が高く、閲覧スペースも広々としており、全体的に開放的で明るい印象となっている。

「これが学校の図書館とはなあ」

「おとし建て替えられたばかりなんだ。閲覧スペースで勉強することもできるけど、定期試験前はすぐに席が埋まる。よほど頑張らないと取るのは難しいだろうな。本を借りるときは——」

啞然とする東條に、翼は実用的なことを中心によどみなく案内していく。翼自身、高校に入ってからまだ半年も経ってないし、案内するのも初めてだが、堂に入っていてとてもそんなふうには見えない。

「ここは学食だ」

続いて隣の学食にやってきた。

学食というよりも広大なカフェといった雰囲気、天井が高く、窓側は上まで全面ガラス張りになっており、その向こうのテラスにも客席がある。図書館よりもさらに開放的で明るい印象だ。

「ランチタイムにはカフェテリア方式でメニューが用意される。そこからトレイに好きなものをのせて行って最後にレジで支払うんだ。支払いは現金でもいいけど電子マネーが便利だぞ。ここで買わずに弁当を持ち込むことも許可されている」

まだ準備中だが、始業式のみだった今日もランチの提供はあるようだ。奥で忙しく準備をしているのが見える。部活動などで必要とする人がそれなりにいるからだろう。

「翼はどうしてるんだ？」

「だいたいここで買って創真と食べてるな」

「じゃあ、俺も一緒に食べていいか？」

「構わないよ」

翼は当然のように勝手に了承した。

あいかわらず横暴だが、たとえ意見を求められたとしても嫌だなんて言えなかった。いずれに

しろ創真は苦々しい顔をすることしかできないのだ。もちろん翼に気付かれぬようにこっそりと。

「ランチタイムは食事のみだけど、それ以外の時間は自由に席を利用していいことになっている。雑音が気にならないならここで勉強するのも悪くないかもな。図書館と違って飲食自由だから何か飲みながら勉強できる。自販機もそこにあるし」

指さしたほうにはカップ式の自動販売機が設置されている。そして、そのカップを手元に置いて勉強する生徒もちらほらといた。

「へえ、日本の高校ってどこもこんな立派なのか？」

「さすがにここまではあまりないだろうな」

「それじゃあ俺はいいところに編入したんだな」

「そういうことだ」

翼はすこし得意げにふっと笑う。

図書館や学食などの設備の良さはこの高校の売りのひとつだ。パンフレットやウェブサイトで大々的に宣伝している。ここしか知らなくても、恵まれた環境だということはそれなりに自覚していた。

「次のところまでしばらく歩くぞ」

翼はそう宣言し、教室のある校舎に戻って反対側へと進んでいく。そのころにはもう人影もまばらでだいぶ静かになっていた。これで騒がれずにすみそうだと創真はほっとしていたが――。

「あの、西園寺くん……！」

昇降口の前を通りかかったとき、おさげ髪の子供が緊張ぎみに声をかけてきた。彼女には見覚えがないのでクラスが違うのだろう。どうやら翼の靴箱のまえでずっと待っていたようだ。

「何かな？」

翼も彼女のことを知らないのではないかと思うが、その待ち伏せを不審がりもせず、それどころかよそいきの笑みを向けて問いかける。その一瞬で、彼女の顔はぶわりと真っ赤になった。

「あ……その、できれば二人きりで……」

「ああ、それなら前庭で構わないか？」

「はい」

熱が引かないまま顔く彼女に、翼は追い打ちをかけるように甘やかに微笑みかけた。そして彼女が惚けている隙にちらりと振り返り、こそっと小声でささやく。

「悪いけどちょっと行ってくる。すぐ戻るから待っててくれ」

「いや、今日はもうそのまま帰れよ。あとはオレが案内しとく」

「……そうだな、頼む」

創真の提案を聞いてすこし考える素振りを見せたものの、すぐにふっと息をついて応じた。じゃあな、と軽く片手を上げてから女子生徒のほうに向かうと、彼女をエスコートしつつ革靴に履き替えて昇降口を出ていく。

「東條、こっちだ」

「ああ……」

わけのわからないまま翼に置き去りにされて、東條は啞然としていたが、それでも創真が呼びかけると素直についてきた。並んで廊下を歩きながら、釈然としないような訝るような表情で首をひねる。

「翼、あの女の子と何かあったのか？」

「いや、告白されるだけだろう」

「告白？」

「好きです、つきあってくださいって」

「ああ、あれか……漫画で見た……」

そういえば国によってはそういう告白はしないと聞いたことがある。彼のいたところもそうだったのかもしれない。けれど、これからは否応なく日本の文化に直面することになるはずだ。

「おまえもすぐに告白されると思うぜ。覚悟しとけよ」

中性的な翼より、男性的な東條を好きになる女子も少なくないだろう。そしてそういう女子ほど恋愛に貪欲な肉食系だったりする。先手必勝とばかりに行動に移してくるような気がした。

「諫早くんもされたことあるのか？」

「……オレは一回もねえよ」

思わずムツとすると、東條はきまり悪そうにごまかし笑いを浮かべた。別に告白されたいと思っているわけではないのでどうでもいいのだが、ただほんのすこし惨めに感じて溜息がこぼれた。

「なあ」

ふたりともしばらく無言で歩き続けていたが、東條がその沈黙を破った。ちらりと隣の創真に視線を流し、何か言いづらそうな顔をしながら言葉を継ぐ。

「翼はさっきの子とつきあうと思うか？」

「いや、そういうのはみんな断ってるから」

「そうか……」

彼は安堵したように吐息まじりの声でそう答えた。表情もすこし緩んだが、すぐさま我にかえったのかしれっと素知らぬ顔になる。それを視界の端で認識しつつ、創真は気付かないふりをして黙ったまま歩き続けた。

「ここが第一体育館。オレらのクラスはよくここで体育の授業をしてる」

手前では男子バスケット部がドリブルとディフェンスの練習を、奥では男子バレー部がサーブの練習をしており、上のギャラリーではどこかの部がランニングをしていた。ボールがはずむ音、シューズの摩擦音、かけ声などがそこかしこに響いている。

「そういや、おまえ部活はどうするんだ？」

「ああ……どうしようかな……」

何となく尋ねてみると、東條は困ったように眉をひそめて曖昧な返事をする。いくつかの候補で迷っているというより、そもそもあまり気が進まないように見える。

「諫早くんは何をやってるんだ？」

「オレは何もやってない」

「中学のときも？」

「中学はフェンシング部だったけど」

「へえ、なんで続けなかったんだ？」

「勉強を優先したかったから」

「なるほど」

中学では必ずどこかの部に所属しなければならなかったのが、翼に誘われて一緒にフェンシング部に入った。しかし高校の部活は任意である。それならば将来のための勉強を優先しようとして翼と決めたのだ。

「まあ急がずゆっくり考えろよ。見学もできるし」

「ありがとうな」

東條はさわやかな笑顔で応じた。

彼を見ていると悪い人ではないというのは何となくわかる。他人を見下すような鼻持ちならない感じもない。それでもあまり彼と親しくする気にはなれなかった。

「男子更衣室も案内しとく」

そっけなく言って背を向けると、体育館脇の通路を進んで男子更衣室の扉を開いた。中には誰もいないようで物音ひとつしない。

「体育の授業のときはここで着替えるんだ。ロッカーは空いているところならどこを使ってもいい。向こうには個室があるから見られたくなければそこで着替える。三つしかないけど、使うヤツはほとんどいないからだいたいどこかは空いてるな。奥のシャワールームは基本的に授業のときは使わないことになってる」

ざっと中をまわり、ついでにシャワールームのほうも一通り見せていく。創真自身も中に入るのは初めてだ。各ブースには扉がついていて、そう広くはないがきちんとした個室になっていた。

「ほとんどフィットネスジムだな」

東條が感嘆したような呆れたような口調で言う。創真もここまでとは思っていなかったのが、表情には出さなかったもののひそかに驚いていた。

「あとはグラウンドか」

今日のところはこれで最後にしようとして決めて、内履きのまま外に出る。

視界が開けたところで、白い日差しに眉をひそめつつ正面のグラウンドを見渡すと、陸上競技部、サッカー部、ソフトボール部などが場所を分け合って練習していた。蝉の鳴き声にまじって水しぶきの音もかすかに聞こえてくる。

「まあ、特に説明するまでもないただのグラウンドだな。あっちのほうには第二体育館と武道場、そっちのほうにはテニスコートとプール、すこし離れたところには第二グラウンドもあるが、オレも行ったことはない」

「へえ」

東條は柱に手をつけて身を乗り出し、創真の説明をなぞるようにあたりを見まわしていく。ここからだ第二グラウンドや武道場は見えないと思うが、それでも興味深そうに何か覗き込んでいた。

その隣で、創真は気持ちを鎮めるようにゆっくりと息をついた。

「東條、ひとつ話しておきたいことがある」

そう切り出すと、彼は身を乗り出した姿勢のまま振り向いた。創真の顔を目にして不思議そうな面持ちになり、ゆるりと上体を起こす。

「急にあらたまって何だ？」

「翼のことだけど、あいつ、実は女だ」

「……は？」

瞬間、男性的な眉がひそめられた。

表情からはひどく混乱しているであろうことが見てとれる。それでも彼は思考を放棄しなかった。わずかに目を伏せたまま真顔でじっと考え込んだあと、挑むように創真を見据えて口を開く。

「それが事実だとして、編入生の俺にいきなり話す理由がわからない」

「公然の秘密だからだ。先生も生徒も翼が女だと知ったうえで男として扱ってるから、おまえもそのつもりでいてくれっていう話。ちなみにこの学校の理事長は翼の大叔父にあたるひとだ」

この話をするために、翼にはあえて先に帰ってもらったのである。中学生のころもクラスに転校生が来るたびにそうしてきたので、何も言っていないがおおよそ察しているはずだ。

だが、理事長のことを匂わせて牽制しているとは思ってもいないだろう。翼の大叔父というのは事実なので嘘は言っていない。あとはそれを聞いた側がどう受け取るかというだけである。

「なるほど、了解」

東條は素直に承服してくれたようだ。

その反応にひとまず安堵して昇降口に向かおうとしたが、彼はなぜか立ちつくしたまま動こうとしない。こころなしか緊張したような顔をして創真を見据え、なあ、と低めの声で切り出す。

「諫早くんと翼はどういう関係なんだ？」

「幼稚園のころからの幼なじみだ」

「幼なじみで恋人、ってわけじゃないのか？」

「全然そんなんじゃないよ」

「そうか……」

ほっと息をつき、ほんのりとうれしそうな顔になった。

もはや隠そうという気はあまりないのかもしれない。そのことを咎めるつもりもなければ権利もないけれど、最低限守ってもらいたいことはある。創真は冷ややかに見つめながら釘を刺す。

「さっき言ったことを忘れてないだろうな」

「そういえば、なんで男のふりなんかしてるんだ？」

「ああ……西園寺グループって知ってるか？」

「いや？」

日本に住んでいるひとならたいてい名前くらいは聞いたことがあるという、とても有名な企業グループなのだが、東條はずっと海外にいたので知らなくても仕方がないのかもしれない。

「まあ大きな会社だと思ってくれればいい。翼が生まれたのはその西園寺グループの創業家なんだけど、男しか跡取りになれないのに子供四人がみんな女だったから、末っ子の翼を男として育てることにしたらしい」

要するに家の事情である。いまでこそ後継者という運命を積極的に受け入れているものの、翼自身の意思で始めたことではないのだ。

それを聞いて、東條はよくわからないとばかりに首を傾げる。

「それって何の意味があるんだ？」

「えっ？」

「女ってことをひた隠しにするならわかるけど、みんな知ってるんだろう？ 男のふりをしてても、結局は女だから跡取りになれないんじゃないのか？ それとも男のふりさえしていれば跡取りになれるのか？」

そう問われ、思わずついと眉を寄せる。

話を聞いたのが幼少のころだったこともあり、そういうものだとあたりまえのように受け入れていたので、深く考えたことはなかった。言われてみれば確かに判然としない部分はあるが――

。

「多分、何かしら決まりがあつてのことなんだろう。旧家だからいろんなしきたりとかありそうだし。オレは外部の人間だから詳しいことはわからないけど」

「そうだよな。諫早くんを問いつめても仕方がないのに」

東條は苦笑して肩をすくめた。そんな彼を、創真はじとりと横目で睨む。

「だからって翼を問いつめるなよ。さっきも言ったけど、翼が女だってことは公然の秘密だからな。翼のまえでも知らないふりをしてくれないと困る」

「わかってる」

「いい意味だろうと悪い意味だろうと女扱いはするな。女だってことを身勝手に押しつけるな。たとえ翼をそういう意味で好きになつたとしても」

瞬間、彼は虚を突かれたように大きく目を見開いた。しばらくそのまま凍りついたように動きを止めていたが、やがてふっと息をつき、微笑を浮かべて意味ありげなまなざしを創真に向ける

。

やはり、と推測は確信に変わった。

彼はきっとあのとき翼に一目惚れしたのだ。同性だと思いつつも好きになつてしまったのか、同性だと思ったから好きになつたのかはわからないが、異性だと知つても気持ちは変わらないように見える。

さっそく昼飯を一緒に食べる約束を取り付けたことから考えると、かなり積極性はあるのだろう。これからも何かにつけて翼につきまってくるかもしれない。今日のように創真の居場所を奪いつつ。

いっそ、とっとと想いを告げてふられてしまえ――。

うっとうしい蝉の鳴き声がやまない。夏の日差しがじりじりと照りつけるグラウンドはさらに熱を帯びる。創真はじわりと汗をにじませて、無表情でスクールバッグを掛けなおしながら校舎のほうへ身を翻した。

第3話 王子様の想いびと

「じゃあな、諫早くん」

「ああ」

校内の案内を終えると、創真は帰る方向の違う東條と校門前で別れた。

信号を待ちながら、スクールバッグにしまってあったスマートフォンを手にとる。そこには先に帰ってもらった翼からメッセージが来ていた。

——綾音ちゃんといつもの喫茶店にいる。

——おまえも来い。

綾音というのは、創真と翼のもうひとりの幼なじみだ。同じ幼稚園でよく一緒に遊んでいた女の子で、小学校からは別々になったが、いまでも顔を合わせば普通に話をする間柄である。

ただ、行事や用事といった必然性のある理由がないかぎり、わざわざ連絡を取って会うようなことはない。おそらく帰り際にばったり会って喫茶店に誘ったのだろう。そういうことはこれまでもあった。

いまから行く、と返信して行きつけの喫茶店に急ぐ。

綾音とは高校生になったばかりのころに会ったきりなので、久しぶりに顔を見られるのはうれしい。しかし同時に、彼女自身にはまったく何の非もないのだが、ほんのすこしだけ気鬱に感じたのもまた事実だった。

「創真くん！」

喫茶店に入るなり、奥のほうから透き通った声で名前を呼ばれた。

そちらを見やると、翼と向かい合わせに座っている子がひらひらと手を振っていた。綾音である。幼いころから変わらず小柄で丸顔でほわんとした雰囲気だ。形のいい小さな頭にショートボブがよく似合っている。

「久しぶり」

「春以来？」

「だな」

短い言葉を交わし、肩からスクールバッグを下ろして翼の隣に座る。

綾音の前にはサンドイッチとオレンジジュースが、翼の前にはボロネーゼとサラダとアイスティーが置かれていた。まだほとんど減ってないので出されたばかりのようだ。確かにちょうど昼食どきではあるが——。

「おまえらここでメシ食ってんのかよ」

「せっかくだしいだろう？」

「家に用意してあるんじゃないのか？」

「連絡はしてあるから心配するな」

「まあ、別にいいけど……」

家族でもない自分がとやかく言うことではない。

綾音にしても都合が悪ければ一緒に食べていないだろう。おとなしそうな見た目に反してきちんと意思表示をする子なので、断り切れなくて言われるがままということはないはずだ。

「創真も何か食べろよ」

「……ああ」

軽く溜息をつき、メニューを眺めながら自宅に電話をかける。

言われるがままなのは自分のほうだ。あいかわらず横暴だなとあきれたような気持ちになりながらも従ってしまう。ただ、翼がそんな物言いをするのは自分に対してだけだとわかっている。ほんのすこし優越感も感じていた。

「綾音ちゃんのところはどう？」

翼はたびたび食事の手を止めつつ綾音と話をしていた。意識はしていないのかもしれないが、すこしでもこの時間を引き延ばしたい気持ちの表れだろう。もうポロネーゼはだいぶ冷めているはずだ。

そのペースに合わせているのか綾音もまだ食べ終わっていない。もっともこちらはサンドイッチなので冷める心配はない。それもあってか、時間を気にする様子もなく楽しそうに話を弾ませている。

「うちも中学のときとあんまり雰囲気は変わらないよ」

「中高一貫校はどこもそんな感じなんだろうな」

「でもやっぱり勉強は大変になるね。試験も多くて」

「確かに試験は増えたな」

翼にとっては学校の勉強などたいして苦にならないはずだが、さすがにそうは言えないだろう。試験が多いという事実にも同意する。綾音はうんうんと頷いてから思い出したように言葉を継ぐ。

「そういえば六月の全統で翼くん十二位だったよね」

「ああ……あれ、綾音ちゃんも受けてたのか……」

「不本意そうだね」

そう指摘されて翼は苦笑する。

その模試は翼が高校生になってから最も順位の悪かったものだ。よりによってそれを綾音に見られたのだから無理もない。創真からすれば全国上位というだけでうらやましい限りだが。

「どうせなら一位のを見てもらいたかったよ」

「まだこれからたくさん機会はあるんじゃない？」

「綾音ちゃんにそう言われたら頑張るしかないな」

「うん、楽しみにしてる」

ふたりの会話を聞きながらひとり黙々と食べていた創真は、あとから注文したにもかかわらず先に平らげてしまった。カトラリーを置いてアイスカフェオレを飲んでいると、ふいに綾音がこちらを向いてニコッと笑う。

「創真くんは勉強どう？」

「まあまあだな。翼には全然追いつけないけど」

「頑張っても全国上位は難しいよね」

「頭の出来が違うからな」

学校が違うので彼女の成績は知らないが、創真と同じ凡人だということは見ていればわかる。翼のようにざっと目を通しただけで記憶する、瞬時に答えを導き出す、といった天才的な頭脳はふたりとも持ち合わせていない。だからこそ相通ずるものがあるのだ。

「私もそれは身にしみてるよ」

そう肩をすくめてはにかむ彼女を見て、創真も思わずつられるようにふっと表情をゆるめた。その直後――。

「ねえ、綾音ちゃん。それなら僕が家庭教師になろうか？」

振り向くと、翼がほんのりと微笑を浮かべて綾音を見つめていた。同じ学年の家庭教師など冗談みたいな話ではあるが、たぶん本気だろう。実際、それができるくらいの能力は持ち合わせている。

さすがに綾音も驚いたらしく目を丸くしていたが、すぐにふわりと笑った。

「翼くんなら教えるのも上手そうだし家庭教師もいいかも。でも、いまは他のひとに週二で家庭教師に来てもらってるから……ごめんね」

「いや、それならいいんだ」

翼は何でもないかのように返事をして微笑んだ。しかし、綾音は気付いていないかもしれないが、目だけは真剣ですこしも笑っていなかった。

「その家庭教師ってどんなひと？」

「東大生でね、メイクとか全然してなくて服も地味なんだけど、勉強はすごくわかりやすく教えてくれるんだ。解くコツや暗記の方法なんかもためになるし。お母さんも誠実でしっかりした人ねって気に入ってるみたい」

その家庭教師に取って代われたらと考えていたようだが、思った以上に付け入る隙がなかったのだろう。そうなんだ、と柔らかく応じながら、その目にうっすらと落胆をにじませていた。

翼は、おそらく幼稚園のころからずっと綾音が好きなのだ。

もっともその思いを伝えたことはないようだ。伝えるつもりがないのか、その勇気がないのか、機会を窺っているのかはわからない。ただ、もしかしたら綾音もすでに気付いているかもしれない。

きっかけは、幼稚園でのとある出来事だろう。

当時、翼は一部の男子にいじめられていた。女なのに男のふりをしているなんておかしいとからかわれて。創真は友人として必死に翼を守ろうとしていたが、それだけでは駄目だったのだ。

男の子でも、女の子でも、翼くんは翼くんだよ――。

きっと、必要だったのはアイデンティティを認める明確な言葉。

それをほわんとした笑顔で言ったのが綾音である。なぐさめなどではなく、おそらくただ無邪気に思ったことを口にただけ。だからこそ響いたのだろう。翼はもう誰にからかわれて

も気にしなくなったのだ。

そしてこのことで綾音を好きになったに違いない。それまで創真とばかりいたのに、何かにつけて綾音のところへ話しに行くようになり、そうこうしているうちに三人でいることがあたりまえになっていた。

小学生になると、学校が分かれたので会うことも少なくなってしまったが、それでも翼の気持ちは一途なまま変わらなかったようだ。十年前から、高校生となったいまに至るまでずっと――

「ありがとう、お話しできて楽しかった」

喫茶店から出ると、綾音は両手で鞆を持って笑顔でそう言った。

夏用の白いセーラー服と膝丈のスカートがよく似合っている。小柄なうえ幼げな顔立ちなので、中学生、下手をすれば小学生にも見えかねない。そんな彼女を、翼は愛おしげなまなざしで見つめている。

「僕も綾音ちゃんと話せてうれしかったよ」

「うん、創真くんも来てくれてありがとう」

「ああ……」

急に笑顔を向けられて、創真は思わず当惑して目を泳がせてしまった。社交辞令だろうが、だからこそう反応すればいいのかわからない。

「そういえば」

ふいに翼が切り出した。

「来月下旬にうちの高校で文化祭があるんだ。一般の来校も歓迎してるから綾音ちゃんもよかったら来てよ。多分うちのクラスでも何かやることになると思うし。日程とか決まったら連絡するから」

「うん、都合がいたら行くね」

中学のときは学校内の行事でしかなかった文化祭だが、高校では一般公開する。

そのときには綾音を誘おうと翼は前々から考えていたのかもしれない。そして待ちわびていたのかもしれない。そうでなければ、まだ何も準備が始まっていないこの段階で声をかけたりしないだろう。

綾音と別れて、創真と翼は並んで帰路につく。

降りそそぐ昼下がりの日差しはかなりきつい。空調の効いた喫茶店との温度差で体が若干だるく感じる。じわじわと汗をにじませながら、あいかわらず涼しげな顔をしている隣の翼をちらりと窺う。

「なあ……」

「ん？」

翼はすこしだけ振り向いて先を促すように相槌を打った。めずらしくどこか気の抜けた様子で。綾音と過ごした時間の余韻にひたっていたのだろうか。

創真はそっと目を伏せて、肩からずれかかったスクールバッグを掛けなおす。

「家庭教師なんてどういうつもりだったんだよ」

「綾音ちゃんの力になりたいと思っただけさ」

「いくらおまえでもそんな余裕はないはずだぜ」

「勉強は週四日だし無理じゃないよ」

ここでいう勉強というのは、学校の授業や試験に関する勉強のことではない。将来のために必要な勉強のことだ。経営学、英会話、礼儀作法、心理学、マーケティング、護身術など幅広く学んでいる。

基本的に西園寺の後継者となる翼のための教育で、西園寺の邸宅に教師を呼んで行われており、創真は補佐役になる人間として同席させてもらっている。だからとやかく言える立場ではないのだが。

「でも、おまえ父親のようにになりたいんだろう」

「……そうだな」

一瞬、その王子様のような端正な顔にふっと自嘲めいた笑みが浮かんだ。けれどすぐに気を取り直したように青い空を見上げて、大きく呼吸をする。

「確かにまだ足りないところばかりだしな」

「オレも一緒に頑張るから」

「そうだぞ、創真こそもっと頑張れよ」

ここぞとばかりにからかいまじりに言い返されて、創真は苦笑した。

すぐに理解して自分のものにしてしまう翼とは違い、ついていくのがやっとならぬ身についているとまでは言いがたい。だからといって、学校のほうを疎かにしてまで励むのは本末転倒である。

なかなか苦しい状況だが、どうにか食らいついていくしかないだろう。

ずっと翼のそばで支える——その約束が、きっと翼のそばにいることを許される唯一の理由になる。だからそれを遂行できるだけの能力を身につけなければならない。この場所を誰かに奪われることのないように。

「オレ、絶対に翼の隣に立てる人間になるから」

「期待してるぞ」

そう応じて、翼は挑発するような笑みを見せる。

綾音のように愛おしげな目を向けられることは決してないけれど、この表情は自分だけのものだ。それだけで十分だ。胸のうちで自分自身にそう強く言い聞かせながら、創真は静かに頷いた。

第4話 もうひとりの王子様

十月に入って衣替えもすみ、もうすっかり秋だ。

この一か月で東條は十分すぎるほどクラスに馴染んでしまった。自身のスペックの高さなどで意識していない様子で、誰とでも気さくに嫌味なく話をするので、男女問わずに好かれている。

それでいて品の良さも感じられるため、女子のあいだではひそかに「もうひとりの王子様」と呼ばれ始めていた。もちろん元祖王子様は翼だ。ふたりが一緒だと目の保養になると騒がれていたりする。

実際、このふたりは友人として行動をともにすることが多い。厳密には創真もいるので三人だ。席が近いこともあって休み時間にはよく話をしているし、昼には一緒に学食にも行っている。まさか、こうなるとは思わなかった。

とっとと翼に想いを告げてふられてしまえばいい、そして距離を置くようになればいいと願っていたが、いまのところそうした素振りはない。ごく普通に男友達として接しているように見える。

女扱いしないよう頼んだから律儀に守っているのだろうか。それともまずは友人として距離を縮めようとしているのだろうか。もしかしたら男として生きる翼を尊重してのことかもしれない。

いずれにしても、翼とふたりの時間を奪われて続けているのが現実である。ただ、創真のこともきちんと友人として扱ってくれるので、意外と居心地は悪くない。それがすこしくやしくもあった。

「行けっ、翼！！」

誰かがそう叫ぶより早く、翼は東條からのパスを受けるべく前に飛び出し、その勢いのままサッカーボールを蹴り抜いた。ボールはゴールポストの右上隅に突き刺さり、ネットを揺らす。

「やったな！」

「ああ」

翼は東條やまわりのチームメイトとハイタッチをして、喜びを分かち合った。

体育館から扉を開けてその様子を見ていた上級生の女子たちは、ふたりの王子様の関係プレーとハイタッチに黄色い声を上げている。制服のままなので体育の授業をしているわけではないようだ。

創真も同じチームだったが、ディフェンダーとして自陣にいたので遠巻きに見るだけである。わざわざそのために駆け寄っていくほどのものではないだろう。体育の授業にすぎないのだから。

あれは、オレの役目だったのにな——。

東條が来るまでは創真がミッドフィルダーとして翼をアシストしていたが、そのポジションを彼に譲るはめになった。サッカースクールでミッドフィルダーだったと聞けばそうせざるを得

ない。

実際、創真よりはるかに上手いので文句も言えない。九才から十二才までサッカースクールに入っていたらしく、高校でもサッカー部に入ろうかどうしようか悩んでいたが、結局やめたとっていた。

「え、サッカーやってなかったのか？」

翼のゴールのあとまもなくチャイムが鳴り、授業が終わった。

これで今日は終業となるので、みんなのんびりとサッカーボールやビブスなどを片付けている。そんな中、東條は翼がサッカーを学んだことがないと聞いて目を見張った。

「ああ、体育の授業でしかやってないな」

「それであんなシュートが打てるのか」

「シュートを打つことしかできないんだ」

「いやいやいや、十分すぎるだろう」

翼がサッカーに詳しくないのは事実だが、さすがにシュートしか打てないということはない。ただ、やはり最も得意なのがそれということで、いつもストライカーを希望しているのだ。

「諫早くんは？」

「オレも体育の授業でしかやってない」

「サッカーには興味なかったのか？」

「テレビで代表戦を観るくらいだな」

「そうかあ」

創真が用具室でビブスを所定の場所にしまっている後ろで、東條は残念そうな声を上げた。その隣でサッカーボールの籠を片付けていた翼が愉快そうに笑う。

「僕らはすこしフェンシングをやってたんだ」

「あ、諫早くんには聞いてたけど、翼もだったのか」

「ああ」

翼は頷き、ちょうど用具室の奥から戻った創真を目にして口元を上げる。

「創真はこう見えてなかなか強いぞ」

「こう見えてって何だよ……」

思わず言い返したが、フェンシングが強そうに見えないという自覚はある。手足が長いほうが有利だと思われがちだし、高貴なイメージもあるので、小柄で地味な創真がフェンシングというだけで驚かれることが多い。

現に、東條もあからさまに意外だという顔をしている。

「翼とだったらどっちが強いんだ？」

「互角だな。勝負は五分五分だったよ」

「へえ、それは見てみたいな」

「ははっ、もうなまってるだろうな」

三人で並んで更衣室のほうに向かいながら、翼は笑い飛ばす。

創真も、中三の夏に部を引退してから丸一年あまり剣を握っていないので、もう昔のように動ける自信はない。体力作りの運動、筋トレ、護身術の練習なんかは軽く行っているが、フェンシングの動きはまた別なのだ。

今後、もうやることはないだろうな――。

もともとフェンシングに思い入れはない。勉強も運動も容姿も何もかも翼に遠く及ばない中、唯一互角に渡り合えるものなので惜しい気はするが、だからこそ翼が続けないのであれば意味がないのだ。

「本当にあなたはやることなすこと派手ね」

若干あきれたような声音が聞こえて振り向くと、翼の姉の桔梗が段ボール箱を抱えて渡り廊下で立ち止まり、こちらを見ていた。同様に段ボール箱を抱える数名の男女を付き従えて。

すぐに翼はにっこりと王子様の笑みを全開にして、歩み寄っていく。

「体育館から見ていたのは桔梗姉さんたちでしたか」

「クラスの一部の女子よ」

桔梗はそっけなく訂正すると、翼のあとをついてきた創真と東條を見やって微笑む。翼が警戒心を露わにしたことに気付いたが、目が合ったのに無視するわけにもいかず、創真は軽く会釈する。隣の東條もつられて会釈した。

「あなたは編入生の東條くんかしら？」

「あ、はい……はじめまして」

「二年の西園寺桔梗よ。よろしくね」

「先輩のことは翼から聞いてました」

「あら、悪口でなければいいのだけれど」

「あ、いや……」

才色兼備だが女王様気質で策士、というのが悪口かどうかは微妙なところだろう。東條は気まぐげに口ごもりつつ目を泳がせていたが、隣で翼が笑いを噛み殺していることに気付くと、あわてて話題を変える。

「あ、えっと、先輩たちは体育館で何をやってたんですか？」

「文化祭の準備よ。クラスで演劇をやるの」

文化祭ではクラスで何かひとつ出し物をしなければならない。人気があるのはやはり模擬店で、創真たちのクラスもそれである。逆に演劇は準備が大変なので敬遠されがちだと聞いていた。

桔梗のクラスの出し物については翼も初耳だったらしい。折り合いの悪いきょうだいなのであまり話をしないのだろう。一瞬、驚いたような興味をひかれたような表情を見せたが、すぐさま挑発的な目つきになる。

「もちろん主役は桔梗姉さんなんですよ？」

「ええ、もちろんというわけではないけれど」

「脇役をやる気なんてさらさらないでしょう」

「そうかもしれないわね」

少々棘のある言葉を、桔梗はたいしたことではないかのように受け流す。その余裕のある姿からは女王様の貫禄が感じられた。

「脚本も私が書いたの。衣装や装置はみんなのおかげでいいものになりそうだし、演技も日々頑張っているところよ。午前午後の二回公演で各五十分の予定だから、都合のいいときに見に来てちょうだい」

「ぜひ行かせてもらいます」

間髪を入れずに返事をしたのは東條だ。

単なる社交辞令なのか、本当に興味をもったのか——もしかしたら翼がつかかるのを阻止したかったのかもしれない。桔梗もそう思ったのか、東條を見つめたまま艶然と目を細めて得心したように言う。

「なるほど、もうひとりの王子様ってわけね」

「あ、いや……そんな柄じゃ……」

「翼よりあなたを好むひとは少ないのよ」

「そんなことないと思いますけど」

「そういう謙虚なところがいいって聞くわ」

「別に謙虚ってわけでも……」

「ふふっ、思ったよりもかわいらしいのね」

「え、あの……」

東條はしどろもどろで視線を泳がせる。

彼のこんな姿は初めて見たかもしれない。いつもは言い寄られてもそれなりにうまくかわしているのに、相手が女王様だからか、翼の姉だからか、どうにも普段の調子が出せずにいるようだ。

「圭吾をからかうのはやめてもらえませんか」

「あら、思ったことを伝えたまでよ」

冷やかに睨む翼に、桔梗は素知らぬ顔でとぼけたようにそう返した。しかしすぐに華やかな笑みを浮かべてこちらに目を向ける。

「東條くんや創真くんともっとお話ししたかったけれど、今日のところはこれで失礼するわ。ごきげんよう。またいつかゆっくりと翼のいないところでお話ししましょう」

「あ……えっと……」

東條は翼のほうを気にしながら戸惑っていたが、創真は黙って目礼した。

そんなふたりに、桔梗は段ボール箱を抱えたまま優雅に会釈をすると、黒髪をなびかせながら颯爽と渡り廊下を進んでいく。後ろのクラスメイトたちも軽く会釈をして歩き出した。

「ったく……」

翼があきれたような溜息まじりの声を落としたあと、三人は更衣室へと向かう。急ぐ必要がないことは翼もわかっているだろうが、それでも足早になりながら苦々しげに言葉を吐く。

「僕のものとなるとすぐにちょっかいを出してくるな、あのひとは」

「えっ？」

「僕を孤立させるために、おまえたちを自分の側に引き入れようとしてるんだろう。創真はもうずいぶん前から狙われているんだが、圭吾にも目をつけたみたいだな」

前を向いたまま冷静にそう説明すると、再び溜息をついた。

一方で東條はにやけるのをこらえきれないような顔をしていた。僕のもの——その言葉に深い意味がないことくらいわかっていると思うが、それでもうれしいのだろう。

「だから姉さんに何を言われても真に受けなくていい」

「わかった」

翼に頼まれるとあわてて表情を引きしめて頷く。

しかし創真としては桔梗がそこまでするとは思えなかった。本気で引き入れるつもりはなく、翼へのちょっとした嫌がらせで声をかけたのではないだろうか。それも憶測でしかないけれど。

いずれにしても自分が桔梗の側につくことなどありえない。桔梗とも良好な関係を築ければとは思っているが、あくまで翼の味方である。必要とされるかぎり翼のそばにいるつもりだ。きっと東條も——。

「俺はどんなことがあっても絶対に翼を裏切ったりしない」

「それならよかった」

真摯な訴えに、翼は安堵したようにほっと表情をやわらげた。つられるように東條も照れくさそうにはにかむ。そんなふたりの隣で、創真はひとり気配を消したままそっと静かに目を伏せた。

。

第5話 文化祭

「翼、それ三番テーブルな」

創真が作業の手を止めることなく、用意したシフォンケーキセットを目線で示してそう言うと、燕尾服を着こなした翼は了解と答えてホールへ運んでいく。疲れなど微塵も感じさせない美しい所作で――。

今日は、創真たちの通う桐山学園高等学校の文化祭である。

創真たちのクラスは学食の一角で執事喫茶なるものをやっている。燕尾服などを着用した見目麗しい執事たちが、お嬢様やお坊ちゃまを屋敷内のティーサロンでおもてなしするというのがコンセプトだ。

きっかけは、とある女子の提案だった。

せっかく見目麗しい王子様がふたりもいるのだから活用しない手はない、絶対に執事喫茶をやるべき、私だけじゃなくみんな見たいはず、と鼻息荒く主張して、これがクラス内で過半数の支持を得たのだ。

ただ、ティーサロンをどうするかが問題だった。教室や屋台では雰囲気が出ない。それなら学食を借りられないかという話になり、駄目元で学校側と交渉してみたところ許可が下りたのである。

さすがに本物の執事喫茶のような豪華な英国調ではないが、天井が高く、全面ガラス張りの窓からは庭が見渡せて、テーブルや椅子もシンプルながら洒落ていて、これはこれで悪くない雰囲気だろう。

メニューはシフォンケーキと紅茶のみにした。シフォンケーキは洋菓子店からできあがりを入れたので、切って生クリームとミントの葉を添えるだけ、紅茶もティーバッグなのでお湯を注ぐだけである。

創真は裏方で、シフォンの皿にミントの葉を添える担当だった。

見目のいい男子は執事として接客を任されている。もちろん翼も東條もそちら側だ。ふたりがそろうのは十二時から十三時までということで、十二時すぎの今、かなりの待ち行列ができていた。

「わたくしの執事呼んでちょうだい」

どこか愉快そうな響きをはらんだ声が聞こえて入口に目を向けると、桔梗が堂々とした佇まいでそこに立っていた。その後ろには、不安そうな表情でチラチラとまわりを気にする綾音がいる。

お待ちくださいとドアマンは恭しく一礼して呼びに行こうとするが、桔梗の声が聞こえていたのか、当の執事はすでに彼女たちに向かって颯爽と歩みを進めていた。そして正面ですっと足を止める。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

その執事——翼は、どこか艶めいた笑みを浮かべて恭しく頭を下げた。

そのまま、美しい庭の臨める窓際の席にふたりを案内する。

そこは翼の要望により特別に予約席として空けられていた。綾音のためだが、表向きは姉の桔梗を招くためということになっている。綾音にいらぬ面倒が降りかからないよう配慮したのだ。

桔梗が協力してくれたのは、彼女も幼なじみとして綾音のことをかわいがっているからだろう。さきほどの振る舞いからすると、翼をかしずかせてみたいという気持ちもあったのかもしれない。

「どうぞ」

翼は流れるような所作ですっと椅子を引いて綾音を座らせ、続いて同じように桔梗も座らせる。そわそわした綾音とは対照的に、桔梗はさすが由緒正しい旧家のお嬢様だけあって堂に入っていた。

「お茶をご用意しますのでお待ちください」

「ええ」

「シフォンケーキはいかがいたしましょう？」

「いただくわ。綾音ちゃんも食べるわよね？」

「はい、お願いします」

綾音が答えると、翼はふっとかすかに表情をゆるめる。できることならいつまでもそこにいたかったのだろうが、丁寧に一礼して下がり、裏方に注文を伝えてから他のお嬢様方の接客にまわった。

それでも桔梗たちに向けられる視線がやむことはなかった。特別扱いされているからというより、桔梗の存在が原因のような気がするが、綾音は居たたまれないとばかりに身を縮こまらせる。

「みんな並んでるのに本当に良かったんでしょうか」

「翼が勝手にしたことなんだから気にする必要はないわ」

「でも断ったほうがよかったのかなって」

「私は午後公演の準備があるからそんなに待てないの」

「あ……それで翼くんはわざわざ席を……」

そう誤解しても仕方のない流れだろう。もしかすると桔梗があえて誘導したのかもしれない。彼女は肯定も否定もせず、ただにっこりと華やかな笑みを浮かべて言う。

「そんなことよりせっかく来たんだから楽しみましょう」

「……そうですね」

綾音は表情をゆるめ、気を取り直したように明るい声でそう応じた。

「これ綾音ちゃんたちのところ」

他のテーブルから戻ってきた翼に、二人分のシフォンケーキセットを差し出しながら言うと、翼はほんのりと頬をゆるませて了解と返事をした。すぐに表情を作り、それまでよりもいっそう

流麗な所作で運んでいく。

「お待たせしました」

涼やかに一礼すると、綾音と桔梗のまえにそれぞれシフォンケーキを置き、ポットの紅茶をティーカップに注いでその右側に並べた。

「ありがとう」

「ごゆっくりお過ごしくださいませ」

翼が丁寧に辞儀をして下がると、綾音はそれを見届けてからティーカップに手を伸ばし、向かいで姿勢よく紅茶を飲んでいた桔梗と会話をはずませる。

「これ渋みが少なくて飲みやすいですね」

「ええ、おそらくニルギリね」

「ニルギリって紅茶の種類ですか？」

「そうよ。産地の名前と呼ばれているの」

「初めて聞きました」

「まあアッサムほど有名ではないわね」

「翼くんが選んだのかな」

「くやしいけれどいい選択だわ」

桔梗が肩をすくめてみせると、綾音もつられるようにくすくすと笑った。それからふたりで示し合わせたようにフォークを手に取り、シフォンケーキにすこし生クリームをのせて口に運ぶ。

「このシフォンケーキすごくおいしい」

「母がひいきにしている店の看板商品だわ」

「じゃあ、これも翼くんが選んだのかな」

「お店に無理を言っていないか心配ね」

「ふふっ」

綾音は冗談だと思っているのだろう。

しかし実際は桔梗の懸念どおりで、洋菓子店に無理を言ってシフォンケーキを作ってもらっていた。本来は店頭分しか作らないのだが、お得意様である西園寺の頼みなので特別にということらしい。

そのうえ、価格もこちらの予算内に収まるように抑えてもらったという話だ。翼は交渉の結果だとあたりまえのように言っていたが、どのような交渉をしたのかは何となく怖くて聞けないでいる。

「綾音ちゃん、お待たせ」

翼と創真は制服に着替えて、学食前の庭で待っている彼女のもとへ向かった。

ふたりとも十時から十三時までの担当だったので、そのあと綾音と一緒にまわる約束をしていたのだ。彼女はこちらに気付くとふんわりと笑った。ちなみに桔梗は演劇の午後公演があるので準備に戻ったはずだ。

「お疲れさま。執事があんなにサマになるなんてさすが翼くんだね」

「ありがとう」

翼はすこし照れたようにはにかんだ。綾音に見せるために引き受けたわけではないと思うが、綾音に見せるからこそここまで熱心に取り組んだのだろう。彼女の言葉で報われたに違いない。

「創真くんもギャルソンみたいな衣装すごく似合ってた」

「ああ……」

壁で隔てられているわけではないので客からもキッチンは見える。それゆえ裏方も雰囲気合わせるためにカーベストを着用していたのだ。特に創真はカウンターにいたので見えやすかったのかもしれない。

ただ、あまり似合っていないことは自分でわかっているので、無理して褒めてくれなくてもいいのにとすこし微妙な気持ちになった。もちろん他意があったとは思っていないけれど。

三人はいろいろな食べ物の模擬店を見てまわる。

翼が見たことのない女子をつれているからか、その子が有名女子校の制服を着ているからか、周囲からチラチラと好奇の目を向けられていた。だが、ふたりとも気にしている様子はない。

綾音はただ単に気付いていないだけかもしれないが、翼が気付かないわけがない。いつもはファンサービスとばかりに笑顔を振りまいているのに、いまは綾音しか見る気がないのだろう。

「綾音ちゃん、何か食べたいものがあったら言ってね」

「んー、さっきのカラフルなお団子がちょっと気になるなあ」

「じゃあ食べに行こう」

翼は声はずませ、綾音をエスコートしながら団子の模擬店へ向かう。創真はふたりの後ろをついて歩いた。ときどき綾音が振り返って微笑みかけてくれるが、翼には放置されている感じだ。

「ねえねえ、西園寺くんというあの子、誰？」

どこからかすすっと寄ってきた同じクラスの女子が、声をひそめて耳打ちするように尋ねてきた。その浮き立った声音から、嫉妬ではなく興味本位で詮索していることが窺える。

「オレと翼の幼なじみだ。つきあってるとかそういうことはない」

「そ、そうなんだ」

知りたいであろうことを先回りして答えてやると、彼女はうろたえ、ごまかし笑いを浮かべながらそそくさと離れていく。向こうで友人たちと「幼なじみなんだって」と話している声が聞こえてきた。

中学のときも目撃されて尋ねられたことがあったので、すでに知っているひともいると思うが、やはり知らないひとのほうが圧倒的に多いのだろう。これが広まって落ち着いてくれればと思う。

「いらっしゃいませ！」

団子の模擬店につくと、三人がそれぞれ購入して窓際の席に座った。

綾音が買ったのは、白い串団子に色とりどりの餡をかわいらしく盛り付けたものだ。いかにも女の子が好みそうな見映えで、彼女も例にもれずスマートフォンで写真を撮ってから食べ始めた

。

「ん……これ、味もなかなかおいしいよ」

気を遣っているわけではなく本当にそう思っているのだろう。彼女は団子を頬張ったまま幸せそうに顔をほころばせている。その姿を見つめながら翼は満足したように微笑んだ。

「気に入ってもらえてよかった」

「翼くんも創真くんも食べないの？」

「そうだね」

ふたりして綾音の食べるさまを眺めていたが、彼女に促されてようやく自分たちも食べ始める。翼は綾音と同じカラフルな団子で、創真は五平餅だ。綾音は五平餅が気になるのかチラチラとこちらを見ていた。

「よかったら一口食べるか？」

「えっ?!」

尋ねてみると、彼女はぶわりと顔を真っ赤にしてうろたえた。

同時に翼がバツとすさまじい勢いで振り向いた。その一瞬、驚愕と憤怒の入り混じったような表情をしていたが、どうにか押し隠して、若干ぎこちないながらも平然とした顔を取り繕う。

「女の子に食べかけのものをあげるなんて失礼だぞ」

「口をつけていないところなら別に構わないだろう」

「ダメだ」

その声には、あからさまに苛立ちがにじんでいた。

どうせ綾音と親しくするのが面白くないだけだろう。もちろん本人が嫌なら無理強いするつもりはないが、翼に命令される筋合いはない。そんな反発心から思わずむすつとしてしまう。

「あ、あのね……!」

自分をめぐる剣呑な雰囲気困惑したように、綾音が声を上げた。

「創真くんが食べてるのは何だろうってちょっと気になっただけで、別に食べたかったわけじゃないから。黙ってじろじろ見ていたせいで誤解させちゃったんだよね。なんか、ごめんね?」

「あ、いや……こっちこそごめん……」

創真は我にかえると急に申し訳なさを感じた。翼も気まずげに目を伏せる。

そんなふたりを見て、綾音は心から安堵したようにほっと息をついた。そして、せっかくだから喧嘩しないで楽しく過ごそうよ、といつものように明るくほんわかと笑って言った。

「わ、もういっばいだね」

模擬店をまわったあと、三人は桔梗の演劇を見るために講堂へやってきた。

開演まで十五分近くあるのに観客席はもう八割方埋まっており、熱気に満ちていた。そうこうしているあいだにも続々と席が埋まっていく。翼はざっとあたりを見渡すと、目標を定めたかのように迷いなく早足で歩き出した。

「すみません」

翼はすこし屈んで、席に着いている女子生徒二人にこやかに声をかける。相手はそれが翼だ

とわかとひどく驚いていたが、翼は構わず話を進める。

「僕たち三人で座りたいので、よろしければひとつずつそちらに詰めてもらえませんか？」

「あ……はい！」

女子生徒二人はそそくさとひとつずつ隣に移動した。

己を最大限に利用したさすがとしか言いようのない手際に、創真は半ばあきれつつも感心する。とにかく三つ並んだ席が確保できたのだからありがたい。それも前方の中央寄りという見やすそうなところだ。女子生徒の隣に創真が、中央に翼が、その向こうに綾音が座った。

「綾音ちゃん、よかったら飲み物を買ってくるけど」

「私は大丈夫だよ」

席に着いてからも、翼はかいがいしく世話を焼こうとしていた。というよりただ浮かれて構っているだけだろう。創真のほうには顔を向けようとししないで、綾音にばかり話しかけている。

ようやく寂しい十五分が過ぎて、幕が上がった。

物語は、中世ヨーロッパを思わせる架空の国を舞台とした恋愛活劇だった。主役ふたりの演技がとても上手く、剣術を中心としたアクションもあり、ドレスや騎士の衣装もなかなか立派で、エンターテイメントとして見応えがあった。観客の反応も上々で拍手がなかなか鳴り止まなかったくらいだ。

「面白かったね！」

綾音も満足したらしく、講堂をあとにしながら興奮ぎみに声をはずませる。

「テンポがよくてドラマチックだったし、桔梗さんはすごく演技が上手だったし、ドレスのまま剣で戦うところとか、敵を前にして一步も引かないところとか、気高くて格好良かったなあ」

「桔梗姉さんのことだから、自分のやりたいこと見せたいことを詰め込んだだけだろう」

翼は毒づくが、あながち言いがかりでもないかもしれない。

なにせヒロインの令嬢がやたらめったら男前なのだ。特にドレスでのアクション、華麗な剣さばきは、桔梗でなければここまで魅力的に演じられなかった。自信があったからこそ入れ込んだのだろう。

「肝心要のストーリーは薄っぺらで安直だったけど」

「そうかなあ。わかりやすくよかったと思うよ」

「まあ文化祭ならあのくらいでちょうどいいのかもな」

確かに文化祭の観客はあまり演劇を見ない層がほとんどだろうし、重厚な物語だったらここまで盛り上がっていなかった気がする。エンターテイメントに振り切っていたからこそ満足度が高かったのだ。

「でも、あの桔梗姉さんがこんな話を書くとは思わなかったよ。純文学やミステリみたいな小難しい話が好きなひとなのに、まさかロミジュリもどきの恋愛活劇だなんて」

「ふふっ、確かに」

綾音は笑いながら同意するが、ふいに小首を傾げると何か考える素振りを見せる。

「もしかして桔梗さん好きなひとがいるのかなあ」

「さあ、恋愛にうつつを抜かすタイプではないと思うけど」

「そういうところを翼くんに見せてないだけかもよ？」

「想像もつかないな」

翼は苦笑して肩をすくめた。

別に桔梗に好きなひとがいてもおかしくないと思うが、そういう恋愛絡みの話はまったく聞いたことがないし、確かにあまり想像はつかない。

「恋愛かぁ」

ふと綾音が思いを馳せるようにぼつりつつぶやく。

まずいな——翼のまえで好きなひとについて尋ねられたら困る。そっと翼を窺うと、緊張した面持ちでチラチラと綾音を盗み見していた。その綾音もどこか硬い表情で目を泳がせている。

なんとなく気まずいような探り合うような空気ではあるが、藪蛇になりそうで触れることができない。ほかのふたりも同じだろう。創真は息を詰めてただ黙々と足を進めていたが——。

「飲み物を買ってくるよ。綾音ちゃんたちはこの辺で待ってて」

翼は沈黙を破り、うっすらと微笑んでから校舎のほうへ駆けていった。

創真は内心ほっとしつつ、通行の邪魔にならないよう綾音とともに端に寄った。木陰に並んで立ち、秋めいた風がゆるく頬を撫でるのを感じながら、行き来する人たちをぼんやりと眺める。

そういえば綾音とふたりきりになるのはめずらしいな、と何気なく隣を見ると、たまたまなのかこちらを向いていた彼女と目が合った。彼女はすこし驚いたように瞬きをしたあと、くすりと笑う。

「せっかく一緒にいるのにあんまり話せてなかったね」

「まあな……でも、翼とはたくさん話せたから良かっただろう」

「うん、だけど創真くんともたくさん話したかったなって」

「そんなことを言うのは綾音ちゃんくらいだ」

軽くそう応じると、彼女は当惑したように曖昧な笑みを浮かべて目を伏せる。

「私は本当にそう思ってるよ？」

「あ、別に疑ってるとかじゃなくて」

「だって創真くんが好きなんだもん」

「えっ？」

思わず聞き返すが、彼女は下を向いたままこちらを見ようとしなかった。横髪に覆い隠されていて表情はよくわからない。戸惑っているうちに、ペットボトルを抱えた翼が軽やかに走りながら戻ってきた。

「綾音ちゃん、はい」

「ありがとう」

「創真もついでだ」

「ああ……」

綾音に続いて、創真も差し出されたペットボトルを受け取る。

翼は何事もなかったかのように笑顔を見せている。離れているあいだに気持ちを切り替えてきたようだ。綾音も普段と変わらない様子である。もうさきほどのようなぎこちない空気はない。

けれど、創真だけは落ち着きを取り戻せずにいた。

その原因である綾音をこっそりと横目で窺っていると、彼女は視線に気付いたように振り向いてふわりと微笑んだ。その心情も、その意図も、あの言葉も——創真は何ひとつわからず混乱するばかりだった。

第6話 心に決めたひと

「おい、創真！」

ふと額のまんなかに鋭い痛みが走り、創真は我にかえった。

反射的にそこを押さえて顔を上げると、翼があきれたような面持ちで片手を掲げながら立っていた。その隣では東條が苦笑している。額の痛みはどうやら翼のデコピンだったらしい。

「ぼーっとしてないで帰り支度しろよ」

「あ……ああ……」

いつのまにかホームルームは終わっていたようだ。教壇に担任の姿はなく、あたりは生徒たちのおしゃべりで楽しげにざわめいており、翼も東條もすでにスクールバッグを肩にかけてそこにいる。

創真はようやく状況を把握して、あわてて帰り支度を始めた。

「おまえ、文化祭が終わってからちょっとおかしくないか？」

校門前で東條と別れ、翼とふたりで帰路についているときにそう指摘された。

この一週間、いつのまにかぼんやりと考えをめぐらせてしまい、学校のみならず西園寺での勉強も集中できずにいたのだ。自分でもどうにかしなければと思っているのだが、なかなか難しい。

「悪い、もうすこしだけ待ってくれ」

「悩みがあるなら相談にのるぞ」

「いや……個人的なことだし……」

創真くんが好きだから——綾音にそんなことを言われたなんて話せるはずもなく、後ろめたさに目を泳がせながら言いよどんでしまった。

「僕を信頼できないか？」

「……………」

まっすぐに真摯なまなざしを向けられて、ますます罪悪感が募る。

それでも話すという選択肢はない。創真自身が話したくないというのもあるが、そもそも綾音に断りもなく話すわけにはいかないだろう。目をそらしたままどう答えようか悩んでいると、翼が溜息をついた。

「まあいいさ。無理強いするんじゃ意味がないしな。だけどいつまでもこんな調子じゃ困る。とりあえず明日の勉強は休んで気持ちを整えろ。いいな？」

「……わかった」

休みたくなくても、そんなわがままを言える立場ではなかった。

西園寺の厚意で勉強に同席させてもらっているのだから、翼の足手まといになることだけは許されない。いつまでもこんな状態が続いたら見捨てられてしまう。翼の隣にいられなくなるのだ——。

「あした、ふたりだけで会って話ができないかな」

その日の夜、悩んだすえに電話で綾音にそう持ちかけた。

このところ気もそぞろなのは、彼女がどういうつもりかまるでわからないからだ。こればかりはいくら考えたところで答えは出ない。本人に聞くしかないという結論に至ったのである。

「文化祭でのこと？」

「ん……まあ……」

ふたりだけで、という時点でだいたい想像がつくだらうと思っていたが、それでもいきなり臆面もなく言及されるのは予想外で、若干動揺してしまった。

「あしたは午前中なら大丈夫だよ」

「あ……じゃあ、十時にいつもの喫茶店で……」

「うん」

一方で、綾音は話しぶりも声も普段とまったく変わらない。それだけに思考が読めず、漠然とした不安がじわじわと胸に広がっていく。

「それじゃあね」

「ああ」

返事をする、余韻もなくすぐに通話が切られた。

創真はスマートフォンを下ろして、腰掛けていたベッドにそのまま仰向けになり、白い天井を眺めながら小さく息をついた。

翌日、約束した時間の三十分前から喫茶店で待っていた。

注文したコーヒーをちびちびと飲みながら、暇つぶしにスマートフォンでニュースを読むが、ほとんど頭に入っていない。ただ文字を目で追いかけているだけである。

「創真くん、おはよう」

「ああ……おはよう」

綾音は約束した時間の五分前に来た。

いつもと変わらないほんわかとした笑顔を見せている。今日は私服で、ざっくりとしたオフホワイトのニットに、グリーンチェックのミニフレアスカート、小さめのリュックサックという出で立ちだ。

創真がスマートフォンをポケットにしまいながら向かいのソファ席を示すと、綾音はリュックサックを下ろしてそこに座り、水とおしぼりを持ってきた店員にオレンジジュースを注文する。

「ごめんね、なんか言い逃げみたいになっちゃって」

店員が戻っていくと、彼女は気まずげに肩をすくめてそう言った。

創真はあわててふるふると首を振る。本人の口からきちんと真意を聞こうと思っただけで、謝ってもらいたかったわけではないし、そもそも言い逃げだなんて考えたこともなかった。

「あのあとすぐに翼が戻ってきたから仕方ないよ。オレも聞き返せなかったし。でもこの一週間ずっと気になってさ」

「うん……」

綾音が緊張したように表情を硬くするのを見て、創真もつられて緊張する。けれどここまで来たらもう引き下がれないし、引き下がるつもりもない。

「オレのことが好きって」

「うん」

「どういう意味で？」

「……わかってるくせに」

綾音はぎこちない笑みを浮かべた。

しかし、わかっていなかったからこんなに悩んでいたのだ。もちろんそういう意味だと考えなかったわけではないし、客観的にはそう考えるのが普通だということはわかっていたが――。

「なんでオレなんだ？」

ちんちくりんだし、地味だし、根暗だし、勉強もスポーツも普通だし、どうしても男として好かれる要素があるとは思えない。訝しむ創真に、綾音はふっと表情をやわらかくして答え始める。

「気がついたらいつのまにかって感じだから、よくわからないけど」

「ああ……」

そういえば創真もそんな感じだった。一緒にいるうちにいつのまにか翼を好きになっていたのだ。それも幼稚園のときに。どうして翼なのかと問われても正確には答えられそうにない。

「でも好きなところなら言えるよ。目立たないけど黙々と頑張るところとか、誰に対してもさりげなく優しいところとか、そういうのをアピールしない控えめなところとか、律儀で真面目な性格とか」

「……………」

まっすぐな答えを返されて、自分で尋ねておきながら気恥ずかしくなってしまった。顔がじわりと熱を帯びていくのを感じる。良く言われることにも好意を示されることにも慣れていないのだ。

しかし、ここまで言ってもらってもまだ納得しきれずにいた。頑張るといっても与えられた役割をこなしているだけだし、それほど優しくもない。もっといいひとがほかにいくらでもいるだろう。

それでも綾音がこんなことで嘘をつくとは思えないので、いつかの勘違いでしかないのかもしれないが、少なくとも今現在において、創真のことが好きだという気持ちは信じるしかない。

「ありがとう」

そう応じると、小さく吐息を落としてからゆっくりと顔を上げた。鼓動が次第に激しくなっていくのを感じながら、真剣なまなざしで彼女を見据える。

「でも、オレ、心に決めたひとがいるから」

「それって翼くん？」

あっさりと言い当てられて息をのんだ。

ただの当てずっぽうだったのか、ほかに思い当たるひとがいなかったのか、何か確証があった

のかはわからないが、いまさらごまかす気はないのでこくりと頷く。

「やっぱりそうなんだね」

「オレの片思いだけどな」

「うん……」

創真はあらためて表情を引きしめて、背筋を伸ばす。

「だからごめん。綾音ちゃんの気持ちはありがたいけど、つきあうとかそういうことはできない。でも綾音ちゃんさえよければ、いままでどおり幼なじみとして仲良くしたい」

「もちろん、私もそうしてくれるとうれしいよ」

綾音はふわりと応えた。ふられたことなど微塵も感じさせない柔らかな笑顔で。無理をしているようには見えないが、本当のところはわからない。だからといって創真に詮索する資格はないだろう。

会話が途切れたちょうどそのとき、注文していたオレンジジュースが運ばれてきた。彼女はストローで氷をつついてから飲み始める。つられるように、創真もだいぶぬるくなったコーヒーを口に運んだ。

「何だかままならないよね、私たち」

「ああ」

「完全一方通行の三角関係なんて」

「……えっ？」

顔を上げると、彼女はストローをつまんだまま薄く苦笑していた。

綾音は創真が好きで、創真は翼が好きで、翼は綾音が好きで——言われてみれば確かに完全一方通行の三角関係だが、綾音がそう認識しているということは、つまり。

「翼の気持ちを知ってたのか？」

「そうなんだろうなって思ってるだけ」

「ああ……」

知らないあいだに翼が告白していたのかと思って驚いたが、どうやら言動から察しただけのようだ。それなら納得である。あれだけあからさまに好意を示していたのだから無理もない。

「創真くんは翼くんから聞いてたの？」

「いや、オレもただの推測なんだけど」

「やっぱり態度でわかっちゃうよね」

そう言って肩をすくめる綾音につられて、創真も笑った。

しかし、そのまま沈黙が落ちた。彼女は何か考え込むような面持ちでそっと目を伏せると、あらためてストローをつまみ、カランカランと音を立てながらオレンジジュースをかき混ぜる。

「でも、翼くんは告白とかするつもりはないんだと思う。私を困らせたくないっていうのもあるかもしれないけど、西園寺家の跡取りだし……翼くんならそこまで考えてるんじゃないかな」

「ああ……」

言われてみればそうかもしれない。翼は小さいころからいつだって将来のことを考えてきたし、無責任な行動はしない気がする。ただ、それは自分のためというより綾音のためではないだろ

うか。

「だからね、どうせなら創真くんと翼くんが上手くいけばいいなあって」

「えっ？」

創真は思わずはじかれたように顔を上げる。

正面の綾音はうっすらと曖昧な笑みを浮かべていた。突拍子もない発言のように思えたが、その表情を見て何となく気持ちがわかった気がした。同じ立場だったら創真もそう思っていたかもしれない。けれど――。

「そこまで夢は見られない」

静かな声にはあきらめがにじんでいた。

一瞬、綾音は何ともいえない微妙な顔つきになるが、すぐに気を取り直したようにさらりと話題を変える。その配慮に、創真は自分でも驚くくらいほっとしてしまった。

第7話 侵蝕

「なあ、よかったらこれからうちに本を見に来ないか？」

ホームルームのあと、東條は帰り支度をしながら隣席の翼をそう誘った。

今日の昼休み、東條がイギリスで現地の本を買っていたという話になり、翼が興味を示していたのだ。だからといってまさか自宅に呼ぼうとするとは思わず、創真は面食らって耳をそばだてる。

「いきなり行ったら迷惑じゃないか？」

「部屋は片付いてるから大丈夫だ」

「へえ、じゃあ行かせてもらおうかな」

「たいしたおもてなしはできないけど」

「構わないよ」

翼が軽く笑いながら応じると、東條ほっとしたように小さく息をついた。

おそらく彼には下心があるはずだ。本を見せたいというのも嘘ではないだろうが、自宅に呼ぶことでもっと親密になろうとしているのではないか。それが悪いわけではないけれど——。

「創真、そういうことだから今日は先に帰ってくれ」

「オレも行く！」

ぽんと背中を叩かれ、思わずはじかれたように振りかえってそう宣言する。翼は勢いに押されて若干のけぞりつつ目を瞬かせたものの、すぐに平静を取りもどした。

「おまえ興味なさそうにしてなかったか？」

「本はともかく、東條の家には行ってみたい」

「諫早くんも歓迎するよ」

驚いて振り向くと、東條がこちらを見て含みのある笑みを浮かべていた。まるで何もかも見透かしているかのように——創真はギクリとしながらも素知らぬふりで前に向きなおり、スクールバッグのファスナーを閉めた。

「俺んちはこっちな」

校門を出ると、東條は右手で指さしながら案内する。

だが、いつも彼が帰るところを見ているので言われるまでもない。そうだろうなと翼は笑いまじりの声で応じて、あたりまえのように彼と並んだまま歩き出した。創真はひとりその後ろを歩く。

まわりが騒がしいのは二人の王子様が一緒に帰っているからだ。興奮ぎみに行き先を尋ねる子もいれば、遠巻きにはしゃいでいる子もいる。そんな彼女たちに翼は例のごとく甘やかな笑みを振りまいた。

それでも学校から離れるにつれてまわりの生徒が少なくなり、騒がしさは落ち着いていく。困惑ぎみだった東條もようやく安堵したような表情になった。それを目にして翼は申し訳なさそうに肩をすくめる。

「こんなに騒がれるとは思わなかったんだ」

「文化祭のときよりは全然マシだったけどな」

「ははっ、違いない」

文化祭の執事喫茶では、東條も翼とともにかなり騒がれていた。

もともと編入したときから人気は高かったのだ。翼のように黄色い声できゃあきゃあ言われるわけではないが、翼以上に告白されている。正真正銘の男性だからというのかもしれない。

ただ、東條はいまのところすべて断っているようだ。好きなひとがいるのかと詰め寄った子もいるらしいが、肯定も否定もしなかったと聞く。それこそが翼をあきらめていないことの証左だろう。

「イギリスにはどのくらい住んでたんだ？」

「小学生からだから……だいたい九年くらいか」

「へえ、けっこう長かったんだな」

翼はそう相槌を打ち、ちらりと東條のほうに顔を向けて言葉を継ぐ。

「親御さんの仕事の都合って聞いたけど」

「商社だから何か海外赴任が多いみたいでさ」

「ああ、商社か」

西園寺グループにも商社があるので、翼はそのあたりの事情をよくわかっているのかもしれない。しかし創真にも何となく海外赴任が多いというイメージはあった。

「さすがにもうついていく気はないけど」

「じゃあ、ひとり暮らしか？」

「また海外赴任ってことになったらな」

東條は苦笑すると、ふと思い出したように後ろの創真に振り向いた。

「諫早くんのところは転勤とかないのか？」

「多分ないと思う」

ぶっきらぼうに返事をする、翼が面白がるように含み笑いをしながら補足する。

「創真の父君は創業社長だぞ」

「え、そうなのか？」

「ただのベンチャー企業だ」

「もう中堅企業だろう」

面倒なので、父親が社長であることはあまり言わないようにしている。

それゆえ翼もむやみに暴露はしないのだが、東條には友人だからという判断で話したのだろう。別に隠しているわけではないので構わないけれど、翼がそれだけ彼のことを認めているのだと思うと、すこし複雑な気持ちになった。

東條の家は、白を基調としたモダンな一戸建てだった。

校門を出てから二十五分ほどかかっただろうか。自転車通学がぎりぎり認められないとこ

ろで、電車もバスもちょうどいい路線がないため、毎日こうやって徒歩で通学しているのだという。

「さ、ふたりとも入って」

「おじゃまします」

東條に促され、創真は軽く会釈をしてから翼とともに玄関に入った。何となく隅のほうに寄りながら東條が扉を閉めるのを眺めていると、奥からパタパタと軽快な音が近づいてきた。

「おかえりなさい」

「ただいま」

「あら、お友達？」

「うん」

濃紺のエプロンを着けたまま玄関にやってきたのは、東條の母親のようだ。身長は普通くらいだが、頭が小さく全体的にすらりとしていて見栄えがいい。顔も若々しくて高校生の息子がいるようには見えなかった。

東條は扉のつまみをまわして鍵をかけると、彼女に向きなおる。

「仲良くしてくれてるクラスメイトの西園寺翼さんと諫早創真くん。イギリスで買った本を見てもらおうと思って呼んだんだ」

「えっ……さ、い……」

そう言ったきり、彼女は凍りついたように絶句してしまった。顔はひどくこわばり、青ざめ、わずかに震えてさえいる。いったいどうしたのか創真にはわからなかったが、それは東條も同じらしい。

「母さん？」

「あ……いえ、その、ゆっくりしてってね」

息子の呼びかけでようやく彼女は我にかえり、ぎこちない笑みを浮かべてそれだけ告げると、そそくさと逃げるように奥へ引っ込んでいく。創真たちとは目を合わせようとしなくて。

「悪い、いつもはこんなじゃないんだけど……」

「気にするな。名前で驚かれることには慣れてる」

東條は困惑した様子で謝罪するが、翼は何でもないかのように軽く肩をすくめて受け流す。だが、西園寺の名に驚いただけにしては様子が尋常ではなかった。おそらく翼もそう感じてはいるだろう。

「おまえ……本当にきれいにしてるんだな……」

階段を上がって東條の部屋に案内されると、創真は啞然とした。

急な来訪だったにもかかわらず、物が散らばっていることもなく、机の上もきれいに片付けられていて、ベッドまできちんと整えられている。いつもパジャマが脱ぎっぱなしの自分の部屋とは比べものにならない。

「母親が潔癖症ぎみでうるさいんだ」

東條は苦笑して、なぜか弁明するかのように言う。

ただ、さきほどの様子からも彼女が潔癖症というのとは何となくわかる気がした。きっと繊細なところがあるのだろう。だから日本有数の旧家である西園寺の子が来たことにひどく動揺した——のかもしれない。

そんなことを考えながら翼に振り向いたつもりだったが、姿がなかった。開いた扉から廊下を覗いてみると、翼は階段を上がりきる直前で足を止めて後ろのほうを見ていた。その表情はどことなく険しい。

「どうしたんだ？」

「いや……」

そう答えると、気を取り直したように微笑んで部屋に入ってきた。

何でもなくはないだろうが、何となく聞ける雰囲気ではなくなってしまった。翼はさっそく目当ての本棚に気付いてそちらへ足を進めている。もやもやとしながら創真もそのあとに続いた。

本棚はスライド式のもので片側の壁面に備え付けられていた。扉で隠せるようになっており、東條が開けるまえはただの壁にしか見えなかったが、いまはそこに大きな本棚が現れている。

「いろいろあるんだな。見てもいいか？」

「ああ、まだクローゼットにもあるけど」

「とりあえずここだけでいいよ」

翼に従い、創真もスクールバッグとコート置いて背表紙を眺めていく。

ざっと見たところ、小説、漫画、サッカー雑誌が多い。小説は海外の作家のものがほとんどで、逆に漫画は日本の作家のものばかりである。ただ、どれも日本語ではなく英語翻訳のようだ。

「こういうので英語を勉強してたのか？」

「あー、まあ結果的に勉強になったとは思いますが、読みたかったから読んでただけなんだ。漫画は日本のだけど、英語翻訳のほうが手に入りやすかったからさ」

東條はコートを脱いでハンガーに掛けながら答える。自分のだけでなく、創真たちのものも同じようにハンガーに掛けてくれている。すぐに片付けることがもう身についているのだろう。

コンコン——。

ふいに控えめにノックする音が聞こえ、東條が扉を開ける。

そこにはすこし気まずそうな笑みを浮かべる彼の母親がいた。ジュースとお菓子を載せたトレイを手を持っている。東條が招き入れると、彼女は中央のローテーブルにグラスとお菓子を置いた。

「さきほどはごめんなさいね」

膝をついたまま、本棚の前にいる創真たちのほうに振り向いて言う。言葉のとおり申し訳なさそうな表情をしており、縋るようにトレイを胸に抱く姿もあいまって、ひどく儂げに見えた。

「いえ、気にしていませんから」

翼がにっこりとよそいきの笑顔でそう応じると、彼女は淡く微笑む。

「まさか西園寺のお嬢様を連れてくるなんて思わなかったから、驚いちゃって。圭吾と同じ学校ってことさえ知らなかったんですもの」

お嬢様——それを聞いた瞬間、創真は凍りついた。

つまり彼女は翼が本当は女だということを知っていたのだ。だからといって、男の格好をしている本人をまえにしてお嬢様と呼ぶなんて。ただ単にうっかり口を滑らせただけなのか、それとも。

「母さん、あとは俺がやっつくから」

東條も動揺して、あたふたと追い立てるように母親を下がらせる。

それでも翼だけは何でもないかのように平然としていた。階段を降りていく軽い足音が遠ざかって聞こえなくなると、薄く苦笑して肩をすくめる。

「せっかくだ、いただく」

その言葉に、東條も創真もほっと緊張の糸が切れたように頷いた。

三人はローテーブルを囲んでラグの上に座り、オレンジジュースを飲み、個包装になったバームクーヘンを食べ始めた。創真はあっというまに完食し、東條に勧められて二つ目に手を伸ばしながら口を開く。

「東條のお母さんはどこで翼のことを知ったんだろうな」

「顔は知らなかったよだから噂で聞いたと考えるのが妥当だな。一応、この学区のあたりではそこそこ知られているし、井戸端会議の話題にのぼったとしても不思議じゃない」

翼が食べかけのバームクーヘンを手に持ったまま、理路整然と答えた。

確かに旧家である西園寺の娘が男装しているとなれば、それも王子様と呼ばれるほど眉目秀麗であれば、学校とは無関係のところで話題になってもおかしくはない。

「でもあんなに動揺するのは普通じゃない気がするけど」

「もしかしたら仕事がらみでウチと何かあったのかもな」

「ああ……」

西園寺グループはイギリスや北欧にも展開しているようだし、商社との取引もあるはずだ。逆にいえばそれくらいしか接点が思いつかない。仕事がらみとなると創真には何があったのか想像もつかないが。

「まあ、何の証拠もない勝手な憶測だ」

翼はそう言って肩をすくめる。

「西園寺の名前に驚いただけという可能性のほうが高い。実際、あのくらいの反応ならいままでも見たことがある。いずれにしても圭吾がそんな顔をすることはないんだ」

「ん、ああ……」

創真は気付いていなかったが、隣の圭吾は戸惑ったように表情を曇らせていた。親どうしで何かあったかもしれないと聞けば、不安になるのも無理はない。翼はそのことを察してフォローしたのでらう。

「さあ、もうすこし本を見せてもらおうかな」

今度は仕切り直すように明るくそう言って立ち上がると、軽く伸びをしてから本棚のほうへ向かう。創真も残りのバームクーヘンを口に放り込んであとを追った。

「じゃあ、この三冊を借りるよ」

気になるものがあつたら貸すという東條の言葉に甘えて、翼は三冊の本を選んだ。ミステリー小説とファンタジー小説とSF小説だ。東條の趣味らしく、本棚にある小説はこういったジャンルのものばかりだという。

「諫早くんはいいのか？」

「ああ」

翼ほど英語が得意でないので小説は読むのに時間がかかるし、漫画はオリジナルの日本語で読みたいし、サッカーにはそもそも興味がないし、何より東條に何かを借りるとするのは気が進まなかった。

その隣で、翼はしゃがんで借りた本をスクールバッグにしまっている。どうにか三冊ともおさめてファスナーを閉じると、立ち上がって肩にかけた。厚い本もあつたのでけっこうパンパンになっていて重そうだ。

その様子を見て、東條はそっと控えめに表情をほころばせる。

「またいつでも来いよ。本とか関係なしに」

「ああ、圭吾もよかつたら今度うちに来いよ」

「いいのか？」

彼がそう聞き返すと同時に、創真は息をのんだ。

翼が創真以外を家に呼ぶことなんて滅多にないのに。綾音でさえ数えるほどしか呼んだことがないのに。どうして会ってまだ数か月の彼を——しかし、当の翼はたいしたことではないかのように笑って頷く。

「もちろん。創真もしょっちゅう来てるしな」

「オレは遊びに行ってるわけじゃないけど」

「ん、じゃあ何しに行ってるんだ？」

「勉強だよ」

翼がさらりと答えた。

「僕は家庭教師を呼んで後継者になるための勉強をしてるんだが、それに創真も同席してるんだ。経営学や、英会話、礼儀作法、マーケティングとか、あと護身術なんかもやってるぞ」

「へえ、すごいな」

東條は目を見張って感嘆の声をもらした。

勉強もだが、何より創真も一緒にというのが意外だったのだろう。こちらに振り向いてまじまじと見つめてくる。そのまなざしにうらやむような色がにじんでいることに、翼も気付いたようだ。

「圭吾も一緒に勉強してみるか？」

「え、いいのか？」

「二人も三人も変わらないからな」

「それなら俺も同席させてほしい」

「わかった」

前のめりになる東條に、翼はふっと笑みを浮かべて了承の返事をした。

なんで——。

これが社交辞令でないことくらい創真にもわかる。しかし同席を許されているだけの分際で反対などできるわけもなく、目のまえで話が進んでいくのをただ呆然と眺めるしかなかった。

第8話 暴走のゆくえ

東條の家をあとにして、創真と翼はいつものように並んで帰路につく。

そのころにはもうすっかり夜の帳が降りていた。住宅街には家のあかりと街灯くらいしかないのでかなり暗く、ひっそりとしている。自分たちの足音だけがやけに響くような気がした。

ふっ——ひそかについた小さな溜息は、白いもやになる。

日中はそうでもなかったが、いまは厚手のダッフルコートを着ていてもぶるりと震えるくらいだ。きっと鼻も赤くなっている。けれど、それよりも心のほうがもっとずっと寒かったのかもしれない。

「すこし長居しすぎたかな」

翼は夜空を仰ぎ、ふわりと白い息を吐きながら苦笑した。

つられるように創真もちらりと見上げる。冬は空気がきれいで澄んでいるというが、星は見えず、月がどこにあるのかさえもわからない。ただ何もない闇が広がっているだけだった。

「そうだ、一応、家に連絡しておくか」

赤信号で足を止めると、翼は思い立ったようにスマートフォンで電話をかけた。友人の家に行っていたからこれから帰る、あと二、三十分かかる、というようなことを使用人に伝えていた。

「創真は連絡しなくていいのか？」

「……別に大丈夫だろ」

視線を向けられて、創真は思わず逃げるように顔をそむけてしまう。声音もひどく突き放したようなものになってしまった。

「……………」

沈黙が落ち、すこし空気が変わったような気がした。

下を向いているので翼がどんな顔をしているかはわからない。けれど、わずかに足を動かしてこちらに体を向けたのはわかった。ドクドクと痛いくらいに心臓が暴れるのを感じながら、創真は息を詰める。

「なあ、おまえどうしたんだよ」

「どうもしてない」

ちょうどそのとき信号が青になり、とっさに逃げるように横断歩道へと足を踏み出したが、翼に手首を引かれてよろけながら戻るはめになった。それでも顔だけは頑なにそむける。

「こっち向けよ」

苛立ち露わに、翼はギリッと力をこめて手首を握り込んだ。

しかし創真が痛みに顔をゆがめたことに気付くとすぐに手を離し、代わりに両手で頬をはさんで自分のほうに向けさせた。そして息がふれあいそうなところまで顔を近づけて言葉を継ぐ。

「圭吾の家にいるときからおかしかったよな。ぶすくれたまま僕と目を合わせようとしない。話しかけてもろくに返事をしない。いったい何が気に入らないっていうんだ」

「……別に」

創真は顔を固定されながらも必死に視線をそらした。あまりの近さにどきまぎする一方、心の奥底まで暴かれてしまいそうで恐ろしくもあった。だがこれくらいで逃がしてくれるほど翼は甘くない。

「こんな態度で別になんて言われて信じられるか。納得いく答えを聞くまで帰さない。今晚は雪も降るらしいし、このまま一晩中ここにいたら僕も創真も凍え死ぬかもな」

そんなことを言い、挑みかけるように不敵に口元を上げる。

こうなると翼はもう絶対に引かない。口先だけでなく本当にその覚悟でいるのだ。だからいつも創真のほう折れるしかなく——目をそらしたまま、わずかに眉が寄るのを自覚しつつ口を開く。

「なんで……なんで、あいつを勉強に呼ぶんだよ」

「ん？」

翼はきょとんとし、創真の頬から手を離して話し始める。

「構わないだろう。僕だって考えなしに呼んだわけじゃないぞ。圭吾は英語がネイティブレベルだし、英語以外の成績も悪くないし、なかなか将来有望だ。僕の補佐にすることも視野に入れている」

補佐にする、だって——？

確かに成績も悪くないとかむしろ良いほうだ。翼には及ばないものの創真よりはだいぶ上である。おまけに翼との相性もずいぶんといいようなので、考えてみれば当然のなりゆきかもしれない。

「でも、補佐はオレが……」

「もちろん創真には補佐として支えてもらうつもりでいるさ。お払い箱にするわけじゃないから心配するな。ただ、優秀で忠実な補佐がもうひとりふたりほしいんだ。わかるだろう？」

わかりたくはなかったが、何となくわかってしまった。

創真には補佐としての能力が足りないということだ。お払い箱にしないのは幼なじみゆえの温情かもしれない。その代わりに優秀な補佐を追加するというのなら、甘んじて受け入れべきだろうが——。

「まさかおまえ拗ねてるのか？」

「嫌なんだよ、翼の隣にオレじゃない誰かが立つのは！」

鬱屈した本音がとうとう暴発した。

「翼の隣はオレだけに許された場所だと思ってた。翼がいろんなひとに愛想を振りまいても、翼の気持ちがオレになくても、翼の一番近くにいられるならそれでよかった。公私ともに唯一のパートナーになりたかった。なのに……！」

「……………」

翼はしばらく考え込むような素振りを見せたあと、怪訝な面持ちで尋ねる。

「それは、僕と結婚したいってことか？」

「できればしたいさ！ おまえは男と結婚する気なんかさらさらなさそうだし、無理だとは思ってるけど！ 幼稚園のころからずっとおまえが好きだったんだ！ おまえだけが好きだった

んだ！」

創真は半ばやけっぱちに思いの丈をぶつけた。

やはりというか翼はまったく気付いていなかったらしい。驚愕しているような、信じがたそうな、困っているような、申し訳なさそうな、そんな複雑な表情を浮かべながら当惑を露わにする。

「すまない……気持ちはうれしいが、創真をそういう対象として見たことはなくて」

「やめろよ！ そこらへんの女子の告白みたいに軽くあしらうなよ！」

創真はいたたまれず叫んだ。

傲慢かもしれないが、翼をアイドルか何かのように思っている女子とは違うのだ。断られるとわかっていながら思い出がほしくて告白する——そんな彼女たちと同じように扱われるのは我慢ならない。

「じゃあ、どうすればいいんだ！」

翼は苛立って叫び返すが、どうすればいいかなんて創真にもわからなかった。言うつもりがなかった思いをうっかりぶちまけてしまっただけで、返事を望んでいたわけではないのだ。そもそもは——。

「オレとフェンシングで勝負しろ」

創真は顔を上げ、緊張しながらも強気に翼を見据えてそう訴えた。翼は視線を絡めたままぴくりと眉だけを動かす。

「どういうことだ」

「オレが勝ったら東條を勉強に呼ぶのはやめてくれ」

そもそもの望みはそれだった。

将来的に東條を補佐にするのは仕方ないにしても、いまはまだ勉強に同席させてほしくない。せめて心の準備ができるまで待つてほしい。けれどわがままを言える立場でないことは重々承知していた。

「そんな勝負を受ける筋合いはないな」

「オレが負けたら二度と口をはさまない。勉強についても、補佐についても、結婚についても。好きだとか言って困らせたりもしない」

それを聞いて、翼はゆっくりと目を伏せて静かに考え込んだ。やがて心を決めたように視線を上げると、ゆったりと尊大に腕を組みながら創真を見下ろす。

「いいだろう、その勝負を受けてやる」

その挑発的な物言いに、創真はぞわりと総毛立つのを感じた。

段取りは翼が整えた。

実際に動いたのは翼に頼まれたフェンシング部の部長である。中学のときに同じフェンシング部でそれなりに親しくしていたからか、勝負のことを聞いて二つ返事で引き受けてくれたのだ。

武器と防具は各自で用意し、放課後、フェンシング部の試合場と電気審判機を借りて行うことになった。審判などもフェンシング部から出してくれるという。顧問の許可もとってあるらしい

。

「翼くーん、がんばってー！！！」

「キャー、西園寺くーん！！！」

誰が吹聴したのか二階のギャラリーは超満員だ。声援を送っているのは女子ばかりのようだが、なぜか男子もそこそこいる。教員までちらほらいる。まさかこんな見世物になるとは思いもしなかった。

勝負の理由についても、ちょっとした諍いがあって決着をつけるために、と部長に話したらしいので、もしかしたら観衆にも知れ渡っているかもしれない。そうなると創真は完全アウェーである。

「種目はフルーレ。三分間三セット、十五ポイント先取で勝利。いいな？」

試合のまえに、主審を務める部長がピストの傍らで確認する。

創真も翼もいっそう真剣な顔つきになり首肯した。もうマスク以外は準備万端だ。互いに横目で視線をぶつけあい闘争心を露わにする。

「悪いが全力でいく」

「オレもだ」

何ひとつ翼に及ばない自分が、唯一、互角に渡り合えるのがフェンシングだ。

中学を卒業してからきのうまで一度も剣を握っていなかったが、感覚は忘れていなかった。体も思った以上に動く。翼も同じく卒業以来のはずなので互角かそれ以上に戦えるはずだ。

絶対に、勝つ――。

東條は何も知らず、ギャラリーのどこかでのんきに観戦しているのだろう。創真が勝てば勉強に参加できなくなるというのに。すこし同情するが、それこそが創真の望みなのだから勝つことに迷いはない。

しっかりと背筋を伸ばして強い気持ちのままピストに入場し、準備を整える。そして主審の号令で対戦相手の翼に一礼すると、マスクを着用し、スタートラインに前足のつまさきをつけて構える。

しかし、ここにきて異常なくらい鼓動が速くなってきた。汗がにじみ、喉が渇き、手足もかすかに震え出す。試合でもここまで緊張したことはないのに。正面の翼を見据えたままグッと剣を握る手に力をこめる。

「アレ！」

緊迫して静まった場に、試合開始の号令が大きく響きわたった。

クッ――。

創真の突きはかわされ、直後、翼の素早い突きが肩に当たった。

緑のランプがつき、ほどなくして電光掲示板の数字が十四から十五に変わる。

二分三十二秒を残して試合は終了した。

翼の勝ちだ。

それもほぼダブルスコアで。

創真は力なくマスクを取ってうなだれた。みっともないくらい息が上がり汗だくになっている。前半は気負いすぎて緊張したせいか体が思うように動かず、後半は焦りでミスが相次いだ。自爆とっていい。

ギャラリーからは黄色い大歓声が沸き起こっていた。

翼はすこし呼吸が荒いだけで試合前とあまり変わらないように見えた。栗色の髪もふわりとしたままだ。ただ、いつものように黄色い声に応じて笑顔を振りまくことはなく、創真だけを射貫くように見つめている。

いたたまれず目をそらすが、選手として試合終了の挨拶をしないわけにはいかない。主審の号令で歩み寄り、わずかにうつむいたまま対戦相手の翼と握手を交わす。瞬間、その手をグッと痛いくらいに握り込まれた。

「約束は守れよ」

ぞくりとする冷やかな声。

ぎこちなく頷くと、翼はすぐにひらりと身を翻して体育館をあとにする。最後まで振り返りもしないで。大勢のギャラリーのまんなかに取り残された創真は、ただ立ちつくすしかなかった。

第9話 積み重なる後悔

——今日からひとりで登校する。

迷ったすえ、創真は必要最低限のことを記した端的なメッセージを翼に送った。

かじかむ指先でアプリを閉じ、電源を落としてスマートフォンをスクールバッグに放り込む。そして白い息を吐きながら、チェック柄のマフラーをもぞりと口元まで引き上げると、寄りかかっていた自宅の塀から背中を離して歩き出した。

きのう、フェンシング対決で負けてから翼と顔を合わせていない。

——今日は先に帰ってほしい。

——わかった。

創真のひどく打ちのめされた気持ちを汲んでくれたのか、頭を冷やす時間が必要だと考えたのか、あるいは翼自身も顔を合わせる気になれなかったのか、不躰なメッセージひとつで了承してくれた。

そして、頭が冷えて気がついた。

フェンシング対決など持ちかけるべきではなかったと。あのときはそうするしかないと思いつめていたが、勝っても負けても元には戻れない。翼に想いを告げた時点でもう詰んでいたのだ——。

「おい、創真！」

学校へ向かう途中、後ろから怒気をはらんだ声で名を呼ばれ、同時に痛いぐらいの強さで肩をつかまれた。足は止めざるを得なかったが振り向きはしない。乱暴に肩を引かれて無理やり振り向かされても、顔だけはそむける。

「ひとりで登校するって何だ」

「……………」

無視していると、両手で頬をはさまれてグイッと顔の向きを変えられた。目の前に翼の端整な顔が迫っている。ひどく険しい表情だが、それよりも近さにドキリとしてあわてて目をそらす。

「察しろよ。オレはおまえに惨めにふられて、惨めに負けたんだ」

やけっぱちにそう言い放ったら、翼は無言のまま頬をはさんでいた手をゆっくりと下ろした。それでも射貫くような真剣なまなざしは変わらない。

「勉強には来るんだろうな？」

「もうおまえの隣にはいられない」

「は？」

地を這うような声で聞き返された。

思わずビクリとするが、それでも曖昧に目をそらしたまま何も答えない。呼吸さえためらうくらいに空気が張りつめていく。

「ずっと僕を支えてくれるんじゃないかったのか。そう約束しただろう」

「……………」

できるならそうしたかった。

告白も勝負もすべてなかったことにしてしまえば、表面的にはいままでどおりでいられるのかもしれない。翼はそのつもりのようだ。けれど、創真にとってそれはとてつもなく苦しくて惨めなことで――。

「見損なったぞ」

いつまでも口をつぐんで目をそらしていれば、拒絶でしかない。

翼はきつく睨みながらそう唾棄するように言い捨てると、怒りまかせに大きく身を翻して立ち去っていく。その後ろ姿はあっというまに遠ざかって小さくなり、やがて見えなくなった。

その日から、翼は東條とふたりで行動するようになった。

学校中さもありなんという空気だ。創真が何か逆鱗に触れるようなことをしでかしたので、フェンシング対決でこてんぱんにされたあげく捨てられた――そんなふうに見られているらしい。

おかげでまわりからは腫れ物に触るような扱いをされている。無遠慮な視線を向けてひそひそとうわさ話をするくせに、誰も声はかけてこない。もっとも尋ねられたところで話せることはないのだが。

それより翼と東條が親しくするさまを見るのがつらい。翼はまるで東條が唯一無二の親友であるかのように振る舞っているし、東條もいささか戸惑いながらも満更でもない感じだ。

ただ、東條はときどき心配そうな目を創真に向けてくる。仲直りしなくていいのかと訴えるかのように。袂を分かつことになった原因や経緯については、おそらく知らされていないのだろう。

もう仲直りとかいう段階ではないのだ。

きっとあの朝が最後のチャンスだった。感情を殺してでも翼に従えばよかったのかもしれない。どれだけ苦しかろうが、惨めだろうが、翼と離れるよりはよほどましだったのではないか――

「圭吾、今日これからうちに来られるか？」

フェンシング対決から三日後。

ひとり黙々と帰り支度をしていると、ふいに後ろの席からそんな声が聞こえてきて、創真は思わずドキリとしつつ耳をそばだてる。それを悟られないよう意識して手を動かしながら。

「え、まあ……いきなりどうしたんだ？」

「僕の勉強に同席するって言ってただろう」

「ああ、それか。こんな急だとは思わなかった」

「きのう親から許可をもらったんだよ」

「まだ何も準備してないけどいいのか？」

「身ひとつでくればいいさ」

ふたりは席を立ち、なごやかに笑い合いながら教室をあとにした。

いよいよ西園寺の後継者教育に東條が同席するようだ。当然のなりゆきだが、本当に現実になると思うとあらためてショックを受ける。自分にはもうそんな資格すらないというのに——。

創真はひとりで帰路についた。

空はどんよりとした鈍色で、吹きすさぶ風も今朝より一段と冷たくなっている気がする。ダッフルコートポケットにかじかんだ手を突っ込み、ぐるぐる巻きのマフラーに顔半分うずめながら、赤信号を待つ。

「創真くん」

ふいに凜とした声で呼びかけられた。

振り向くと、腕が触れるか触れないかくらいのところに桔梗がいた。翼の姉だ。まわりに誰もいないところを見ると彼女もひとりらしい。創真はきまり悪さを感じながらおずおずと会釈をする。

「まだ翼と仲直りしていないのね」

彼女はそう言い、うっすらと同情めいた笑みを浮かべた。

同じ学校なのでフェンシング対決のことは知っているのだろう。だが、その原因や経緯までは知らないはずだ。創真はマフラーに顔半分うずめたまま曖昧に視線を落として、ぼそりと答える。

「もう愛想を尽かされたんです」

「それはどうかしら」

桔梗は間髪を入れず疑問を呈した。

「あなたたちのあいだに何があったかは知らないけれど、あの子のことだからつまらない意地を張っているだけじゃないかしら。創真くんもご存知のとおり感情的なところがあるもの。きっとそのうち後悔すると思うわ」

「翼は、もう新しい補佐役を見つけてます……オレよりずっと優秀な……」

自分は切り捨てられたのだ。

翼の決めたことに私情で難癖をつけ、恋愛を持ち込み、あげく約束を反故にして逃げ出す——そんな面倒な人間をそばに置く理由はない。もともと目をつけていた東條に鞍替えするのは当然である。

「それなら私のところにおいでなさいな」

「えっ？」

驚いて顔を上げると、桔梗はやわらかく創真を見つめて微笑んでいた。

「そろそろ将来に向けて信頼できるパートナーがほしいと思っていたところなの。創真くんのごとは前から買っていたからちょうどいいわ。私ならもっとあなたを大事にしてあげられるけど、どうかしら？」

本気、じゃないよな——。

創真のことを買っていたなど元気づけるための方便としか思えない。桔梗が将来どうするつもりで何のパートナーを求めているのかはわからないが、何の取り柄もない人間をほしがりはしな

いはずだ。

しかし、これで創真が乗り気になったらどうするつもりなのだろう。もしかしたら末席くらいには置いてくれるのかもしれない。彼女は自分の言ったことには責任を持つタイプのように思う。ただ――。

「すみません……これ以上、翼に嫌われたくないので」

それが創真のまぎれもない本心だった。

桔梗のもとへ行けば、翼は間違いなく当てつけだと憤慨するだろうし、創真を嫌うどころか憎むようにもなりかねない。それだけは避けたかった。たとえもう二度と隣に立つことができないのだとしても。

「そう、残念ね」

まるで本当にそう思っているかのような寂しげな表情で、桔梗は言う。

「気が変わったらいつでもいらっしゃい」

「はい……」

社交辞令だろうと思いつつも、何となく申し訳なさや気まずさを感じてしまい、もぞりとマフラーにうずもれるようにしてうつむく。彼女も黙ったままである。寒風の吹きすさぶ乾いた音だけしか聞こえてこない。

正面の信号は、どうしてだかなかなか青にならなかった。

第10話 クリスマス

その日は、二学期の終業式の日だった。

午前中に学校が終わり、創真は誰とも名残を惜しむことなく学校をあとにする。

もうひとりで登下校することにはだいぶ慣れた。その道すがら翼を見かけても、意識しない素振りにはできるようになったつもりだ。もともと表情が乏しいほうなのでそう難しいことではない。

あっ——。

校門を出て信号待ちをしていると、チラチラと雪が舞っていることに気がついた。

折りたたみ傘は持っているが差すほどでもない。ポケットに手をつこんだまま鈍色の空を見上げ、舞い落ちてくる雪をぼんやりと眺める。ホワイトクリスマスという言葉がふと頭に浮かんだ。

そう、今日はクリスマスなのだ。

いつもイヴまではケーキだのサンタだので日本中が浮かれた空気になるが、当日になるとすこし落ち着く。今日も気のせいかな静かで、どことなくあたたかな余韻のようなものも感じていた。

もっとも創真の心は寒々としたままである。翼とクリスマスケーキを食べるという恒例行事さえ叶わない。自分から離れたのだが、なりゆきでこうなっただけで心から望んだわけではないのだ。

ふう、と白い溜息が口からこぼれ、同時に信号が青に変わった。

いつのまにか隣にいた赤い傘を差した女性がずっと歩き出し、つられるように創真も足を踏み出す。そのときふと思い立ち、横断歩道を渡ってすぐのところにある中型書店に寄っていくことにした。

ダッフルコートのをはらってマフラーを外し、暖かい店内に入る。

学習参考書のコーナーには誰もいなかった。冬休みのあいだに苦手な英語を勉強したくてここに来たのだが、意外と種類がある。すこし立ち読みしただけではどれがいいかわかりそうにない。

いつも翼に勧められたものを買ってたし——。

翼が何を基準に判断しているのかはわからないが、何箇所か目にしただけで、これがわかりやすいとか創真に合っているとか勧めてくれたのだ。それが間違っていると感じたことは一度もない。

軽く溜息をつき、手にしていた参考書を閉じて平台に戻す。

そのとき隣の平台に並べられた見覚えのある表紙が目にとまった。東條の家に行ったあのときに翼が借りたファンタジー小説だ。苦い記憶がよみがえり、動きを止めたまま思わず眉をひそめたが——。

「ありがとうございましたー」

財布をスクールバッグにしまうと、女性店員から差し出された萌葱色の手提げポリ袋を受け取

ってレジをあとにする。

買ってしまった——。

ずっしりとした重みを手に感じながら、何をやってるんだろうとあきれたような気持ちになる。有名な作品なのでもともとタイトルは知っていたが、読もうと思ったことなんて一度もなかったのに。まして原書など自分の英語力では読むことさえ難しいのに。

深く溜息をつき、無意識に視線を落としながら二つの自動ドアをくぐって外に出る。しかしそのとき、うつむいていたせいで向かいからひとが来ていたことに気付かず、肩がぶつかってよろけてしまった。

「す、すみません」

「……創真？」

ハッとして顔を上げると、そこには驚いた表情でこちらを見ている翼がいた。

鼓動がドクンと強く打つ。名前を呼ばれることも、見つめられることも、ずいぶんと久しぶりのように感じた。頭の中がまっしろになり、時間が止まったかのようにただじっと目を見合わせる。

先に我にかえったのは翼だった。何とも言えない気まずげな面持ちになりながら、斜め下に視線を落とす。そのときほんのわずかに目を見開いたかと思うと、ふっとやわらかく笑う。

「それ、興味があったのか」

「えっ？」

最初は何のことだかわからなくてきょとんとしたが、翼の視線をたどってギョツとする。そこにあったのは萌葱色の手提げポリ袋で、あろうことか件の表紙がうっすらと透けていたのだ。

「あ、いや、これは……違っ……」

しどろもどろになりながら、あわてて後ろに隠す。

そのときすぐ横をすり抜けるようにして男性客が出て行った。邪魔だと言わんばかりに横目で睨みながら。出入り口を半分ふさぐ形で立ち止まっていたのだから致し方ない。

「出よう」

そう促され、断ることもできず一緒に歩道へ出た。

外はあいかわらずふわふわとした雪がちらついていた。吐く息もほんのりと白い。むきだしの首筋がひどく寒い、のんきにマフラーを取り出せるような雰囲気ではない。

「こっちだ」

なぜか帰路とは反対のほうへ誘導される。

黙って従うものの、翼がどういうつもりなのかさっぱりわからない。フェンシング対決以降、普通に話をする事さえなくなっていたのに、いまになって何をしようというのだろうか——。

ほどなくして翼は足を止めた。出入り口から二十メートルほど離れた街路樹の陰になるところだ。同じ高校の生徒に見られたくないのかもしれない。もっともあまり隠れられてはいないけれど。

「すまない。申し訳なかった」

「えっ？」

「告白してくれたときも、フェンシング対決のときも、そのあともずっとひどい態度をとってしまった。意固地になっていたというのもあるが、きちんと向き合うだけの勇気がなかったんだと思う」

創真は驚き、あわててふるふると首を振った。

「悪いのはオレのほうだ。そもそも全部オレが言い出したことだし……」

幼なじみからいきなり告白されたら戸惑うのも当然だし、フェンシング対決も翼が望んだことではないし、そのあとも創真が先にひどい態度で拒絶してしまった。どう考えてもこちらに非がある。

それなのに翼に先に謝らせてしまうなんてあまりに申し訳ない。もう愛想を尽かされたものとはばかり思っていたので、ただただ後悔するばかりで、謝罪ということにまで思考が及ばなかったのだ。

「僕は……」

ひそやかに切り出されたその声で、顔を上げる。

翼はこころなしか緊張した面持ちで目を伏せていた。それきりなかなか言葉を継ぐことができずにいたが、気持ちを落ち着けるようにゆっくりと呼吸をして、あらためて仕切り直す。

「僕は、小さいころからずっと綾音ちゃんが好きだったんだ」

「あ……ああ……」

まさか翼から話してくれるとは思いもしなかった。突然のことにどう反応すればいいかわからず、無表情のまま固まる。それを目にして翼は怪訝そうに眉をひそめた。

「もっと驚くかと思っていたんだが」

「なんとなくそんな気がしてたし」

「そんなにわかりやすかったか？」

「いや、オレはいつも一緒にいたから」

「そうか……」

本当は創真だけでなく綾音本人もとっくに気付いているのだが、勝手に教えるわけにはいかない。若干の後ろめたさを感じて曖昧に目を泳がせていると――。

「僕は、戸籍も体も女だ」

ふいに公然の秘密が紡がれた。

ドクリと鼓動が跳ねる。翼自身の口からそれを聞いたのは幼稚園のとき以来である。表情からは少くない緊張が見てとれるが、それを感じさせないくらい冷静な口ぶりで語っていく。

「だから綾音ちゃんとの将来を望むわけにはいかない。それなら最初から想いは告げないでおこう。幼なじみのままでいよう。そう決めている。綾音ちゃんのためにも自分のためにも」

やはり、と創真はひそかに納得した。

翼は一呼吸おいて続ける。

「僕自身の結婚についてはなるべく考えないようにしていた。両親にもどういつもりなのか聞けなかった。怖かったんだ。後継者に求められる役割のひとつにうすうす気付いていたし」

「役割？」

そう聞き返すと、翼はうっすらと困ったような笑みを浮かべた。どこか言いづらそうにしながらもごまかさずに答える。

「次の後継者だ」

「あっ」

言われてみればあたりまえのことだった。

でも子供がいなければ一族から選ぶとかすればいいのでは、とも思ったが、翼をわざわざ男にしてまで後継者に据えようとしているのだから、西園寺は直系にこだわっているのかもしれない。

だとすれば確かに翼も結婚して子供をもうける必要がある。しかし、後継者となるために男として生きることを強いられるはずなのに、その役割を果たすときだけ女に戻れというのだろうか。

それではあまりにも勝手すぎる。翼のことを西園寺のための道具としか見ていないのではないか。そもそも男として生きることを強要した時点でそうなのだが、さらに女としての役割までだなんて――。

「それなのにいきなりおまえに結婚したいとか言われてさ。冷静ではいられなかったよ」

「それは……悪かった……」

翼はあくまで冗談めかした口調だったが、それでもどう詫びればいいのかわからず消え入るように口ごもる。知らなかったとはいえ、心の繊細なところに土足で踏み込んでしまったのだから。

「でも、あれからよく考えてみたんだ」

うつむいていると、翼がこころなしか緊張したような声でそう切り出した。

「どうせどこかの誰かと結婚しなければならないのなら、創真でいい……創真がいいんじゃないかって。気心も知れているし。両親もそのつもりで勉強に同席させていたような気がする」

「……………」

結婚？ オレと――？

突然、信じがたいことを言われて理解が追いつかない。現実とは思えない。夢でも見ているのではないかという気持ちだ。呆然としていると、翼はわずかに目を伏せてふっと笑みを浮かべた。

「父も母も創真のことは気に入ってるからな。創真が勉強に来なくなって母はずいぶん残念がっていたし、父にはきちんと話し合ってみると諭された。本当に創真を失ってもいいのかと何度も言われたよ」

そう言うと、ずっと表情を引きしめて真剣な瞳を創真に向ける。

「僕は、やっぱり創真に隣にいてほしいんだ」

創真は息をのむ。

それは創真が何よりも望んでいた言葉だ。結婚の話には今ひとつ現実味を感じられずにいたが、この言葉はすんなりと受け入れられた。じわじわと奥底から熱いものがこみ上げてくる。

「オレ、なんかで……いいのか……？」

「ほかに何人か信頼できる補佐役がほしいとはいまも思っている。だけどいちばん近くにいてほ

しいのは創真だ。恋愛感情は正直ないが、すべてをさらしてもいいと思える相手はおまえだけなんだ。だから……」

ガラガラガラ——。

いつのまにか歩道に横付けされていた黒いバンの扉が、派手な音を立てて開いた。翼は何だろうという顔をして振り向きかけたが、それより早く、バンから目出し帽の男が飛び出してきて何かを首筋に押し当てる。

「うっ……！」

バチッと音がして翼が膝から崩れ落ちた。

一瞬の出来事で、創真は何が起こったのかにわかに理解できなかった。けれども翼がぐったりとしたまま横抱きにされたのを見て、ハッと我にかえる。

「翼！！！」

スクールバッグを放り出し、翼をバンに連れ込む大柄の男を引き戻そうとする。

しかし、逆に創真のほうが引きずり込まれてしまった。薄汚れたマットに倒れ込むなり首筋に硬いものが押し当てられる。

「うぁっ！」

バチッと音がして激痛が全身を駆けめぐり、創真の意識は途切れた。

彼らは何者なのか、目的は何なのか、翼をどうするつもりなのか、何ひとつとしてわからないまま——。

「おい、いいかげん目を覚ませ」

臀部を蹴られ、その痛みで創真は意識を取りもどした。

どうやら朽ちた事務室のようなところに転がされているようだ。ライトグレーのタイルは砂や埃などで汚れており、壁はひび割れ、スチール製のロッカーは変形してところどころ錆びている。

ガシャッ——。

体を起こそうとして、両手が何かで拘束されているらしいことに気がついた。硬いものが手首に当たって痛い。背中側なので見えないが、おそらく手錠をかけられているのではないかと思う。

そうだ、本屋のまえでいきなり黒いバンの男に襲われて……翼は？！

ハッとして身をよじりあたりを見まわす。

翼はそこから数メートルほど離れたところに立っていた。目出し帽をかぶった大柄の男に二の腕をつかまれ、そしてやはり背中側で両手を拘束されているようだ。創真と目が合うとふっと自嘲めいた笑みを浮かべる。

「すまないな、巻き込んでしまって」

「オレはいいからおまえだけでも逃げろ！」

「おっと、そうはいかないぜ」

ふいに後ろからヒヤリとしたものが首筋に押し当てられた。状況と感触から考えて、ナイフのような小型の刃物で間違いないだろう。そのまま首根をひっぱり上げるようにして立たせられる。

「逃げたらこいつを切るぞ」

そう言い、男はいったん刃先を翼に向けてから押し当てなおした。ちょうど頸動脈のあたりだ。切られたらきっと助からない。あらためてその冷たい刃を意識してぞくりと背筋が震えた。

「……おまえたちの目的は何だ」

翼は眉をひそめ、自分の腕をつかんでいる男に横目を流して問いかける。

男は目出し帽をかぶっているせいで顔の大半が隠れていたが、ふっと鼻先で笑ったのはわかった。さらに目つきをいやらしくして翼の耳元に顔を寄せていく。

「安心しろ。おとなしく従えば命までは取らないさ」

ねっとりそう言うと、ポケットから小さな鍵を取り出して翼の手錠を外した。そして乱暴に腕を引き、よろけた翼の鼻先に素早くサバイバルナイフを突きつける。

「逃げ」

ドスのきいた声で命じ、空いているほうの手でスマートフォンを構えた。

この状況を目にすれば、目的はともかく何をするつもりかはおおよそ察しがつく。本当は女だということも知っているに違いない。

「従うな！！！」

創真は声のかぎりに叫んだ。

翼が驚いたように振り向き、目出し帽の男もサバイバルナイフを握ったままチラリとこちらを一瞥する。直後、背後の男が苛立たしげに舌打ちして首筋のナイフにグッと力をこめた。

「おい黙れ」

「オレに構わず逃げろ！」

「このクソガキがっ！」

「ぐっ……！」

首筋に鋭い痛みが走り、生ぬるいものがぬるりと伝い落ちていくのを感じる。さっそく切られてしまったことに少なからず驚いたが、いまのところ動脈にまでは達していないようだ。

「創真！！」

しかし翼はこれまでにないくらい青ざめていた。

その様子に、目出し帽の男はあからさまなくらい満足げに目を細め、あらためてサバイバルナイフを構えなおして警告する。

「下手な真似をするとオトモダチが死ぬことになる。その男はかなり短気だぞ」

「……………」

覚悟を決めたのか、翼はすっと凜々しく背筋を伸ばしてコートを脱ぎ捨てた。ばさりと床に落ちて白い埃が舞い上がる。その様子を、目出し帽の男はスマートフォンを掲げて動画撮影していた。

くそっ——！

創真はくやしさに奥歯を食いしめる。

きっと翼ひとりだったらどうにかして逃げられた。創真がついてきたばかりに足枷になってしまったのだ。いっそ見捨ててほしかったが、翼にそんな真似はできないだろうこともわかっていた。

そのあいだにも翼はためらうことなくブレザーを脱ぎ捨て、ネクタイを外してシャツも脱ぎ捨て、靴も靴下もスラックスも脱ぎ捨てた。コートの上に次から次へと衣服が積み重なっていく。

「下着も全部だ」

男は顎をしゃくり、ひとつ残らず脱ぐように促した。

言われるまでもなくわかっていたのだろう。翼は表情を変えることなく長袖インナーを脱ぎ捨て、胸を目立たなくするコルセットも外し、最後の一枚となったボクサーパンツも淡々と脱いだ。

「これで満足か？」

一糸まとわぬ姿のまま、凜然と男を見据えてボクサーパンツを落としながら言う。

本当に、女だったんだ——。

あまりにも場違いな感想が創真の頭に浮かんだ。

もちろん女であることは知っていたし、疑ってもいなかったが、普段は性別など意識していないので実感がなかった。女だとか男だとかいうのは関係なく、翼だから好きになったのだ。

だがいまは否が応でも意識させられてしまう。白くすべらかな肌、やわらかそうな胸、なめらかにくびれた腰——全体的に肉付きが薄くてすらりとしているが、それでも十分に女だった。

「まさかこれで終わりだなんて思ってるんじゃないだろうな」

その嘲笑まじりの声を耳にして現実に引き戻された。

視線を移すと、目出し帽の男はスマートフォンを構えて動画撮影をつづけていた。そのまま翼のほうに大きく一歩近づいて、あらためてサバイバルナイフを突きつけなおし、顎をしゃくる。

「服の上にもでも寝てもらおうか」

「……………」

翼は眉をひそめて鋭い目つきで睨んだ。

しかし男は愉快そうにせせら笑う。

「いまだに泣きもせず震えもせず強気な顔を見せるとはさすがだな。この気高い西園寺の王子様を、俺がいまからオンナにしてやるんだと思うとゾクゾクするぜ。声が嘎れるまでよがらせてやるよ」

「やめろッ！！！」

創真はカッとして飛び出しかけるが、背後の男にがっちり二の腕をつかまれていたせいで叶わなかった。必死に振り払おうとしてもびくともしない。はずみでナイフが食い込んで再びぬるりとしたものが首筋を伝っていく。

「創真、落ち着け」

冷静にたしなめるその声で創真はようやく我にかえり、もがくのをやめた。しかし落ち着けるわけがない。砕けそうなほどギリギリと奥歯を食いしめていると、翼がぎこちなくもしたたかな笑みを向けてきた。

まだ、翼は絶望していない——。

そう確信して創真はすこしだけ冷静になれた。

背後の男は苦々しげにチッと舌打ちすると、血に濡れたナイフを首筋から喉元のほうに移して、いまにも掻き切らんばかりに刃を立てて押しつける。

「さっさと言うとおりにしねえと本当に殺すぞ」

「わかった」

翼はすぐさま積み重なった服の上で仰向けになり、手足を投げ出した。

目出し帽の男はニヤリとして腰元の鞘にサバイバルナイフを突っ込むと、翼をまたいで片方の膝をついた。空いたほうの手をねっとり肌這わせながら、上から下まで舐めるように撮影していく。翼は顔色も変えずじっと口を引きむすんでいたが——。

「いつまで我慢できるか見物だな」

「っ……！」

無骨な手がうっすらと色づいた胸の頂をなぶると、大きく息を詰めた。

その反応に男は気をよくしたように喉奥でクッと笑い、容赦なく攻め立て始めた。それでも翼は耐えていた。顔をそむけてしまったのもう表情は見えないが、体をこわばらせているのはわかる。

「そろそろ喘いでもらおうか」

男はにやついた声でそう言いながら膝裏を持ち上げる。

クソッ——創真は見られずギュッと目をつむって顔をそむけるが、背後の男は凝視しているらしく、思いきり前のめりになりながらごくりと生唾を飲んでた。

「うっ……あ……っ……」

生々しい音がして、やがて抑えきれない声が漏れ始める。

背後の男はますます興奮してハアハアと呼吸を荒くした。濡れた生ぬるい息が創真の頭頂部にかかる。吐きそうなくらい気持ち悪くて、殺したいくらい腹立たしくて、頭が沸騰しそうだ。

オレは何をすればいい、何をすれば——。

気がおかしくなりつつも必死に思案をめぐらせていると、創真の腕をつかんでいた手がふいに離れた。喉元のナイフも浮いている。どうやらポケットか何かをごそごと探っているようだ。

そっと視線を前に向ける。目出し帽の男はちょうど翼の脚から手を離れたところのようで、膝立ちのまま体を起こし、舌なめずりをしながらズボンのファスナーを下ろそうとしていた。

いましかない——！

創真は後ろを一瞥し、男の顎に狙いを定めて全力で頭突きを食らわせた。

あまりの痛さに涙がにじんだが構ってはいられない。後ろ手につけられた手錠のせいでよろめきながらも、すぐに数歩離れて身構える。しかし男は気絶したのか受け身もとらずにのけぞって倒れた。

「ぐあっ！！！」

つぶれた悲鳴に振り向くと、膝立ちになった男の急所を翼が仰向けのまま蹴り上げていた。即座に反対の膝で横っ面を蹴り飛ばし、倒れた男の腰元からサバイバルナイフを奪って突きつける。まるでフェンシングのような美しい構えで。

「この下衆が」

埃にまみれて悶え苦しむ男を見下ろしながら、吐き捨てるように言う。

その姿は崇高なまでに美しかった。すらりと引き締まった一糸まとわぬ後ろ姿、しなやかな姿勢、気品を失わない凜々しい横顔——創真は自分が置かれた状況も忘れて陶然と見とれていた。

第12話 首謀者

「無事か、創真」

翼は横たわった男にサバイバルナイフを突きつけたまま、ちらりと振り返った。大丈夫だと創真が答えると、安堵したようにほっと息をついていたが、すぐさま表情を引きしめて男のほうに向きなおる。

「動くなよ」

そう告げて、目出し帽をはぎ取った。

やはり見覚えはなかったようだ。急所を攻撃されて憔悴したのかぐったりとしていて生気がなく、鼻と口からは流血し、それが目出し帽でこすれてけっこう悲惨な見た目になっている。

翼はボディチェックをして武器類とともに手錠を没収し、それを男にかけた。さらにズボンをふくらはぎまで下ろして簡易的な足枷にする。裾はブーツの中に入っているので簡単には脱げないだろう。

一通り拘束を終えると、小さな棒状の鍵を手にして創真のほうにやってきた。いまだ一糸まとわぬ姿のままだが気にする様子もなく、ひそかにドキドキしている創真の背後にまわりこみ、手錠を外した。

「オレも何か手伝うよ」

「じゃあ、そいつを拘束してくれ」

「わかった」

翼から手錠を受け取り、傍らで気絶している男を転がして背中側で手錠をかけると、仰向けにしてズボンをふくらはぎまで下ろす。そしてボディチェックをして武器になりそうなものを没収した。

そのあいだに、翼は床に転がっていた男たちのスマートフォンを拾い集めていた。どちらも動画撮影中だったようだ。それを止めて、自動ロックがかからないようにスマートフォンの設定を変更する。

「持っていてくれ」

ふいに顔を上げたかと思うと、そう言いながら二台とも創真に手渡してきた。そして自由になった手で創真の襟をめくり、ナイフでつけられた首筋の傷を確認すると、うっすらと顔をしかめる。

「すまなかった、おまえまで巻き込んでしまって」

「翼のせいじゃない。オレが考えなしにあいつらに飛びかかったせいで、車に連れ込まれたんだ。助けるどころかむしろオレがいたせいで脅されて……オレのせいで……」

預かったスマートフォンを落とさないように気をつけながら、深くうつむく。自分の不甲斐なさがくやしくて静かに奥歯を食いしめていると——ぽん、と頭に優しく手を置かれた。

「いや、おまえの石頭のおかげで助かったよ」

顔を上げると、翼はやわらかく目を細めて笑みをたたえていた。

それが許されることなのかどうかはわからないけれど、その言葉で、その笑顔で、創真はほん

のすこしだけ気持ちが楽になるのを感じた。

そのあと翼はようやく制服を身につけた。

埃だらけの床だったものの、制服や下着はコートの上重ねて落としていたため、さほど汚れていなかった。ただ、コートだけは簡単には落ちないくらい白くなっている。あとでクリーニングに出すしかないだろう。

「創真、スマホを」

「あ、ああ」

曖昧に視線をさまよわせていたところ、ふいに声をかけられて、あわてて預かっていたスマートフォンを渡しに行く。翼は一台だけ手に取ると、地図アプリを立ち上げて現在地を確認してから電話をかけた。

「翼だ。創真とともに見知らぬ男二人に拉致監禁されたが、男たちはもう制圧した……ああ、ふたりとも無事だが創真がすこし首を切られている……いや、頸動脈までは至っていないし、出血はもう止まりかけているから心配するな。手当ての用意をして迎えにきてくれ。場所は——」

さきほど調べた住所をよどみなく告げて、通話を切る。

「すぐに車で来てくれる。二十分くらいだ」

「よかった……」

話し方からすると、翼が電話した相手は家族ではなく使用人のようだ。そのほうが冷静に対応してもらえと思ったのかもしれない。両親にはきっと使用人のほうから報告が行くのだろう。

翼はスマートフォンを持ったまま流血した男のほうへ向かうと、躊躇なく革靴で股間を踏みつけた。グァ、と男はつぶれた声を上げて苦悶に顔をゆがめるが、上半身をよじるのが精一杯で逃れることはできない。

「目的は何だ」

「……金だ」

脂汗をにじませながら苦しげな声で答える。

それでもまだ翼のまなざしは冷たく凍てついていた。股間を踏んだままの足にもう一度グッと力をこめる。男は悲鳴を上げて涙目になった。

「洗いざらい吐け」

「……うう……や、闇サイトの掲示板に載っていた高額の依頼に飛びついた。成功報酬百万。西園寺の男装令嬢を陵辱して動画に撮ってこいって……相手とはメールでやりとりしただけで会ってないし、名前も知らん。報酬を取りっぱぐれても西園寺を脅せば金になると思った」

翼はすぐに男のスマートフォンでメールを確認する。

創真も横からそれを覗いた。確かに男の言ったとおりのやりとりが残っていた。動画と引き換えに報酬を受け取ることになっているようだ。その際には直接会うことで話がまとまっている。

「誰だ……？」

翼は眉をひそめてつぶやいた。

しかし、すぐに気を取り直したように返信画面を開き、悩む様子もなく本文を入力していく。

例の動画が用意できた、今日中に取引したい——と。

「おい、そんな勝手なこと……」

おろおろする創真のことなど意にも介さず、さくっと送信する。

もちろん翼のことだから考えなしにやったわけではないと思うが、さすがに独断でここまでやってしまうのはまずいような気がして、創真は顔を曇らせた。

数分後、首謀者から了解との返事が届いた。

本日二十一時に宮前公園で——取引場所として指定されたのは、創真たちの通う桐山学園からそう遠くないところにある児童公園だった。ご丁寧に地図まで添付してあるので間違いない。

「敵は近くにいそうだな」

ニッと挑みかけるように口元を上げる翼を見て、創真も頷く。

こうなると翼と面識のある人物という可能性が高くなる。何となく西園寺グループを陥れるための犯行だと思っていたが、そうではないのかもしれない。嫌な予感にじわりと汗がにじむのを感じた。

「翼さま、翼さまっ?!」

部屋の外から男性の必死な声が聞こえてきた。

壁にもたれながら拘束した男たちを見張っていた翼は、すぐさまはじかれたように駆け出し、開いたままになっていた出入り口から廊下に顔を出す。

「こっちだ!」

大きく手を上げると、まもなくあわただしい足音とともに使用人たちが入ってきた。男性二人と女性一人は黒いスーツだが、残りの男性四人はそれぞれ私服らしきカジュアルな格好をしている。

「翼さま、ご無事ですか」

「そう言っただろう」

翼が軽く肩をすくめると、張りつめていた使用人たちに安堵の色が広がった。

そのうちのひとり、大きめの鞆を肩から提げている黒いスーツの男性が、すこし離れたところから見ていた創真に気付くと、すすっと歩み寄ってきた。

「傷を拝見します」

「あ、はい」

男性はそっと襟をめくって傷を見分する。

一方、ほかの使用人たちは翼を守るように立ちながら、みっともない姿で転がされている男たちに注目していた。ひとは気を失い、もうひとは血で汚れた虚ろな顔でぐったりとしている。

「この男たちが犯人ですね」

「そうだ、首謀者はほかにいるようだが」

「話を聞かせていただけますか」

「ああ」

翼は男たちのスマートフォンを証拠品だと言って手渡してから、これまでのことを説明し始める。まるで他人事のように――。

「傷を手当てしますので、こちらへ」

聞き耳を立てていると、傷の見分を終えたスーツの男性に小声で促された。翼たちのほうが気になっていたものの、あまりわがままを言える立場でもないので、こくりと頷いて従う。

連れてこられたのは、同じ階にある給湯室のようなところだった。

そこで指示されるまま上半身の衣服を脱いでシンクに前屈みになると、ペットボトルの水を何本も使って念入りに傷口を洗浄されて、大きな白い絆創膏が貼られた。途中、何度か痛みにもうめいてしまったが彼が気にした様子はない。

「応急処置ですので、早めに病院で診てもらってください」

「ありがとうございました」

そう言って一礼し、寒さに震えながらそそくさと衣服に手を伸ばしたが、

またこれを着るのか――。

派手に血で染まったシャツを目にしてひそかに嘆息する。それでもこれしかないのだから仕方がない。せめて外から見えないようにとダッフルコートの前をすべて閉じた。

部屋に戻ると、翼を含めて三人だけになっていた。

実行犯もいないので、彼らをしかるべきところへ連行していったのかもしれない。残っているスーツの男性と女性は、どういうわけかそろって困惑したような顔をして翼を見ていた。

「お気持ちはわかりますが……」

「上手くいったんだからいいだろう」

「あまり先走られては困ります」

おそらくすましメールで首謀者と会う約束を取り付けた件だ。

やはりというか翼にはまったく反省の色が見られなかった。立場上、男性はあまり厳しいことを言えないのだろう。物言いたげな顔をしつつもあきらめたように溜息をつく。

「首謀者は我々が捕まえます」

「僕も行く。この目で確かめたい」

「……見るだけにしてください」

「わかっているさ」

そこまで聞いて、創真は居ても立ってもいられず彼らのほうへ駆け出した。スーツの男性が振り向くとぺこりと頭を下げて直訴する。

「自分も連れて行ってもらえませんか？」

「では、翼さまが暴走なさらないよう見張っててください」

「え……あ、はい……」

戸惑いつつも、つい流されるように了承の返事をしてしまった。

案の定、翼はいかにも面白くなさそうに口をとがらせている。創真がえらそうに翼を見張るな

んて言うのだから無理もない。それでも使用人の手前だからか文句を言うことはなかった。

「翼っ！！！」

西園寺邸に到着して玄関を開けると、邸宅内から東條が駆けてきて力いっぱい翼を抱きしめた。創真は啞然とし、翼も抵抗はしていないもののひどく混乱した顔をしている。

「圭吾……どうしてここに……？」

「翼が連れ去られたことを知らせに来たんだ」

「えっ？」

東條はそこでようやく抱擁を解いて向かい合おうと、説明を始めた。

それは、東條が校門前で翼と別れたあとのこと。

今日発売の雑誌を予約していたことをふと思い出し、引き返して例の本屋へ向かっていたところ、遠くのほうで『翼！』と叫ぶような声を耳にした。それも気のせいかな創真の声に似ていて。

無視できず、その声が出たと思われるほうへ行ってみると、二つのスクールバッグが無造作に転がっているのを見つけた。まさかと思ったが、中を確認したところ間違いなく翼と創真のもので。

あわてて西園寺の家にあつたりのスクールバッグを届けて、状況を説明した。そのまま護衛チームが捜索を始めたのを見守っていると、翼から電話がかかってきて——ということらしい。

「なるほど、だから到着が早かったのか」

翼は得心したようにつぶやく。

言われてみれば確かに早かった。翼からの電話を受けたときにはすでに動き始めていたので、あれほどの人数が、あれほどの短時間で、それなりの準備をして迎えに来られたというわけだ。

「助かったよ、ありがとう」

「たまたまだけどな」

東條は満更でもないような顔で謙遜した。

そのとき——おそらく会話が一段落するタイミングを見計らっていたのだろう。護衛チームのひとりであるスーツの女性がすすっと翼に近づいて、気遣わしげに声をかける。

「翼さま、まずは入浴なさってくださいませ」

「そうだな……創真にもシャワーを貸してやってくれ。着替えもな」

「承知しました」

女性が一礼すると、翼はじゃあなと声をかけてから屋敷の中へ入っていく。ここへ来てもおな一切つらそうな顔は見せない。創真は何も言えず、ただじっとその背中を見送ることしかできなかった。

「翼はまだなのか？」

バスルームで汚れを落としたあと、待ち構えていた使用人に案内されるまま応接室に入ると、東條がソファでひとりくつろいで紅茶を飲んでいた。創真の問いかけに彼はティーカップを置きながら答える。

「母親のところに顔を見せに行くって。翼が連れ去られたって聞いてショックで倒れたみたいで、もう大丈夫だけど大事をとって安静にしてるらしい」

「ああ……」

母親の瞳子はあまり体が丈夫とはいえず、精神的にも脆いところがあるので、ショックで倒れたというのも納得のいく話だった。翼を跡取りとして溺愛しているのでなおさらだろう。

そのまま空いている二人掛けソファにゆったりと腰を下ろして、何気なく視線を上げると、向かいの東條が面白いような顔をしていることに気がついた。思わずムツとして口をとがらせる。

「言いたいことがあるなら言えよ」

「いや、それ着てる諫早くんがちょっとかわいいなと思って」

「は……？」

貸してもらった翼の服が似合っていない自覚はある。

ざっくりとした白タートルネックにデニムパンツというシンプルなものだが、何せサイズが合わない。袖口からは指先しか出ていないし、デニムパンツの裾もだいぶ折り返してあるのだ。

だからといってそんなふうにはからかわれるとは思わなかった。とっさに言い返せなかったことがぐやしくて、せめてもの腹いせに思いきり眉をひそめて睨むものの、彼は悪びれもせずに笑っている。

「失礼します」

まもなく創真にも紅茶が出された。

そういえば朝からずっと飲まず食わずだったなと気がつくのと、急に空腹を感じた。東條にからかわれたことなどもうどうでもよくなり、さっそく紅茶を飲んで、お茶請けとして出されていたフィナンシェを食べ始める。

「諫早くんも大変だったな」

「ん……」

ふいにいたわるような言葉をかけられて、フィナンシェを口いっぱい頬張ったまま曖昧に頷いた。まだ湯気が立ち上っている紅茶をすこし飲んでから言葉を継ぐ。

「でもまあ翼が無事だったし」

「怪我とかしなかったのか？」

「翼はな」

彼の反応からすると、やはり翼がどんな目に遭ったかまでは聞いていないのだろう。

当然、創真も話すつもりはない。護衛チームには翼自身がすべて話して動画も見せたようだが、本当は誰にも知られたくなかったはずだ。あのとき自分が見聞きしたことは墓まで持っていこうと決めている。

「ん、じゃあ諫早くんは……？」

「ナイフですこし首を切られた」

「えっ?!」

驚く東條に、創真はタートルネックをグイッと引っ張り、白い絆創膏が貼ってあるあたりを見せる。シャワーを浴びたあとに新しく貼り直してもらったので、血がにじんだりはしていないはずだ。

「たいしたことはないけどな」

「いやでもかなり大きいんじゃない」

「深くはないし」

そう受け流し、新しいフィナンシェに手を伸ばすと袋を開けてかぶりつく。東條の痛ましげなまなざしには気付かないふりをした。

「なかなか似合ってるじゃないか」

扉が開き、すぐに笑いまじりの声が聞こえてきた。

創真はムツとして飲みかけのティーカップを置きながら振り向く。思ったとおり翼は面白がるような顔をしていたが、それよりも手に持っている薄汚れたスクールバッグが気になった。

「それオレの？」

「ああ、念のため中を確認しておけ」

「わかった」

受け取ってファスナーを開けるが、学生証も財布もスマートフォンも何ひとつなくなっていなかった。買ったばかりの書籍もきれいなまま入れられている。

「大丈夫みたいだ」

そう答えると、翼は軽く頷いて創真の隣に腰を下ろした。

「ご両親にはこちらのほうから今日のことを説明して、謝罪もした。僕のことにおまえを巻き込んで怪我させてしまったからな。お母さんがずいぶん心配していたそうだから電話してやれよ」

「ああ……すまなかった……」

翼には何の非もないが、創真が巻き込まれて怪我をしたのは客観的事実なので、西園寺としては謝罪しないわけにいかないのだろう。むしろ創真のほうが足枷になって申し訳ない気持ちなのに。

「傷の具合はどうだ？」

うつむいていると、翼が隣から覗き込むようにして尋ねてきた。

創真はタートルネックの上からそっと手を当てて答える。

「痛みはあるけど、まあ」

「今夜は行けそうか？」

「そのくらい全然平気だ」

首謀者と会うといっても、陰からこっそり見るだけなので傷に障ることはない。翼が暴走したら止めてほしいと言われているが、護衛チームが行くのならそんなことにはならないだろう。

「今夜って何かあるのか？」

向かいで聞いていた東條が興味を示す。

彼がここにいることを失念していた。部外者に教えるのはまずいのではないかという創真の心配をよそに、翼は不敵な笑みを浮かべながらソファの背もたれにゆっくりと身を預け、どこか得意げに話し始めた。

ふっ、と創真の口から白い息がこぼれる。

宵の口から一段と寒さが厳しくなり、本格的に雪も降り始め、明かりの少ない夜の公園でもわかるくらいにあたりは白くなっていた。隅の生垣に身を隠している三人にも容赦なく降り積もっていく。

三人——そう、翼から話を聞いて東條もついてきてしまったのだ。もちろん護衛チームの許可を得たうえで。面白がっているのではなく、首謀者を目にする翼の精神面を心配してのことである。

母親には友達と夜ごはんを食べてくると言っただけ。実際、創真とともに西園寺でごちそうになったので嘘ではない。父親はいつも深夜まで残業で、母親も用事ができたそうなのでちょうどよかったようだ。

腕時計を見ると、約束の時間までもうあと五分になっていた。

ほとんど声も出さず、動きもせず、傘も差さず、雪の降りしきる中で二十分以上もしゃがんでいたため、すっかり体が冷えてしまった。指先は痛いくらいだ。吐く息もいっそう白くなった気がする。

けれども隣の翼はすこしも寒そうにしていない。髪や肩に積もりゆく雪をはらいもせず、凜と張りつめた表情を崩そうともせず、ただ一点、公園の入口だけをじっと見つめつづけている。そして——。

「来た！」

ひそやかながら興奮を隠せない声を上げた。

創真も東條もハッとして入口のほうに目をこらす。そこには大きなマスクをして、サングラスをかけて、つばの広い帽子をかぶっている女性がいた。どう見ても真冬の夜の公園に来る格好ではない。

「えっ……まさか……」

「知ってるのか？」

振り向くと、東條はその女性を凝視したまま難しい顔をしていた。気のせいかな瞳が揺らいでいるように見える。

「東條？」

呼びかけてもやはり返事はなかった。

だからといって語気を強めて問いただすわけにもいかない。そんなことをすれば隠れていることに気付かれてしまう。微妙な気持ちのまま、彼の視線をたどるように再び公園内に目を向ける。

そこでは護衛チームのひとりが取引相手として女性に接触していた。短いやりとりで首謀者で

あることを確認すると、隠れて待機していた護衛チーム数名があっというまに取り囲んだ。

「ちょっ、やめて……っ！」

抵抗も虚しく、帽子もマスクもサングラスもはぎ取られていく。

顔が露わになっても、創真のところからでは遠いうえに薄暗いのでよくわからない。それでもどうにか見ようと目をこらしていると、ゆらりと隣の東條が立ち上がった。

「なんで……母さん……」

「えっ?!」

創真と翼はそろって声を上げた。

翼はすぐさま我にかえり、華麗に生垣を飛び越えて彼女のほうへ駆けていく。あわてて創真もあとを追った。ふたりとも途中で護衛に止められてしまったが、この距離なら顔まで見える。

「あなたが……どうして、僕を……」

首謀者は、確かにあのとき会った東條の母親だった。

どうにか声を絞り出した翼を、彼女は憎しみのこもった目でキッと睨みつける。後ろから西園寺の護衛に羽交い締めにしたまま、髪を振り乱して――。

それは、朝からしとしとと小雨が降りつづく肌寒い梅雨の日のことだった。

榎本茉美は母親に連れられて祖父の葬儀に参列していた。祖父といっても会ったこともないひとだ。母親も含めて皆が沈痛な面持ちをしている中、どんな顔をしていいかわからずひどく居心地が悪かった。

葬儀のあと、亡くなった祖父の屋敷に移動したのだが、母親の実家でもあるそこは見たこともないような豪邸だった。母親がとんでもないお金持ちのお嬢様だったことを、茉美はこのとき初めて知った。

中学生になりたての娘から見ても彼女は品のある美しいひとだ。それも育ちのよさゆえだったのかと納得する。喪服で儂げにうつむく姿は、不謹慎かもしれないがいっそう美しさが際立って見えた。

「史絵」

ふいに呼ばれたのは母親の名前だ。

振り向くと、喪主を務めていた男性がこちらに歩み寄ってきた。

彼は史絵の兄だという。史絵が貧乏画家と駆け落ちして実家とは没交渉だったため、十数年ぶりの再会らしい。彼はとても懐かしそうにしていたが、史絵のほうは一線を引いたように他人行儀な姿勢を崩さなかった。

その微妙な空気に、茉美は何となく居心地の悪さを感じてそっと一步下がった。うつむいて自分の足元をぼんやりと眺めていると、気のせいかわ視線を感じたような気がして顔を上げる。

案の定、史絵の兄に付き従っていた青年がじっとこちらを見つめていた。それもひどく熱のこもったまなざしで――。

そわそわと落ち着かないのに、どうしてだか搦め捕られたように目をそらすことができない。体温まで上がった気がする。ついさきほどまで半袖セーラー服のせいで肌寒く感じていたが、いまは汗がにじみそうだ。

「父上」

青年がふと向きを変えて史絵の兄に声をかけた。

熱いまなざしから解放されるとたんに茉美は大きく息をついた。知らないうちに息を詰めていたらしく、苦しかったんだとそのときようやく気がついた。体が熱いのもそのせいなのだ納得した。

「こちらの方々は？」

「妹の史絵と、史絵の娘の茉美ちゃんだ」

「はじめまして。長男の西園寺征也です」

征也と名乗った青年は、人当たりのいいさわやかな笑みを浮かべて挨拶する。

あらためて見てみるとすごく格好のいいひとだった。芸能人でもなかなかいないくらいの整った顔、男性らしさを感じさせるしっかりとした体、すらりと長い手足――きっと誰もが目を奪われてしまうのではないだろうか。

「茉美ちゃん」

「あ、はい」

不躰に観察していると、ふいに彼から名前を呼ばれてドキリとした。

「ここにいても大人たちばかりだし、話し相手もいなくてつまらないだろう？ 二階で僕とボードゲームでもしようか」

「あ……えっと……」

ちらりと母親を見上げると、彼女は困ったように眉を下げて淡く苦笑した。

「行ってきたら？」

「うん……」

行きたかったわけではなく困惑していただけなのだが、母親には行きたがっているように見えたのかもしれない。仕方なく頷くと、征也に促されるまま若干緊張しながら扉のほうへ歩き出した。

茉美は二階へつづく階段をまえにして、足を止める。

さすが豪邸だけあって階段もびっくりするくらい立派だった。幅広なうえに絨毯まで敷かれていて宮殿と見まがうくらいだ。呆気にとられていると、征也がにっこりと微笑んで茉美の手を引いた。

えっ——。

大人な彼にとってはどうということはないのだろうが、茉美は同級生の男子ともほとんど手をつないだことがない。せいぜいフォークダンスくらいだ。それなのにいきなり手を握られてうろたえてしまった。

しかしながら彼は手を離そうとしなかった。見た目よりもずっと大きくて厚くて骨ばっているその手に、否応なく大人の男性であることを感じさせられてしまい、ますますドキドキと鼓動が速くなる。

「さあ、入って」

連れてこられたのは征也の部屋だった。

応接室みたいなところに行くものだと思っていたので戸惑うが、いまさら断れなくておずおずと足を進めると、なぜかベッドのほうへ誘導されてそこに座らされた。征也も隣に腰を下ろす。

ソファもあるのにどうして、と思うものの勇気なくて尋ねられない。膝に置いた手をぎゅっと握りしめながらうつむき、身をこわばらせていると、ふいに気配で彼が動いたのがわかってビクリとした。

「あの……ボードゲーム、は……」

うつむいたまま、カラカラの喉から震える声を絞り出す。

けれど征也は答えてくれなかった。ふっと小さく笑って茉美のほうに手を伸ばすと、ボブカットのまっすぐな黒髪にそっと指をすべらせ、その流れのまま顎から頬へゆっくりと撫でていく。

茉美はもう息もできなかった。家族や医者以外のひとに顔を触れられることなんてないし、家族や医者の触れ方とは違う気がする。よくわからないが何か嬲られているように感じた。

「せ、いやさん……」

「ん？」

征也はひどく甘ったるい声でそう応じると、茉美の顎に手を添えて自分のほうへ向かせる。そのまなざしにはあのときと同じ熱がこもっていた。またしても茉美は搦め捕られたように目をそらせなくなる。

彼の顔がじりじりと近づいてきた。生ぬるい吐息がうっすらと鼻先にかかるのを感じた瞬間、ビクリとして身を引こうとするが、いつのまにか後頭部に添えられていた手によって阻まれてしまった。

なすすべなく現実から逃げるようにギュッと目をつむった直後、唇にあたたかいものが触れた。びっくりして目を開けると、近すぎてほとんど見えないくらいのところに彼の顔があった。

キス、されてる——？！

むちゃくちゃに頭をのけぞらせながら体を突き放して逃れると、その勢いでベッドに倒れ込んだ。すぐに起き上がろうとしたが、征也に四つん這いで覆い被さるようになじり寄られて、逃げ道をふさがれる。

「やっ……」

顔の両横に手をつかれ、あのまなざしで真上から見下ろされ、茉美はカラカラに渴いた喉からか細い声をもらした。それを聞いて征也はすっと目を細める。

「嫌？」

「……………」

彼の表情を目の当たりにして、とてもじゃないが本当のことなんて言えなかった。とにかく怖くてたまらなかった。顔はこわばり、小さな細身の体は小刻みにカタカタと震え始める。

「茉美ちゃん、そんなに怯えなくても大丈夫だよ。優しくしてあげるから」

その言葉はさらなる恐怖を煽るだけだった。

けれど征也はおかまいなしにセーラー服のスカーフを解き、中央のファスナーをゆっくりと下ろして左右に開くと、現れたスポーツブラを丁寧にたくし上げていく。

「ひっ」

裸の胸がさらされて、茉美は引きつれた声を上げた。

それでも征也が気にする様子はない。ささやかなふくらみにそっと触れ、感触を確かめるようにやわやわと指を動かしていたかと思うと、おもむろにそれを口に含んだ。

「?!」

思いもしなかった彼の行動に茉美はパニックになる。

舌で転がすように先端をねぶられ、もう片方は指でいじりながら揉まれ、わけのわからないまま呼吸が乱れて小さな声が漏れ始めた。そんな自分が怖くてギュッとシーツを掴んで口を引きむすぶ。

「茉美ちゃん」

征也は顔を上げ、思わせぶりの微笑を浮かべて茉美の唇を舐めた。

驚いて口元がゆるんだ瞬間、その口を覆うようにキスされて舌をねじこまれ、その肉厚な舌で

容赦なく中を舐めまわされる。無理やり舌を絡められて吸われる。逃げられず、息もできず、あまりの苦しさにささやかな抵抗すらできなくなってきた。

気が遠くなりかけたころによやく口づけを解かれた。くたりと身を投げ出したまま必死に呼吸をしていると、あっという間にショーツをはぎ取られてしまった。けれど、まだぼうっとしていて頭が働かない。

飾り気のないコットンのショーツが放り投げられるのを虚ろに眺めていたら、征也が膝裏に手を入れて片脚を持ち上げ、意味深長な笑みを浮かべて茉美を見つめながら、内腿に頬を寄せて見せつけるようにそこに口づける。

その挑発的なまなざしに、熱く濡れた吐息に、茉美は奥底からぞくりと震えた。

互いに視線を絡ませたまま、征也は内腿に頬ずりしながらじりじりと下のほうへ向かっていく。そして付け根の秘められしところをじっと見つめると、指で割り開いてべろりと舌を這わせた。

「ひっ……あ……っ……！」

その信じられない行動とあまりにも強烈な感覚に、思考が焼き切れる。

しかしながら彼の行動はそれだけでは終わらなかった。茉美は悲鳴のような嬌声をこらえることもできずに翻弄されていく。やがて征也がベルトを外してスラックスの前をくつろげ、そして――。

何もわからないまま、嵐のように茉美をぐちゃぐちゃにして事は過ぎ去った。

茉美はセーラー服を整えもせず力なく手足を投げ出して、シーリングライトを眺めながら、しとしと降りつづく外の雨音をぼんやりと聞いた。

多分、これがセックスだったんだ――。

言葉は知っていたが、映画やドラマで何となく見たことがある程度だったので、ただ男女が裸で抱き合うものだという認識しかなかった。けれど、きっとそれだけではなかったのだ。

征也はベッドのそばで涼しい顔をしてネクタイを締め直し、喪服を整えていた。さきほどまで見せていた捕食する獣の面影はどこにもない。本当に同一人物なのかと疑ってしまうくらいに。

「そろそろ起きられるかい？」

ふとこちらに振り向いた彼にそう問われて、茉美はビクリとした。

めくれていたスカートを簡単に直し、セーラー服の前をかき合わせながら、よろよろと体を起こす。まだあちこちに違和感があるうえとてもだるいが、そんなことはとても言えなかった。

彼はふっと笑い、前をかき合わせたままうつむく茉美の髪にそっと触れた。体をこわばらせても気にすることなくゆっくりと指を通し、その指を顎に添えておもてを上げさせると、うっすらと不敵に笑いながら覗き込む。

「茉美ちゃん、ここでのことは誰にも言ってはいけないよ」

ショーツを握った手を見せつけるようにしながらそう言われ、茉美はぎこちなく頷くしかなかった。

あの日からほどなくして梅雨が明け、夏休みに入った。

結局、征也にされたことは親にも誰にも話していない。征也に言われたからというものもあるが、それ以前に恥ずかしくてどう話したらいいのかもわからない。もう忘れよう、そう自分に言い聞かせつつ過ごしていたのだが――。

「茉美ちゃん」

図書館で宿題をして帰ろうとしたとき、ふと声が聞こえた。

振り向くと、歩道に横付けされた白い車からビジネススーツ姿の征也が降りてきた。茉美がビクリとしたことに気付いているのかいないのか、助手席の扉を開いて好青年の笑みを浮かべる。

「さあ、乗って」

「あ……あの……」

「乗って」

その有無を言わせぬ口調に、まなざしに、茉美はぞっとして断ることも逃げることもできなかった。追い込まれるように感じながらぎこちなく助手席に座ると、彼は不敵に微笑んで扉を閉めた。

連れてこられたのは立派なホテルだった。

地下の駐車場から直接エレベーターで部屋まで向かい、カードキーで中に入る。茉美は何となく彼の思惑を察して顔面蒼白になるが、しっかりと手をつながれていて逃げ出せそうにない。

「そんなに怖がらなくて大丈夫だよ。二回目はもう痛くないから」

「あ、の……わた……し……」

「茉美ちゃん、すごく気持ちよくしてあげるからね」

征也はつないだ手に力をこめ、にっこりと満面の笑みを浮かべてそう告げる。

茉美は背筋が凍りつくような恐怖を感じて何も言えなくなった。手を引かれるまま部屋の中へ進むと、薄汚れたスニーカーをひざまずいた彼に脱がされ、そのまま太腿を抱えながら内側に口づけられた。

「やっ……」

強く吸われて赤い痕がつく。

彼はそれを確認して満足げに微笑むと、いまにも泣きそうになっている茉美を横抱きにして、大きなベッドのある部屋へと連れて行った。もう茉美がどれだけ泣いても叫んでも誰にも届かなかった。

それから征也はときどきふらりと茉美のまえに現れては、ホテルに連れ込んだ。

そうして何度も抱かれるうちに怖いとも嫌だとも思えなくなっていた。恥ずかしいという気持ちはいまでも消えないけれど、恋人のように大事に扱われると悪い気はしない。いつしか彼が来ることを心のどこかで期待さえするようになっていた。

そんな関係が二年半ほど続き、中学の卒業式を間近に控えたある日――。

「え……結婚……？」

にわかに理解できず、茉美は思わず運転席の征也に振り向いて聞き返した。彼はハンドルを握って正面を向いたまま眉ひとつ動かさず、当然のように答える。

「そう、僕は西園寺の跡取りだからね。先日、父が懇意にしている社長のお嬢さんとお見合いをして、婚約したんだ。だから茉美ちゃんと会うのは今日が最後になる」

「……………」

まだ中学生ということもあり結婚までは考えもしなかったが、もう恋人のようなものではないかと勝手に思っていただけに、少なからずショックを受けた。

「ごめんね、茉美ちゃんとは結婚できないんだ。でも今日はいっぱい愛してあげるよ」

なぜ自分とは結婚できないのだろう。いいところのお嬢さんではないからか、母親が西園寺家と縁を切ったからか、それとも他に理由があるのか——気になるけれど尋ねることはできず、ただ静かに表情を消してうつむいた。

その日を最後に、本当に征也は現れなくなった。

茉美は高校でも大学でもたくさんの男子に告白されたが、誰にも心が動かなかった。どうしても征也と比べてしまうのだ。いつまでもこんなことではいけないとわかってはいるが、どうしようもなかった。

大学を卒業すると、大手総合商社に一般職として入社した。

そこで、まだ新人研修も終わっていないうちに、赴任先の中東から戻ってきたばかりの男性社員に告白された。一目惚れだという。結婚を前提におつきあいしていただけますか——まっすぐに目を見つめながらそう言われ、翌日、よろしく申し上げますと返事をした。

そろそろいいかげんに征也のことを忘れなければと思っていたのもあるが、告白に頷いたのは彼がどことなく征也に似ていたからだった。征也のほうがすこし身長は高いものの体格はよく似ており、年齢は同じで、顔はそっくりというほどではないがどちらも男らしく端正なのだ。

ただ、彼は征也と違ってとても誠実だった。健全なデートを重ね、打ち解けてきたころによく触れるだけのキスをするようになり、交際を始めてから半年後にレストランで正式なプロポーズをされた。初めて体を重ねたのは、そのプロポーズに了承の返事をしたあとだった。

婚約から半年後、彼——東條真一郎と茉美は結婚した。

退職して専業主婦になったのは彼の希望である。自分は仕事が忙しいので家のことを任せたい、自分を癒やしてほしい、もし海外赴任になったときには着いてきてほしい、と言われたのだ。茉美は特に働きたいわけではなかったのが構わなかったが、入社からたった一年で辞めることは心苦しかった。

「茉美ちゃん」

自宅に帰り着いて門扉を開けようとしたところ、背後から呼ばれてビクリとした。

その声は何度も何度も聞いたあのひとのものによく似ていた。茉美ちゃんと呼ぶのもあのひとだけだ。幻聴だったのではないかと思いつつおそるおそる振り返ると、はたしてそこには征也がいた。

彼はあのころよりもっと大人の男性らしく精悍になっていて、ビジネススーツが憎らしいくらいよく似合っていた。凍りついたように固まってしまった菜美を見ながら、愛おしげに目を細める。

「きれいになったね」

その声にあからさまな熱を感じて菜美はぞくりとした。しかし、流されるわけにはいかないと全身にグッと力をこめる。

「あなたとは何も話さない」

「そう邪険にしないでくれ」

「お帰りください」

「家に上げてくれないか」

「……………」

そう、征也はこういうひとだった。

帰ってと声を荒げたところで素直に帰りはしないだろうし、むしろ困るのは自分だ。すでにこの状況からして十分すぎるくらいにまずい。ご近所さんに見られたらあらぬ噂を立てられてしまう――。

「わかりました」

不本意ながら、ひとまず自宅に入ってもらうよりほかになかった。いや、もしかしたらもっといい対処法があったのかもしれないが、ひどく焦っていたこのときの菜美には考えつかなかった。

「どういったご用件でしょうか」

応接間でお茶を出しながら事務的な口調で尋ねると、征也は色っぽく目を細めた。

「菜美ちゃんが忘れられなくてね」

何となく予想はしていたが、いきなりそう切り出されるとは思わなかった。動揺を見せないよう静かにお盆を抱えて立ち上がり、ソファに座っている彼を睨むように見下ろす。

「あなたも私も結婚しています」

「妻とは政略結婚みたいなものだ」

「私には関係ありません」

「菜美ちゃんも僕を求めている」

「勝手なことを言わないで」

「旦那さんを見たよ」

思いもしなかったことを言われてハッと息をのんだ。どういうつもりなのかと警戒しながら口を引きむすぶと、征也はゆっくりと菜美を見上げて挑発的な笑みを唇にのせる。

「どことなく僕と似ていたな」

「……似て、なんか……」

「しかしあれでは劣化コピーだ」

「そんなこと！」

「君はあれで満足できるのか？」

「やめて……っ！」

痛いところをつかれて、茉美はただわめき散らすことしかできなかった。お盆をギュッと抱え込んでうつむくと、ソファに座っていた征也がおもむろに腰を上げる。

「茉美ちゃん」

「帰って！」

「ごめんね」

何に対しての謝罪かわからない。

それなのに茉美の頑なな気持ちと体は一瞬ゆるんでしまった。その隙をついて唇を奪われる。あわてて身をよじって抵抗するが、抱えていたお盆が落ちただけで彼の腕からは逃れられない。

「もうやめて！」

「茉美ちゃん」

征也は小柄な体を抱き込み、その耳朶にくちびるを寄せて甘い毒のような声を注ぎ込む。

「なあ、旦那さんに僕との関係を話したらどうなると思う？」

「っ……」

夫は茉美のおとなしく控えめなところを気に入っているのだ。お互い独身だったころのこととはいえ征也との関係を知られたら、そのうえ征也に似ていたからつきあったなんて知られたら——抵抗する力が弱まっていく。

「そう、素直になるんだ」

征也はいかにも満足そうにささやいた。

脅しておきながらよくもそんなことを——じわりと目が熱くなり、こらえきれずにあふれた涙がついと頬を伝い落ちていく。それでも、茉美はもう彼のなすがままになるしかなかった。

それから、征也はときどきふらりとやってきては茉美を抱いた。

一、二か月に一度程度だったし、いつもビジネススーツを身につけていたので、ご近所さんに怪しまれることはなかったはずだ。もちろん夫にも気付かれないよう細心の注意を払っていた。

そんな関係が一年ほど続いた、ある日——。

征也はいつものように遠慮のかけらもなく家に上がり込み、あたりまえのように茉美を抱こうとした。しかし茉美は流されるまえに強い気持ちで押しとどめると、まっすぐに目を見つめて告げる。

「私、妊娠しました」

「……そう」

そんなことは気にせず情事に及ぶのではないかと危惧していたが、彼の瞳からは一瞬で熱が消え失せた。茉美の体から手を離して、どこか皮肉めいた何ともいえない微妙な笑みを浮かべる。

「旦那と仲良くやってたんだな」

「……………」

茉美が黙っていると、彼は傍らのビジネスバッグを手にとって玄関に向かい、そのまま振り返ることなく出て行った。扉が閉まる音を聞いて、茉美は嗚咽を堪えるように両手で口元を覆い

ながら崩れ落ちた。

それから、征也が来ることは二度となかった。

だけどもう手遅れだ。どうあっても忘れられないひとになってしまっていた。子供が生まれると育児に追われて深く考える余裕はなくなったが、心と脳裏に浮かんで泣きそうになることはよくあった。

ある日、三歳になった息子が砂場のある公園に行きたいと駄々をこねた。いつも行っている近場の公園にはないのだ。春めいたうららかな日だったので、すこし離れた公園へ自転車で連れて行くことにした。

機嫌よく砂をいじっている息子をそばで見守っていると、同じ年頃の子供がやってきて息子の隣にしゃがんだ。息子はうれしそうにいっしょにあそぼうと声をかけて、その子もニコッと頷いた。

その様子を微笑ましく眺めていたが、そういえばこの子の親はどこにいるのだろうかとあたりを見まわす。すこし離れたところにじっとこちらを窺っている男性がいて——認識した瞬間、息をのむ。それはまぎれもなく征也だった。

じゃあ、この子は——。

バツと振り向いて砂場で息子と遊んでいる子を凝視する。男児か女児かはわからないけれど、とても整ったかわいらしい顔立ちをしていた。やわらかそうな栗色の髪は母親似なのかもしれない。

その子は視線に気付いたのか不思議そうにこちらに振り返るが、目が合うなり怯えたようにビクリとする。そのとき初めて、茉美は自分が醜い感情をあらわにしていたことに気がついた。

妻とは政略結婚でもう冷え切っている——。

そう言っていたはずなのに、その裏でちゃっかり子供を作っていたのかと思うと、怒りがこみ上げるのは自然なことだろう。だからとっていまさらそれをぶつけるわけにもいかず、ただじっと立ちつくしていた。

「翼、そろそろ帰ろうか」

ひとしきり遊んで満足したのか、その子は満面の笑みでトタトタと駆け出して征也に抱きついた。砂場で佇んでいる息子に振り向いてバイバイと手を振ると、征也に抱き上げられて公園をあとにする。

「あの子、また来るかなあ」

「そうね……」

息子はあの子をたいそう気に入っていたようだが、どんなにせがまれても、駄々をこねられても、もう二度とあの公園に連れて行くことはなかった。

後日、息子の幼稚園で他のママたちが話しているのを聞いて、西園寺家には四人の子供がいるがすべて女の子であること、末娘が息子と同じ年齢であること、末娘を跡取りにするために男の

子として育てていることを知った。

それからしばらくして夫の海外赴任が決まり、家族で日本を離れた。

慣れないことが多くて大変ではあったが、日本にいたころと比べてずいぶん心穏やかになった。征也と顔を合わせる心配がなかったからだろう。そのうち過去に苛まれることもなくなっていった。

そして日本に戻ってからも、もう征也の存在を意識するようなことはなく、それなりに幸せで心穏やかな日々を送っていた。あの日、息子が西園寺の末娘を家に連れてくるまでは――。

西園寺邸の一室で、首謀者である茉美は洗いざらいぶちまけた。

西園寺家の現当主である西園寺徹はゆっくりと息をつき、重厚な会議テーブルの上で両手を組み合わせながら、無感情なまなざしを息子の征也に向ける。

「征也、どうなんだ」

「おおむね彼女の言うとおりでです」

彼は動じる素振りもなく静かに認めた。

妻の瞳子はますます顔面蒼白になってうつむき、そして翼も表情を硬くする。物心がついたころから父親を尊敬してきただけに、ショックも大きいはずだ。まだどこか信じられずにいるのかもしれない。

そして東條もひどく動揺して混乱した顔をしている。母親のされたこと、母親のしたこと――どちらも衝撃的で、そう簡単に気持ちに折り合いはつけられないだろう。標的にしていたのが大切な友人となればなおさらだ。

「翼は……関係ないだろう……」

膝の上でグッとこぶしを握りながらうつむき、苦しげに声を絞り出す。

しかし茉美はうっすらと自嘲めいた笑みを浮かべて言い返す。

「私を蹂躪しておきながら、征也さんは素知らぬ顔をして幸せな家庭を築いている。その証が西園寺翼なのよ。圭吾と同時期に生まれているのが許せなかったし、西園寺家の跡取りとして大事にされているのも許せなかった」

そこで息を継ぎ、ゆっくりと視線を上げて征也を見据える。

「圭吾は、征也さんの子供です」

「……………?!」

一拍の間ののち、その場にいた全員が驚愕した。

創真も翼も息をのんで大きく目を見開き、瞳子は口元を両手で覆い、圭吾は口を半開きにしたまま固まり、征也も愕然として青ざめた顔をしている。当主の徹だけが驚きつつもどうにか平静を保っていた。

「茉美さん、根拠があるのなら教えてもらいたい」

「征也さんに似ているでしょう」

思わずふたりを見比べる。確かにそれなりに似ているような気はするが、東條の父親を見たこ

とがないので何ともいえない。そもそも東條の父親からして征也に似ているという話なのだ。

徹も見比べていたが、やはり決定的なものは見いだせなかったようだ。どこか困惑したように眉をひそめたかと思うと、茉美に向きなおり、配慮を感じさせる申し訳なげな口調で要望を伝える。

「できればDNA鑑定をさせてもらいたいのだが、構わないだろうか」

「圭吾が同意すれば」

茉美はさらりとそう返事をする。

根拠はなくても、きっと彼女なりに自信を持っているのだろう。単に思い込みが激しいだけなのかもしれないが――。

「うっ……」

とうとう瞳子が口元を押さえてうつむき嗚咽をもらし始めた。細身の体は小刻みに震えて、いまにも倒れそうなくらい頼りなく見える。実際、すこしまえまで心労で倒れて横になっていたのだ。

「瞳子さん、また倒れないうちに部屋で休みなさい」

徹はそう告げると、内線電話で使用人を呼んで瞳子を退出させる。

彼女もそろそろ限界だと感じていたのか素直に従った。使用人に支えられながらよろよろと出て行くその姿を目にして、征也はそっと視線を落とした。

「さて……」

そう言いながら、徹はあらためて両手を組み合わせて姿勢を正すと、左手側にいる翼に問いかける。

「おまえはこの事件にどう決着をつけるべきだと考える？」

「犯罪であることは明白なので警察に委ねるしかないでしょう」

「その場合、事件も過去も白日の下にさらされることになるが」

「それは……仕方ありません……」

茉美だけの問題ではない。東條は犯罪者の息子となり、これまでどおりの生活が望めなくなるかもしれない。翼もきっと好奇の目を向けられる。西園寺グループへの影響も計り知れないのではないだろうか。

もちろん翼もわかっているに違いない。わかっているからこそこんなにもつらそうな顔をしているのだ。まわりの誰にも目を向けることもなく深くうつむき、グッと奥歯を食いしめている。

そんな翼を、徹は真剣な表情のまま奥底まで探るようにつめていた。そう長い時間ではなかったはずだが、息の詰まりそうな重い沈黙がつづいたあと、ゆっくりと小さく頷いて口を開く。

「おまえは正しい……だが、正しいことが最善とは限らん」

威圧的ではないが威厳を感じさせる声。

翼はつられたように顔を上げて怪訝なまなざしを送るが、それに気付いているのかいないのか、徹は会議テーブルをはさんだ向かいのほうに視線を移した。

「茉美さん、今後、征也との過去を口外しないと約束してくれるなら、今回の件は警察沙汰にし

ない。あなたは罪に問われなくてすむ。圭吾くんのためにもそのほうがいいと思うが、どうだろうか」

「……………」

動揺、憎しみ、安堵、怒り、戸惑い——さまざまな感情をその顔によぎらせながら、彼女はぎこちなくうつむいた。しばらくそうしていたが、やがてゆっくりと深く呼吸をして顔を上げる。

「わかりました。口外しないとお約束します」

わずかに震える声で、それでも迷いなくはっきりとそう答えた。

それは翼の意に沿わない決着だ。そうわかっていながら創真はひそかに胸をなで下ろした。これできっと翼がされたことは表沙汰にならないし、東條も犯罪者の息子にならずにすむと。そのとき——。

「創真くん、そういうわけで君に傷を負わせた犯人を警察に突き出せなくなった。ここで聞いたことの口止めも強いることになる。勝手に言って申し訳ないが承服してもらえないだろうか」

「オレは別に構いませんけど」

わざわざ徹が自分に許しを求めてくるとは思わなかったので、すこし驚いた。

しかし、考えてみれば創真が警察に被害を訴えたら水の泡になってしまうのだ。何がなんでも納得してもらわなければならないということであれば、下手に出るのも無理はないのかもしれない。

「あ、でも親にはなんて言えば……」

「ご両親には我々から話しておこう」

「お願いします」

創真はほっとして頭を下げた。

しかし、隣の翼はまだ得心がいかないような物言いたげな顔をしていた。それでも異議を唱えるつもりはないのだろう。会議テーブルの上で重ねていた両手にそっと静かに力をこめて、口を引きむすんだ。

第14話 大切な友達

「あけましておめでとう」

駅前で待っていた東條は、翼と創真が連れ立ってやってきたことに気付くと、どこか気まずげな笑みを浮かべて年始の挨拶をした。翼は何でもないかのように笑いながら同じ言葉を返し、創真はその隣で会釈をした。

元日、三人で初詣に行こう——。

そう提案したのは翼だった。よりによって拉致事件の首謀者と動機が明らかになったあのあとに。東條は渋っていたが、翼が待ち合わせ場所と時間を決めてしまったので断れなくなったのだ。

合流した三人は予定どおり電車でとある有名な神社へ向かう。神社の最寄り駅はすでに参拝客と思しき人々であふれかえっていた。境内はさらに混雑していて思うように歩くことさえ難しい。

「ちょ……うわっ！」

創真はうっかり人波にのまれて翼と東條の姿を見失ってしまった。探そうにも人の流れに逆らって進むのは困難だし、小柄なのでまわりを見渡すこともできない。人混みに揉まれながらわたわたとしていると——。

「見つけた」

その声と同時に手をつかまれる。

振り向くと、そこには思ったとおり翼がいて安堵の表情を浮かべていた。その後ろで東條もほっとしている。しかし三人ともすぐに人の流れに押されるように歩き出した。

「急にいなくなるから驚いたぞ」

「オレも……」

手は翼に握られたままだ。

また迷子にならないようにということだろうが、むずがゆいような照れくさいような気持ちになり、火照った頬を隠すようにマフラーに顔を埋めていく。冷えていた手もじわじわと熱を帯びてきた。

やがて人の流れが止まると手を離された。急にすうっと冷たい空気が通りすぎていくのを感じて、何か無性に寂しくなる。隣に目を向けると、翼はつま先立ちになりながら前方の様子を窺っていた。

「けっこう並んでいるな」

この先が賽銭箱らしいが、たどり着くまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。

にもかかわらず三人とも黙りこんでしまった。いつもなら翼があれこれと話を振ってくるのに、今日はやけにおとなしい。東條も遠慮がちに見える。やはりクリスマスの日のことが影響しているのだろう。

「そろそろ賽銭の準備をしておけよ」

長い沈黙のあと、思い立ったように翼が口を開いた。

だいぶ賽銭箱に近づいたのだろう。背の低い創真からはまだよく見えないが、小銭がぶつかるような音はすでに前方から聞こえている。財布を開け、五円玉がなかったので十円玉をひとつ手にとった。

最前列にたどり着くと、賽銭箱の代わりに大きく白布が広げられているのが見えた。みんなそこに賽銭を投げ入れている。こんなので本当に御利益があるのだろうかとか疑問に思いつつ、創真も十円玉を投げ入れた。

これ以上、悪いことが起きませんように――。

もう二度とあんなことは起こってほしくないし、翼にも、東條にも、二度とあんな思いはしてほしくない。神様なんて信じていないのに、このときばかりは両手を合わせて真摯に願いをかけた。

ちらりと隣を窺うと、翼はまだ目をつむったまま両手を合わせて祈っていた。その端正な横顔は、雲の切れ間から降りそそぐ光の加減でとても神秘的に見える。栗色の髪もやわらかく光り輝いていた。

「行こうか」

翼はそっと目を開けると、小さく微笑みながら両隣のふたりにそう声をかける。創真も東條も無言で頷き、翼のあとを追うように白い賽銭入れのまえから退いた。

「なあ、俺、おみくじ引いてみたいんだけど」

東條がそう言うので、三人でおみくじを引くことになった。

彼はずっと海外暮らしだったのでおみくじを引いたことがないという。初詣もこれが初めてらしい。日本に帰ると決まって楽しみにしていたなんて話を聞かされたら、つきあうしかないだろう。

創真は何年か前に一度だけおみくじを引いたことがあるが、そのときは末吉だった。凶は入っていないところも多いようなので実質最下位だ。それより悪いものは出ないよなと気楽に引いたが。

凶――。

そのうえ、願いごとは「破れる恐れあり」、旅行は「波乱あり」、学問は「自己の甘えを捨てよ」、恋愛は「身の程をわきまえよ」などを書いてあり、たかがおみくじと思いつつも落ち込んでしまった。

「うわっ、凶なんて初めて見たぞ」

「本当にあるんだな」

ひとり嘆息していると、翼と東條が両脇からおみくじを覗き込んで声を上げる。ふたりとも興味津々で面白がってさえいるようだ。創真は口をとがらせ、おみくじを胸に抱え込むように隠しながらじろりと睨む。

「おまえらはどうだったんだよ」

それを受けて、ふたりはそれぞれ手にしていたおみくじを掲げる。

「僕は大吉だ」

「俺は中吉」

思わずぐぬぬと歯噛みしてしまった。

それでも——やはり、ふたりにはこのおみくじどおりいいことがあってほしい。清々しいくらいに得意満面の翼や、どこか申し訳なさそうな東條を見ながら、創真はひそかにそう願った。

「そういえば親子鑑定の結果が出たんだけど、聞いたか？」

電車で地元に戻り、駅前の横断歩道を渡り終えたところで東條がそう切り出した。まるでよもやま話でもするかのような気楽な口調で。創真はどきりとして思わず顔をこわばらせてしまったが、隣の翼はすこしも動揺していない。

「ああ、きょうだいだったな」

肩をすくめて苦笑しながらそう答える。

どうやら東條菜美が主張したとおりの結果が出たらしい。東條圭吾の生物学上の父親は西園寺征也で、戸籍上の父親とは血のつながりがなかったということだ。つまり翼とは異母兄妹になる。

。

「俺、翼のことが好きだったんだけどな」

つられるように苦笑して東條はそう軽くこぼした。

しかしながら翼にとっては青天の霹靂だったに違いない。驚いたように振り向くと、そのまま彼の横顔を見つめてうっすらと眉をひそめる。

「それは恋愛感情があったということか？」

「ああ、諫早くんは前から気付いてたよな？」

「ん、まあ……」

いきなり水を向けられて、創真は若干うろたえながら曖昧に肯定した。気付いたのはあくまで東條の言動がわかりやすかったからだ。しかし翼はいまだに信じきれないような複雑な顔をしている。

「そう、か……まさか創真につづいて圭吾までとはな……」

——おい！

わざとではないだろうが、さらりと暴露されていたたまれない気持ちになる。翼への想いは以前から気付かれていたように思うので、いまさらかもしれないけれど、その想いを告げたことまでは知られていなかったのだ。

「えっ、諫早くん告白してたのか?!」

「告白というかほとんどブチ切れていただけだが」

「ブチ切れて……って、諫早くんが……？」

「ああ、それで僕もついブチ切れてしまってたな」

「は??」

聞けば聞くほど状況がつかめなくなったのだろう。東條はいくつもの疑問符を頭の上に浮かべて混乱していた。しかし翼は気にも留めず、思いを馳せるようにふっと表情をゆるめて鈍色の空

を仰ぐ。

「創真と恋愛や結婚なんて考えたこともなかったし、考えたくもなかった。でも冷静になって考えてみると、どうせ誰かと結婚しなければならないなら創真がいいんじゃないかって。まだ気持ちの整理がついていないからすぐには約束できないが、その方向でと思っている」

そう言うと、こちらに振り向いて返答を求めるように見つめてきた。

もちろん異論などあるはずもなく創真はこくりと頷く。気持ちの整理がついていないというのは綾音のことだろうが、いまずぐ想いを捨てるなんて言うつもりはないし、何ならそのままでも構わないと思っているくらいだ。

「そうか……」

暫しの沈黙のあと、東條が吐息まじりの声を落とした。

「そんなことになってるなんて思わなかったから驚いたけど、諫早くんなら翼を大切にしてくれるだろうしよかったよ……これで心置きなく転校できる」

「転校？」

翼が怪訝に聞き返すと、東條はちらりと横目を向けて曖昧な微笑を浮かべた。

「俺たちの親のあいだにあったこと、俺の母親が翼にしたことを考えたら、これまでどおりってわけにはいかないだろう。すぐには無理だけど、二年生からどこか別の高校に転校しようと思ってる」

創真は声もなく驚き、気付けばいつのまにか足が止まっていた。

隣を歩いていた翼も同じく絶句して呆然と立ちつくしていたが、やがて我にかえると、何か思案をめぐらせるようにそっと眉を寄せて東條に振り向く。

「もしかして西園寺の人間が命じたのか？」

「いや、俺がひとりで考えて決めたことだ」

「おまえの両親はどう言ってるんだ」

「これから話すけど賛成してくれると思う」

「……それは、そうかもな」

確かにそこは否定できないだろう。息子の意思を無視してまで転校させることはなくても、息子が自ら転校したいと言い出せば喜んで賛成しそうだ。そうなれば止めるのは難しくなる。

だが、いまはまだそうならない。

それゆえか翼もまだあきらめてはいないようだ。気合いを入れなおすようにひっそりと表情を引きしめ、どこか挑発的な目つきになりつつも、あくまで冷静な態度を崩すことなく追い込みをかける。

「けれど、本当にそれはおまえの本意なのか？」

「……ああ、俺自身が望んだことだ」

「僕と顔を合わせるのが苦痛だから転校したいと」

「そうじゃない！」

「だったら納得のいく理由を聞かせろ」

東條は目をそらすのが、それでも翼はじっと追及のまなざしを向けたままだ。絶対に引き下から

ないという強い意志を感じる。東條も沈黙したところで逃れられないと悟ったのか、渋々ながら口を開いた。

「俺がいたら、翼がいつまでたってもつらい事件のことを忘れられないだろう」

つまり、拉致事件の首謀者の息子であり西園寺征也の罪の証でもある東條がいたら、翼はずっと心の傷を癒やせない。だから自分が翼のまえから姿を消さねばならないと考えたようだ。

けれど、それを聞いて当の翼はあきれたように溜息をついた。

「そんなことだったとはな」

「そんなことって……」

「悪いが、僕はそんなに繊細な人間じゃないんでね。されたことを思い返すとはらわたが煮えくりかえるが、泣いたりしてはいない。だいたい、事件に関与したわけでもないおまえを見てもちいち思い出さないし、おまえがいなくなったところで家には元凶である父がいるんだが」

東條はグッと言葉を詰まらせた。それでもまだ素直に受け入れられないのか、純粹に心配なのか、迷うように惑うようにかすかに瞳が揺れている。

「だけど……やっぱり俺は……」

「もういいだろ！」

そう叫んだのは、第三者であるはずの創真だった。

自分は部外者だからと口をはさまないようにしていたのに、あまりにもどかしくて腹立たしくて堪えきれなくなり、爆発してしまったのだ。

「転校なんてやめろよ！ 翼が望んでないのに翼のためだなんてただの自己満足だ！ 翼の気持ちを考えろ！ オレだって嫌なんだよ！ せっかくちょっとは仲良くなれたような気がしてたのに、こんな形でいなくなるなんて！ 翼ならオレがついてるからおまえは心配すんな！！！」

堰を切ったように全力でぶちまけて顔を上げる。

ふたりは啞然としたまま時間が止まったように固まっていた。息もしていないのではないかと思うほどに。気まずい沈黙が流れる。やがて創真の額にじわじわと汗がにじんできたころ――。

「諫早くんがブチ切れた」

東條がぼつりとつぶやいた。

一拍の間のあと翼がはじけるように笑い、東條もつられて笑い出す。何もそんなに笑うことはないのにと、創真は気恥ずかしさを感じつつ口をとがらせた。

「転校、やめるのかやめないのかどっちだよ」

「やめるよ」

さすがにここまで清々しく翻すとは思わなかったのですこし驚くと、東條はきまり悪そうにはにかみながら「諫早くんの気持ちを無下にはできないし」と言い添える。もちろんそれが単なる口実でしかないことはわかっているけれど。

「もう二度と転校とか言うなよ」

そう言いながら、マフラーに顔を埋めるようにうつむいて足早に歩き出す。

ときおり吹く北風はとても冷たいし、ちらちらと雪も降ってきたが、それでも熱く感じるくらいに顔が火照っている。それに気付いたのかふたりは吹き出すように笑い、すぐに小走りで追い

かけてきた。

第15話 十年越しの初恋に終止符を

年明けから、創真は再び翼の後継者教育に同席することになった。

逆に東條が同席することはなくなった。西園寺家と東條家が話し合いをしたときにそう決まったらしい。双方の両親の感情を思えば致し方ないのかもしれない。きっと補佐役になることも許されないのだろう。

創真にとってそれは願ったり叶ったりの結果ではあるのだが、さすがに素直に喜ぶことはできなかった。こんなかたちで終わることを望んでいたわけではない。翼に自分を選んでほしかっただけなのだから。

「創真……その、頼みがあるんだが」

西園寺家で勉強を終えて帰り支度をしていると、翼が声をかけてきた。めずらしく遠慮がちな物言いで。振り向くと表情にもためらいのようなものが見てとれた。

「どうしたんだ？」

「……僕も、いいかげん自分の気持ちにきちんと区切りをつけて、前に進まなければならない。おまえともきちんと向き合いたい。だから、綾音ちゃんに気持ちを告げて終わらせようと思う」

驚いて創真は小さく息をのむ。

綾音のためにも自分のためにも想いは告げないと言っていたのに——だが、気持ちに区切りをつけるには確かにそれが最善なのかもしれない。きちんと終わらせようと本気で悩み考えたうえでの決断なのだろう。

「オレも応援する」

「ありがとう」

「それで頼みって？」

「ああ……」

翼はいつもの調子を取り戻し、どういう計画でどういう協力を求めているのかを理路整然と話していく。それを聞き、創真はすこし気持ちがざわつくのを感じながらも協力を約束した。

次の土曜日、創真と翼は待ち合わせのため駅前に来ていた。

雪は降っていないものの寒波が来ているせいで冷え込みが厳しく、創真はポケットに手をつこんで身を縮こまらせている。邪魔になるだろうとマフラーをしてこなかったのが首が寒い。

隣の翼もポケットに手を入れたままじっとうつむいている。こちらは寒さというより緊張のせいかもしれない。家に迎えに行ったときからいつになく口数が少なかったし、表情も硬かった。

「翼くん、創真くん、おはよう」

「おはよう」

それでも綾音が現れると、途端にうれしそうな顔になって声をはずませる。緊張など一瞬で吹き飛んでしまったかのように。

「こんな真冬の寒いときに遊園地なんてごめんね」

「ううん、久しぶりだし楽しみにしてたんだ」

綾音はふわりと白い息を上げて笑った。

スカートは膝上丈だが厚手のタイツをはいているし、そのうえ短いソックスもはいているし、あたたかそうなファーのついたコートも着ている。それなりに寒さ対策はしてきたようだ。

「あともうひとりお友達が来るんだよね？」

「ああ、遅刻はしないと思うが」

そう言いながら翼が腕時計に目を落とした、そのとき——隣で見ていた創真の背中にずしりと何かがのしかかった。そのまま後ろから長い腕がまわってきて抱き込まれる。振り向くと、頬がふれあうほどの至近距離で東條が思わせぶりに目を細めていた。

「おはよう、諫早くん」

「……ああ」

まさかそうくるとは思わなかったのでギョツとしたが、拒絶するわけにはいかない。そのまま何でもなような顔をして紹介を始める。

「これがそのもうひとりだ。二学期に編入してきた同級生の東條圭吾。こっちはオレらの幼なじみの幸村綾音ちゃん」

「今日はよろしくな」

後ろから創真を抱いたままで東條が言う。

ただの同級生にしてはいささか近すぎるその距離感に、綾音はずいぶん面食らっていたが、声をかけられると気を取り直したように笑顔になった。

「こちらこそ。創真くんと仲いいんだね」

「ああ、かわいいから構いたくなるんだよ」

「そうなんだ……」

冗談なのか本気なのかはかりかねているのだろう。うっすらと笑顔を保ちつつも、どう反応したらいいか戸惑っている様子が見てとれる。その隣では、翼がひそかに笑いをかみ殺してどうにか平静を装った。

「そろそろ行こうか」

「そうだな」

東條は元気に答え、さっそく創真の肩を抱いて駅構内に向かう。

やりすぎだ——創真はそんな気持ちをこめて横目でじとりと睨みつけるが、彼はニヤリと笑うだけである。面白がっているのだろう。だからといって綾音のまえで文句を言うわけにもいかず、なすがままになるしかなかった。

「へえ、思ったより立派な遊園地だな」

入園するなり、東條はぐるりとあたりを見まわして感嘆の声を上げる。

都内にあると聞いて、もっとせせこましいところを想像していたのだろう。しかし都心ではなく端のほうということもあって敷地は広大で、大人が楽しめる大型アトラクションも多数あるのだ。

「諫早くんは何に乗りたい？」

「オレは何でも……綾音ちゃんは？」

「やっぱりコースターかな」

彼女は後ろで手を組んでエヘへと笑う。

それは創真に向けられたものだが、翼は隣からこっそりと眺めて愛おしげに目を細めていた。そして案内のリーフレットを開いて彼女のまえに差し出すと、園内地図を指さしながら言う。

「だったらこのコースターから行こうか」

「うん」

綾音は頷き、翼に促されるまま並んで歩き出した。

その後ろを創真たちがついて歩く。やはりというか東條にしっかりと手をつながれているが、今日一日だけのことと開き直っている。見知らぬひとに好奇の目を向けられるくらいで実害はない。

ただ、綾音はどういうわけかすっかり受け入れてしまったようだ。もう戸惑うこともなく優しく微笑むだけである。電車の中でも手をつないだり肩を抱いたりしていたので、慣れたのだろうか。

コースターに着くとそのまま待機列の最後尾に並んだ。季節のせいかな寒さのせいかな客自体が少ないようで、人気があるはずのコースターにもそれほど並んでいない。待ち時間は十五分となっている。

やがて自分たちの番になり、一列二席ということもあって当然のように翼と綾音が並んで座った。ふたりで楽しそうに話をしながら安全バーを下ろしている。創真と東條はその後列に乗り込んだ。

「諫早くん、顔がこわばってるけど大丈夫か？」

「まあ……」

そう答えつつも、すでに縋るようにバーを握っている。

有名どころのコースターと比べるとたいしたことはないのかもしれないが、創真にとっては十分すぎるくらい凄そうで、この手のものが久しぶりということもあってどうしても身構えてしまう。

ガタン——。

ゆっくりと発車し、すぐにガタガタと急角度で引きずり上げられていく。そして頂上に到達したかと思うとふわっと降下し——そこからはあまり覚えていない。ただただ放り出されないようしがみつけばかりで、楽しむ余裕は微塵もなかった。

「そんなに苦手なら乗らなきゃよかったのに」

「ん……」

苦笑する東條に支えられながら創真はよろよろと歩く。それほどひどくはないものの若干気分が悪いし、必死に踏ん張っていたせいかな太腿やふくらはぎも痛い。ころなしか腕まで痛い気がする。

先に降りた翼と綾音は、フォトサービスのコーナーで笑いながら写真を見ていた。乗車中に撮

影された写真を購入できるのだ。見てみると、ふたりとも車両の先頭で思いきり楽しそうにはしゃいでいた。

その後ろに座っていた東條と創真もしっかりと写っている。東條は遠くに目を向けて晴れやかな顔をしていたが、創真はがっちりとバーを握り、わずかにうつむいてギュッと目をつむっていた。

「ははっ、この諫早くんかわいいな」

「バカにして……」

「すみませーん、これ、ひとつください」

「は?!」

ギョッとする創真を尻目に、東條は本当にフォトサービスのスタッフに代金を支払ってしまった。しばらく待たされて簡単なデザイン台紙のついた写真を受け取ると、折れ曲がらないようバッグにしまう。

「おまえ、そんなの買ってどうするんだ」

「今日の記念だって」

彼につられたのか、いつのまにか翼と綾音も購入していた。

みんなが一枚におさまっているので確かに記念にはなるだろう。ただ、自分の情けない姿がみんなの手元に残るのかと思うと、創真としては微妙な心境にならざるを得なかった。

その後、とりあえずほかのコースター系は後回しにして、二人乗りサイクル、回転系、スイング系などのアトラクションをまわった。目的を忘れたわけではないが、東條が気遣ってくれたからかけっこう普通に楽しんでしまった。

「私、観覧車に乗りたいな」

園内のカジュアルな洋食レストランで食事をしながら、次はどのアトラクションに行こうかという話になるとすぐに、綾音がそう声を上げた。しかし東條はどこか冷ややかに対抗する。

「俺はゴーカートがいい。諫早くんは？」

「え、まあオレはどっちでも構わないけど」

「じゃあ観覧車にしよう」

そうなるとは思ったが、翼が清々しいくらいの独断で勝手に決めてしまった。創真はスプーンでオムライスをすくったまま苦笑し、東條もあきれたように大きく溜息をついていたが、反対はしなかった。

「諫早くん、高いところは大丈夫なのか？」

「高いだけなら大丈夫だ」

食事を終わると、さっそくみんなで観覧車のほうへ向かった。

コースターのことがあったからか東條が心配してくれたが、観覧車はわりと平気だ。真下さえ見なければ景色を楽しむくらいの余裕はある。ここのゴンドラは足元が透けていないようなので

大丈夫だろう。

「何名様ですか？」

「二名です」

待機列に並んで自分たちの番がくると、なぜか東條が間髪を入れずそう答えて、創真の手を引いた。

「えっ？」

みんなで一緒に乗るものとはばかり思っていた創真は困惑を露わにするが、東條は気付いているのかいないのか手を引いたまま振り返ることなく進み、そのままゴンドラに乗り込んでしまった。

残された翼と綾音はきょとんとしていたが、すぐに笑い合い、スタッフに案内されて後続のゴンドラに乗った。向かい合わせに座って、外の景色を眺めながら楽しそうに会話をはずませている。

そう、か——。

東條が何のためにふたりだけでゴンドラに乗ったのか、ようやく理解した。本来は創真が率先してそうしなければならなかったのだ。自分が楽しむためではなく翼のために来ているのだから。

「諫早くん、ゴンドラばかり見てないで景色を楽しもうぜ」

「ああ……」

そう言われて素直に外の景色を眺めてみたものの気はそぞろだ。どうしても後ろのゴンドラに乗っているふたりが気になってしまう。東條はうっすらと微笑を浮かべて自分の隣をぼんと叩いた。

「こっちに来いよ」

後ろのゴンドラが視界に入らないようにという配慮だろう。

それでも気になると思うが、正面に見えている現状よりはいいのかもしれない。席を移動してみると、わざわざ振り返らなければ見えないということで、こころなしか気持ちが楽になったような気がした。

「いい景色だな。空気が澄んでるから遠くまで見える」

「ん……」

ガラス窓の向こうには、コースターのレール、木々の緑、そして遠くの高層ビル群までもが見えていた。高度が上がるにつれてだんだんとその景色は広がっていく。晴れていたらもっときれいだったに違いない。

そういえば、と東條の横顔をちらりと窺う。

その表情は穏やかに見えるが胸中はわからない。まだ翼のことをふっきれず複雑な気持ちでいるのか、翼の幸せを心から願っているのか——気にはなるが、協力を頼んでおきながら無神経な詮索はできなかった。

ただ、創真としては彼がいてくれてよかったと心から思っている。いまも、ただ黙って肩を並べているだけで、同じ景色を見ているだけで、ほんのすこし救われたような気持ちになっていた。

。「そろそろイルミネーションを見に行こうか」

その後、ゴーカートをはじめとするいくつかのアトラクションをまわったあと、翼が薄暮の空を仰いでそう切り出した。ここでは冬期だけ豪華なイルミネーションを展開しているのだ。

「そうだな。オレは飲み物を買うから先に行ってくれ」

「俺も諫早くんについてくよ」

創真がポケットに手をつっこんだままそっけなく告げると、当然のように東條も追従した。おまけに見せつけるように創真の肩に手をまわして顔を寄せる。何もここまでしなくてもと思いつつながら創真もなすがままになっていた。

「わかった……じゃあ、またあとでな」

翼が何食わぬ様子でそう応じると、綾音は疑う素振りもなくニコニコと微笑んで小さく手を振り、すぐにふたりで一緒にイルミネーションのほうへ歩き出した。

「うまくいったな」

翼たちを見送ったあと東條がぽつりとそう言い、創真はこくりと頷いた。

それきり会話はなくなり、ふたりとも無言のまま近くのカフェに足を向けた。注文窓口とテラス席しかないところだが、ささやかなイルミネーションで飾り付けられていて、雰囲気は悪くない。

「諫早くんは何飲む？」

「あったかいカフェオレ」

「俺もそうしようかな」

そう言うと、東條はカフェオレを二つ注文してお金を払ってしまった。創真があわてて財布を出そうとすると手で制される。

「俺のおごりだ」

「おごられる理由がない」

「振りまわしたお詫び」

「……………」

振りまわしたというのは手をつないだり肩を抱いたりしたことだろうか。こちらが協力を頼んだのにお詫びされるのもおかしい話だが、断るのも面倒なので、カフェオレー一杯くらいならと素直におごられることにした。

「お待たせしました」

店員から蓋付き紙カップのカフェオレをそれぞれ受け取り、テラス席に座る。

まわりは閑散としているが、これだけ冷え込んでいるうえ夜の帳まで降りれば無理もない。そろそろイルミネーションのショーが始まる時間なので、そちらに集まっているというのもあるだろう。

ふっ——。

熱々のカフェオレをひとくち飲むと無意識に白い息をついた。じんわりと中からあたたまっていくのを感じる。ずっと寒風にさらされていたせいかな、思った以上に体が冷えていたようだ。

「しかし、まさか翼の好きな子があんなだったなんてなあ」

東條はそう言い、飲んでいたカフェオレを小さなガーデンテーブルに置いた。

綾音のことは文化祭の執事喫茶でチラッと見ていたらしいが、きちんと会ったのは今日が初めてだった。その口ぶりからすると、あまり好意的な感情を持てなかったのかもしれない。

「それにしてもちょっと無神経だよな。気持ちに区切りをつけるために告白するのはいいとして、何も諫早くんに協力を頼むことはないだろう。しかも諫早くんの目の前であんなバカみたいのにデレデレしてさ」

「いや、オレと向き合うために終わらせるんだし……」

確かに協力を頼まれたときは少なからず心がざわついた。しかし、本気で創真と向き合おうとしてくれていることはうれしかったし、それに関わらせてもらえることはありがたかった。ちなみにデレデレしているのはいつものことなのでいまさらだ。

「だけど、もしこれで両思いになったらどうする？」

「別に……オレにはとやかく言う権利なんてないからな。オレと向き合うっていうのもあくまで翼の意思であって、約束じゃないし。せめてこれまでどおり幼なじみでいられたらとは思うけど」

創真は紙カップに両手を添えてうつむいたまま、淡々と語った。

東條には話せないが、綾音が翼に恋愛感情を持っていないことは聞いているし、翼が綾音とつきあうつもりがないこともわかっている。ただ、創真とどうなるかはまだ誰にもわからない。

だから、これは自戒と決意だ。たとえこれから先どんなことがあったとしても、もう二度と翼から離れたりしない。どんな形であってもそばにいる。おまえなんかいないと本人に拒絶されないかぎり——。

「諫早くん」

思い耽っているところへ、ふいに真剣な声で呼びかけられてドキリとする。

顔を上げると、東條はガーデンテーブルに肘をついて前屈みになり、まっすぐ覗き込むように創真を見つめていた。そのまま視線をそらすことなく静かに言葉を継ぐ。

「俺でよければいつでも話を聞くからな。翼にも内緒にするし」

「ん……ああ……」

心配してくれているのだろうが、あまりにも真面目な顔で言われて戸惑ってしまった。ごまかすようにカフェオレを口に運ぶ。そのときふと彼のまなざしが優しくなったことには、気付かないふりをした。

第16話 指名

あれから十日が過ぎても、創真と翼の関係は何も変わっていなかった。

終わらせたよ、と遊園地から帰るときに言っていたので、予定どおり綾音に告白してふられてきたのだろう。寂しそうでありながらどこかすっきりとした様子で、気持ちに一応の区切りがつけられたことが窺えた。

しかしながら創真との今後についてはまだ何も話をしていない。さすがにふられてすぐには難しいだろうし、翼が自ら話したくなるまでゆっくり待とうと思っている。もう焦る理由はないのだから。

「そうだ、おまえあした夜九時にうちに来られるか？」

穏やかに晴れわたっているのに空気が肌を刺すように冷たい朝。いつものように翼と登校していると、校門が見えてきたあたりでふとそんなことを尋ねられた。

「まあ、大丈夫だと思うけど……」

やけに遅い時間だが、西園寺の家であれば親が反対することはないはずだ。先方から呼ばれたのならなおのこと。ただ、どういう用件なのか見当もつかなくて小首を傾げる。

「そんな時間に何するんだ？」

「祖父から話があるらしくてな」

「オレに？」

「僕と両親も呼ばれている」

「ああ……」

面子からして拉致事件に関係する話ではないかと察しがついた。わざわざ創真を呼ぶということは創真が怪我をした件だろうか。ただ、もう謝罪は受けたし終わった話だと思っていたのだが――。

「おはよう、諫早くん！」

「うわっ」

後ろから東條が挨拶しながらガバリと肩を組んできた。創真はすこしつんのめり、思わず口をとがらせてじとりと横目で睨んだものの、彼はおかまいなしに肩を抱いたまま覗き込んでくる。

「深刻そうな顔してたけど何かあったのか？」

「……別に」

隠すようなことではないが、話していいのかわからなかったし、東條に拉致事件を思い出させてしまうのも憚られた。しかし、彼はどう思ったのか創真の向こうに白い目を向ける。

「ま、どうせまた翼のことなんだろうけど」

「このところずいぶん僕に当たりが強いな」

「諫早くんの味方だからな」

苦笑する翼に、東條は悪びれることなく当然のように答えた。

遊園地で綾音にデレデレしていたことにまだ腹を立てているのだろう。あれ以来、ことあるご

とに創真にくっついて味方アピールをするようになった。翼には意図が伝わっていない気がするけれど。

「行こうぜ」

東條はがっちり創真の肩を抱いたまま歩き出し、そのまま横から頭をくっつけてきたかと思うと、そっと耳打ちするように言う。

「いつでも話くらい聞くからな」

それは遊園地でも言ってくれたことだ。創真の表情はわずかにゆるむ。

そのとき——いつのまにか創真たちに追いついて並んで歩いていた翼が、こちらを横目で見ながらどこか苛ついたような表情を浮かべていたことには、まったく気付いていなかった。

翌日、指定された時間に西園寺の家を訪れた。

案内された部屋に入ると、翼とその両親、それに姉の桔梗がすでに席に着いていた。桔梗が来るとは聞いていなかったのが驚いたが、にっこりと優雅に微笑みかけられて我にかえり、あわてて会釈する。

「創真、こっちだ」

翼にひどく不機嫌そうな声で呼ばれて、隣に座った。

それきり広い部屋はしんと静まりかえった。口を開かず、音を立てず、みんなただ姿勢を正して座っているだけである。創真は迷ったが、やはり気になるので翼に顔を近づけてそっと話しかける。

「桔梗さんも来てるんだな」

「祖父に呼ばれていたらしい」

「あの事件の話じゃないのか？」

「何の話かは聞いてないよ」

「そうか……」

どうやら創真がひとり勝手に思い込んでいただけのようだ。しかし、わざわざ部外者の自分を呼びつけるような話など他に見当もつかない。小首を傾げながら思案をめぐらせていると——。

「皆、来ておるな」

ゆっくりと扉が開いて、皆をここに呼び集めた当人である西園寺徹が現れた。当主にふさわしい風格を見せつけるように堂々と中央を進み、彼のために空けられていたいちばん奥の席につく。

。

「創真くん、遅い時間にすまないね」

「あ、いえ……」

どう応じればいいのかわからず漠然とした返事をしてしまったが、彼は気にしていないようだ。マホガニーの上でゆったりと両手を組み合わせて小さく息をつき、真剣なまなざしを皆に向ける。

。

「まず最初に、ここでなされた話はすべて他言無用に願いたい。良いな？」

「承知しました」

翼の父親の征也が静かにそう答えて、他の皆も頷いた。

その硬い雰囲気にはやがうえにも緊張が高まり、創真はごくりと唾を飲む。そのまま徹を見つめて次の言葉を待っていると、長くはない沈黙のあと、彼はあらためて前を向いて厳かに口を開いた。

「私は、西園寺家当主と西園寺グループ会長を辞することに決めた。時期は来年度。後任はどちらも予定どおり征也になるだろう」

それを受けて征也が頭を下げる。

ちらりと隣に目をやると、翼は眉をひそめて納得のいかないような顔をしていた。征也が過去にしたことを思うと無理もない。それでも反対の声を上げたりはしなかった。

「そして次の後継者だが……」

途端に翼はハッと我にかえたように表情を引き締め、背筋を伸ばす。

次期後継者は新当主就任時に指名を行うのが慣例らしい。生まれたときから後継者として育てられてきた翼も、指名を受けてようやく正式な後継者として認められる。その内示がこれから出るのだろうと思ったが――。

「桔梗を指名するつもりだ」

「……えっ」

幽かな声を落として翼は凍りついた。

創真も驚いて頭の中がまっしろになったが、桔梗はたおやかに頭を下げ、征也は心苦しそうな面持ちで目を伏せていた。この反応からすると二人とも知っていたのだろう。けれど母親の瞳子は初耳らしく、顔面蒼白になりながら大きく目を見開いている。

「き、桔梗って……どう、し、て……」

わなわなと唇を震わせながらそう声を絞り出したかと思うと、縋るように徹のほうへと身を乗り出す。

「どうして翼ではないのです?！」

「瞳子、落ち着きなさい」

「桔梗は女ではないですか!!」

征也の制止などまったく耳に入っていないかのように、悲痛な声で喚き散らした。けれど徹はすこしも動じることなく丁重に答えていく。

「男子でなければならぬというのも時代錯誤だろう。ここで変えていくのがいいと判断した。時代遅れの慣習にしがみついているのは生き残れない」

「いまさら、そんな……」

「すまなかった。瞳子さんが女兒を産むたび周囲に落胆され、次を望まれ、ひどく追いつめられていたのはわかっていた。だからこそ変えたかったのだ」

「う……っ……」

瞳子は泣きそうに顔を歪ませてうつむくと、その顔を両手で覆い、細い肩を震わせながらしゃくり上げ始める。その姿は大人とは思えないくらい頼りなくて、弱々しくて、いまにも壊れてしまいそうだった。

征也は静かに立ち上がって内線電話で使用人を呼び、彼女を休ませるよう命じた。

「私ではなく、桔梗姉さんを選んだ理由を聞かせてください」

瞳子が使用人に支えられながら退出し、話を再開する場が整ったところで、翼がそう切り出した。まだ顔色は優れないものの落ち着いてはいるようだ。まっすぐ徹を見据えたまま理性的に畳みかけていく。

「私も女です。慣習を変えたいだけなら私でもよかったです。だからそれ以外の理由があるのでしょうか。私でなく桔梗姉さんでなければならなかった理由が。せめてそれを聞かせてください」

「能力、資質、適性などを総合的に判断して桔梗を選んだ」

返ってきた答えはそれだけだった。

「そう、ですか……」

あからさまに納得のいかない表情を浮かべながらも、翼は口をつぐんだ。そのままうつむいて膝の上でグッとこぶしを握り込んでいく。あらゆる感情をそこに押し込めようとするかのよう——。

翼は生まれたときから西園寺の後継者となることを定められていた。性別を偽ることを強要され、後継者にふさわしい人間であれと言い聞かせられて。それゆえ翼自身もそうあろうと努力してきた。

それなのに、いまになってこんなにもあっさり切り捨てるだなんて。それも普通に女として生きることを許されてきた桔梗を選ぶだなんて。翼の気持ちを思うと胸が押しつぶされそうになる。

ただ、徹はおそらく何もかも承知のうえであえて桔梗を選んだのだ。その意味するところを悟ったからこそ翼も口をつぐんだのだろう。だとすれば部外者の創真に言えることなどはない。

そういえば、オレはなんでここに呼ばれたんだ——？

翼を支えるつもりで後継者教育にも同席してきたのだから、まったくの無関係とはいえないが、西園寺家からすると家族でも親族でもない部外者である。なのにこんな内々の場にどうしてわざわざ。

「さて……」

徹が静寂を打ち破り、その声で創真は思考の海から引き戻される。

「いささか気の早い話だが、そうなる桔梗には婿を取ってもらわねばならない。後継者はあくまで桔梗だということをわきまえて、控えめながらも公私にわたって誠実に支えてくれる、身辺に問題のない人間を」

本当に気が早いなど他人事ながら微妙な気持ちになったが、桔梗本人は美しい居住まいを崩していない。うっすらと微笑さえ浮かべている。どうしてそんなに余裕でいられるのか不思議に思っていると。

「私は、創真くんを桔梗の婿にしたいと考えている」

「え……オレ?!?!」

混乱したまま自分を指さして聞き返す。何かの間違いではないかと思ったが、徹は真面目な顔で頷いた。

「ご両親には許しを得ている。君は後継者の補佐となるために勉強を続けてきた。この西園寺の家で。つまり西園寺家は君に投資してきたということだ」

「ちょっと待ってください！」

彼の言わんとすることを明確に理解して、あわてて声を上げた。

「そんなの後出しじゃないですか。オレは翼を支えるために勉強してきたんです。翼しか支える気はありません。投資とか言うなら、そもそも翼を後継者にしないとおかしいですよ?！」

「創真、もういい……」

振り向くと、翼がうつむいたまま力のない自嘲を浮かべていた。創真は息もできないくらいにギュッと胸を締めつけられ、固まってしまう。それを見計らったかのように徹が声をかけてきた。

「創真くん、もちろん君の意思は尊重するつもりだ。ただ、ここで感情的に断ってしまうのではなく、落ち着いて一度じっくりと考えてみてほしい。まだずいぶん先のことなのだからな」

「……………」

頑なに拒むとかえって面倒なことになる気がして、ひとまず曖昧に頷いた。けれど気持ちが変わることは絶対はない。納得してもらうには、しばらく考えたふりをしてから断るしかないだろう。

「話は以上だ」

皆はすぐに退出するが、翼だけは深々とうつむいたまま動こうとしなかった。その暗然とした様子に創真は声をかけることも躊躇してしまう。それでもせめて隣にいようと思っていると――

「悪いが、今日はもう帰ってくれないか。ひとりで気持ちを整理したい」

「……わかった」

すこし迷ったが、ひとりになりたい気持ちもわからないではないし、その願いを無視してまで居座ることなど自分にはできない。またあしたな、とあえて普段どおり軽く挨拶をして部屋をあとにする。

翼はずっと下を向いたまま一瞥もくれなかった。

「創真くん」

ひとり玄関に向かう途中、ふいに背後から名前呼びかけられてビクリとする。おずおずと振り返ると、桔梗がどこか寂しそうに微笑みながら肩をすくめた。

「怯えなくても取って食いはしないわ」

「あ、いえ……すみません……」

「私、あまり良く思われていないのね」

「そういうわけじゃないですけど」

あわてて否定したが、桔梗の媚にと言われてあれほど感情的に反抗したのだから、いずれにしても彼女からするとあまり気分はよくないだろう。いまさらながら気付いて気まずさに目を伏せる。

「でも、桔梗さんこそオレなんかとじゃ……」

「私は創真くんではよかったと思っているわ」

「えっ？」

思わず顔を上げると、桔梗はくすりと小さく笑って言葉を継ぐ。

「創真くんのご事は前々から買っていたもの」

「……だからって好きでもないのに結婚なんて」

「好きよ、創真くんのご事」

「……………」

わけがわからなかった。いきなりそんなことを言われて素直に信じるほどおめでたくはない。好きだなんて出任せだろう。それなのにいったいどうしてこんな結婚を望んで受け入れようとするのか――。

「いい返事を待ってるわ」

桔梗は一分の隙もないきれいな笑みを浮かべて一礼すると、身を翻し、艶やかな黒髪をなびかせながら颯爽と歩き去っていく。その後ろ姿を、創真はもやもやした気持ちのままただ黙って見送った。

第17話 バレンタインデー

「僕を待たせるとはいい度胸だな」

翌朝、翼は西園寺邸の玄関でいたずらっぽくそう言って創真を出迎えた。まるで昨晚のことなどすっかり忘れてしまったかのように。創真は困惑するが、だからといってわざわざ蒸し返すようなことを言うのも躊躇われる。

「……悪かった」

「次はペナルティだぞ」

「気をつける」

翼はふっと笑い、いつもと変わらない颯爽とした足取りで玄関をあとにする。

創真はその後ろ姿をぼんやりと目で追うが、ほどなくして我にかえり、あわてて小走りで追いかけて隣に並んだ。

昨晚はいろいろぐるぐると考えをめぐらせてしまい、ほとんど眠れなかった。

帰宅して母親に尋ねたところ、桔梗との結婚については実際に西園寺から話があり、許可を求められたが、どうするかは本人に任せると答えたそうだ。それで創真が呼ばれることになったのだろう。

昔から両親は放任主義で、創真にも兄にも好きなように生きればいいと言っている。父親の会社を継がせるつもりも特にないようだ。創真がずっと翼を支えると言っても肯定も否定もしなかった。

今回の件についてもどうこうと意見することはなかった。いまずぐ返事しないといけないわけではないんだし、頭を冷やしてゆっくりしっかり考えてみたら、と他人事のように言うだけである。

もっとも自分の気持ちは考えるまでもなく決まっている。ただ、いつどのように断れば上手くいくのか、翼とどう向き合えばいいのかなど、これからのことを考えると悩みは尽きなかった。

「翼くん、これもらってくれる？」

「いただくよ、ありがとう」

通学途中、何度も同じクラスになっている女子から小さな手提げ袋を差し出され、翼はよそいきの笑顔で受け取った。それがどういう類いのものかは聞くまでもなくわかっているのだろう。

今日は二月十四日、つまりバレンタインデーなのだ。

毎年、翼は義理から本命まで数多くのチョコレートをもたらしている。かなり面倒だと思うが、そんなことはおくびにも出さずにいつも笑顔で応対していた。女子が求める理想の王子様そのままに。

当然ながら今日も完璧なまでに理想の王子様を演じていた。しかし女子から離れるとふと目がうつろになる瞬間がある。よく見ていなければわからないくらいの変化だが、東條も気がついたようだ。

「なあ、諫早くんも翼もどうかしたのか？ 元気ないみたいだけど」

「ああ……」

昼休み、翼が女子に呼ばれたので東條とふたりで学食に向かっていたところ、彼から気遣わしげにそんなことを尋ねられた。自覚はなかったが、どうやら創真も元気がないように見えているらしい。

「もしかしてケンカしたとか？」

「そういうわけじゃない」

「翼には内緒にするから話せよ」

「西園寺の家に口止めされてる」

「ああ……そういうことか」

東條は急にトーンダウンした。彼もまた西園寺家に口止めされている身なので、詳細はわからずとも事情は理解できるのだろう。ただ、ますます心配そうな顔になり創真を覗き込んでくる。

「大丈夫なのか？」

「……多分」

何をもって大丈夫とするかはわからないが、翼はきっと元気を取り戻すだろうし、創真との関係も悪いようにはならない。根拠はないものの創真はそう信じていた。

「これやるから元気出せよ」

「えっ？」

ふいに軽そうな茶色の小箱がふわりと投げてよこされて、あたふたと両手でキャッチする。わけがわからないまま目を落とすと、そこには有名チョコレートブランドのロゴが刻印されていた。

まさか、これって——。

「あ、違う違う、俺がもらったものじゃなくて家から持ってきたんだよ。諫早くんにあげようと思ってさ。日本だと友達にもチョコをあげたりするって聞いたし」

「……男どうしではあんまりやらないけどな」

「そうなのか？」

安価なチョコ菓子ならともかく、男が男友達にブランドチョコレートを渡すなんて一般的とは言いがたい。幼少のころに日本を離れたので日本独自の風習には疎いのだろう。

「ま、せっかくだからもらってくれ」

「お返しが面倒なんだよなあ」

「ははっ、そんなの期待してないって」

「それなら……」

ありがとな、と礼を言ってから上着のポケットにしまう。チョコレートは好きなのでもらえるのは素直にうれしいが、もらいっぱなしというのも気が咎めるので、やはり何かお返しはしようと思う。

学食に入ると、カフェテリアでごはんとおかずを買ってから窓際の席をとった。スマートフォンを確認するが翼からの連絡はまだ来ていない。ひとまずふたりだけで向かい合わせに座って食

べ始める。

「そういえば翼からはチョコもらったのか？」

東條が箸を持ったままふと思い出したように尋ねてきた。結婚を前向きに考えるなどと話していたので真面目に気になったのだろうが、創真は思わず苦笑してしまう。

「あいつは自分がもらう認識しかないと思う」

「ああ……それなら催促すればよかったのに」

「別にこだわってないし」

それは強がりでも何でも無い。

普通の女子みたいなことを翼に求めているわけではない。もちろんもらえたら素直にうれしいが、もらえなくても落胆はしない。それに——翼はいまバレンタインどころではないはずだから。

「悪い、待たせたな」

放課後、他クラスの女子に呼ばれて廊下に出ていた翼が、そう言いながら創真たちのいる教室に戻ってきた。両手に余るくらいたくさんプレゼントを持って。

「まずはいぶんたくさんもらってきたなあ」

「僕のために用意してくれたのに断れないだろう？」

「まあ、そうだよな……」

東條は自分のスクールバッグを一瞥してうんざりしたように同調する。彼もときどき女子に呼び出されてはチョコレートを渡されていて、ファスナーの開いたスクールバッグからあふれかけていた。

しかしながら翼はその比ではない。大きな紙袋ふたつがすでにほぼ満杯で、いましがたもらったものも詰め込むとあふれんばかりになった。その紙袋のひとつを創真に押しつけるように差し出してくる。

「これひとつ家まで持ってくれないか」

「ん、ああ……」

そんなことを頼まれたのは初めてだったのですこし戸惑ったが、中学のときよりも増えているし、全部ひとりで持つのは確かに大変だろうとすぐに納得した。ただ、複雑な気持ちではあるけれど——。

校門前で東條と別れ、翼といつものように話をしながら帰路についた。

ただ、話題となるのは学校のことや東條のことばかりで、家に関係することはそれとなく避けているように感じられた。もっとも、こんな往来できのうのことを話すわけにはいかないのだが。

「悪いが、僕の部屋まで運んでくれないか」

「……わかった」

創真は頷き、翼につづいて西園寺邸に上がる。

もしかしたら部屋に上げるための口実としてプレゼントを持たせたのかもしれない。何となくではあるがそう感じた。だが創真としても翼に話しておきたいことがあったのでちょうどいい。

「あら、創真くん」

階段を上がると、ちょうど降りようとしていたらしい桔梗と鉢合わせた。帰宅したばかりなのか制服のままだ。翼が不快そうに眉をひそめるのを横目で気にしつつ、創真は軽く会釈する。

「おじゃましています」

「荷物持ちをさせられているのね」

「あ、いや……」

「ちょうどよかったわ」

そう言うと、桔梗は紙袋からダークブラウンの小箱を取り出して、にっこりと華やかな笑みを浮かべながら差し出す。

「これ、もしよかったらもらってくれないかしら。これから家に届けに行こうと思っていたの。創真くんチョコレート好きだったわよね？」

「えっと……」

目が泳ぎ、返事に詰まる。

桔梗がどうして創真にチョコレートを用意したかを考えると、無邪気に受け取るわけにはいかない。翼のまえではなおのこと——その葛藤を察してか桔梗はくすりと笑って言い添える。

「これを受け取ったからといって結婚を了承したことにはならないし、迫るつもりもないわ。私の気持ちとして創真くんにあげたいというだけよ」

「……………」

それでも受け取ることができずにいると、隣の翼が溜息をついた。

「受け取ればいいだろう」

まだ迷っていたのに、その言葉に推されてつい手を伸ばして受け取ってしまった。瞬間的に後悔する気持ちが湧き上がるが、いまさらやっぱり間違いだったなんて言えるはずがない。ほっと息をつく桔梗を見たらなおのこと。

「ありがとう」

「いえ……」

あっ——彼女と言葉を交わしているあいだに、いつのまにか翼は何も言わずにひとりで歩き出していた。創真はあわてて彼女にぺこりと頭を下げると、遠ざかる寂しげな背中を全力で追いかけた。

「すまなかったな」

翼は部屋に入るなり創真に持たせていた紙袋を引き取り、ふたつまとめて学習机に立てかけるように置くと、スクールバッグもそこに下ろして振り返った。その真剣なまなざしに創真がドキリとしていると——。

「創真、おまえは桔梗姉さんと結婚すべきだと思う」

「は……？」

いきなり思いもしないことを言われて頭の中がまっしろになった。鼓動がだんだんと速くなっていくのを感じながら、縋るようにスクールバッグのショルダーベルトをグッと握りしめる。

「あっ……さっきチョコもらったからか？ 返してくる！」

あわてて踵を返して部屋を飛び出そうとしたが、腕をつかんで止められた。そのはずみでスクールバッグが床に落ちる。振り向くと、翼はうっすらと物寂しげな笑みを浮かべていた。

「桔梗姉さんは個人的には気に入らないが悪いひとじゃない。創真のことも前々から気に入っていたから、きっと良くしてくれるだろう。何より正しく女性だ。桔梗姉さんと結婚すればこれまでの勉強も無駄にせずにすむしな」

「そんなの関係ない！」

黙って聞いていられなくて食いぎみに声を上げた。さらに前のめりになり畳みかけるように訴える。

「翼以外となんて考えられないんだ！」

「……聞いてくれ」

翼は静かにそう言い、創真の体から力が抜けたのを見計らって語り始める。

「きのう、あのあと父からいろいろと聞かされたんだが……母は、跡継ぎとなる男子を産まなければと追いつめられていたが、僕を産んだときのトラブルで子供を望めない体になったそう。そのせいで心を病んでしまって、僕のことを男だと思い込むようになったらしい」

「病んで……？」

「本来、本家に男子がいなければ分家の男子を養子にして跡を継がせていたそう。女子しかいないからといって男のふりをさせたなんて前例はない。あくまで母が勝手にしたことで、家族はみんな見て見ぬふりをしてきた……要するに母の精神安定のために僕は人身御供にされたんだ」

そのひどく残酷な話に創真は啞然とした。

翼はふっと自嘲の笑みを浮かべる。

「滑稽だよな。母に言われるまま西園寺を継ぐためだけに生きてきたのに、すべて嘘だった。あげく女のまま生きてきた桔梗姉さんに惨めに負けてしまった。未来を失って、空っぽになって、これから先どうやって生きていけばいいかもわからない。おまえも愛想を尽かすだろう」

「は、なんだよそれ」

反射的に声が漏れ、それからふつつつと怒りが湧き上がってくる。

「そんなくらいで嫌いになるわけないだろ、決めつけるな！」

十年も片思いをしてきたのだから簡単に心変わりはいらない。すぐに裏切るような薄情な人間だと思われていたことにも、ずっとそばで支えるという誓いを信じてくれなかったことにも、ひどく腹が立った。

「なあ、なんで何もかも終わったみたいな顔してんだよ。未来をなくしたんじゃないで自由になっただけだろう。自分の意思で何だってできるし何にだってなれる。オレらの年齢なら、まだ将来のことを決めてなくても全然おかしくない。これからゆっくり考えて悩んで決めていけばいいんだ」

真摯に語りかけると、翼はわずかに目を伏せて考え込んだ。

「そうだな……言われてみればそうかもしれない。自暴自棄になるより、そうやって前を向いて生きていくべきなんだろう。だからといってすぐに気持ちを切り替えるのは難しいし、どうすればいいかもまだわからないが……すこしずつでも前を向いていけるように努力はしようと思う」

ひとまず冷静にはなったようだ。いまはまだ立ち上がる気力まではないのかもしれないが、翼ならきっとまた未来を見据えて歩き出せるようになるだろう。もちろん創真も一緒に――。

「ただ、創真が僕を支えるというあの約束は破棄しよう」

「は？」

反射的に眉をひそめて聞き返してしまったが、それでも翼は動じない。

「あれは僕が西園寺を継ぐという前提で交わした約束だ。前提が崩れた以上、このまま継続するわけにはいかない。桔梗姉さんと結婚すべきというのは言いすぎだったが、僕に縛られることなく、これからはおまえも自由に自分の人生を歩んでほしい」

いつもどおり理路整然とした発言だった。

じっと見つめると、翼は目をそらさずまっすぐに見つめ返してきた。しばらくそのまま黙って視線を合わせていたが。

「わかった」

そう返事をして、挑むような強いまなざしでグッとこぶしを握る。

「オレはこれからも翼のそばにいたいし、翼を支えたい。だから自由にしろっていうならそうさせてもらう」

それが創真の望む人生だ。

約束なんかあってもなくても関係ない。西園寺を継げなくても関係ない。翼と一緒にいたい、最初からただそれだけなのだ。創真のことを嫌がっているわけでないのなら、離れる理由はない。

だが、翼はその熱情に怯んだように瞳を揺らしてわずかにうつむいた。めずらしく当惑していることが表情からも窺える。しばらくそのままじっと思い悩むような様子を見せていたが、やがて――。

「二つ、頼みがある」

静かながらも芯のある声でそう切り出した。

「一つは、桔梗姉さんとの結婚についてはいまず結論を出さず、もうしばらくあらゆる角度から真剣に考えてみてほしい。もう一つは、気持ちが変わったら隠さず正直に言ってほしい」

「……わかった」

創真のためを思って、後悔させないようにそういう条件を出してきたのだろう。これからも気持ちが変わらない自信はあるが、それで翼が安心するのならと素直に聞き入れることにした。

そうだ――。

ふと思い出し、足元のスクールバッグを探ってチョコレートの小箱を取り出した。東條にももらったものでも桔梗にももらったものでもない。それを翼の胸元にまっすぐ突きつけるように差し出す。

「えっ？」

「もらってくれ」

「これは……」

「本命だからな」

この日のために一週間も前から用意していた。

ただ、きのうあんなことがあったので渡すのをためらっていたが、いまあらためて自分の気持ちを伝えておきたいと思いなおしたのだ。

「いただくよ」

最初こそ翼はすこし戸惑ったような表情を見せていたが、すぐにふっとやわらかく目を細めてチョコレートを受け取り、軽く掲げる。女子に向ける完璧な王子様とは違った自然な顔で――

。

それを見てようやく創真は大きく安堵の息をつき、つられるように微笑んだ。

第18話 ホワイトデー

三月十四日、放課後の教室はいつもよりこころなしか賑やかだった。

しかしそれも落ち着き、残っている生徒たちがだいぶ少なくなってきたころ、他クラスまで出かけていた東條が畳んだ紙袋を片手に戻ってきた。そのいかにも疲れたと言わんばかりの表情を見て、翼は軽く笑う。

「お疲れ」

「ああ」

ホワイトデーということで律儀にも全員にお返しを用意したらしく、今日一日、東條は休み時間になるたびに方々へ渡しに行っていたのだ。放課後までかかってようやく完遂したらしい。

ちなみに翼は昔からお返しはしないと公言している。それでもいいというひとからしか受け取らない。東條は今朝になって初めてその話を聞いたらしく、ずるい、俺もそうだったとうなだれていた。

同情的なまなざしを向けていると、彼は大きく息をついて自分の席にどっかりと腰を下ろした。すぐにスクールバッグをつかんで帰り支度を始めるが、ふと何かに気付いたように隣に振り向く。

「もしかして俺を待っててくれたのか？」

「ああ、創真がおまえに用があるって言うからさ」

「諫早くんが？」

驚いた目を向けられ、創真は思わずそっと視線をそらした。

こんなはずじゃ——本当は、翼がいると気まずいので先に帰ってもらうつもりでいたのに、気付けば一緒に待つことになっていた。どんな用事かと聞かれて言葉を濁したことで怪しまれたようだ。

こうなってはもう下手に隠し立てをしないほうがいだろう。腹を括るしかない。何となく気恥ずかしくて何となく後ろめたいというだけで、いけないことをするわけではないのだから。

「これ、お返し」

スクールバッグから白い小箱を取り出すと、東條に投げる。

緩やかに放物線を描いたそれを、彼はすこしあわてながらもしっかりと両手でキャッチした。そして箱に箔押しされたブランド名から何であるか察したようだ。

「え、もしかしてバレンタインの？」

「やっぱりもらいっぱなしは悪い気がして」

「うわ、めちゃくちゃうれしい」

そう言って、本当にうれしそうに破顔した。

彼に渡したのはチョコレートである。チョコレートのお返しにチョコレートというのも芸がない気はするが、何もないよりはいいだろう。バレンタインにもらったものと同程度の品を選んだつもりだ。

「ちょっと待て」

ふいに困惑したような焦ったような声が割り込んできた。振り向くと、翼がうっすらと訝しげに眉をひそめて東條を睨んでいた。

「僕は何も聞いてなかったんだが」

「おまえに報告する義務はないだろう」

「創真にチョコをあげたのか？」

「ああ、諫早くんにだけな」

「……創真のことが好きなのか？」

「だとしたら？」

東條は挑発するように口元を上げる。いつものように応酬を楽しんでいただけなのだろうが、なぜか翼は真に受けてしまったようだ。とても静観などしてられず創真はあわてて口をはさむ。

「おい、変な悪ふざけはよせ」

「嘘は言っていないけどな」

いたずらっぽい笑みを浮かべつつ東條はそう言い返してきた。完全にこの状況を面白がっている。創真は小さく溜息をついて咎めるように彼を睥睨したあと、翼に視線を移して釈明する。

「友達としてってことだからな。ただの友チョコだし」

「友チョコ……ああ……」

その言葉はさすがに翼も知っていたようだ。ただ、女子どうしでやっているイメージが強いので、創真と東條には結びつかなかったのかもしれない。まだどこか疑わしげな顔をしている。

「翼はたくさんもらうだろうし、俺からのなんていらんじゃないかと思って、諫早くんにだけ用意したんだよ。男どうしであんまりやらないって知らなかったし」

「そういうことか……」

東條のフォローを聞いてようやく納得することができたようだ。いまだに微妙な面持ちはしているけれど——それでもひとまずおかしい誤解は解けてよかったと、創真は安堵の息をついた。

「じゃあ、またあしたな」

いつものように校門前で東條と別れて、翼と帰路につく。

ふたりとも無言だった。いつも話を振ってくる翼も今日はなぜかおとなしい。しかし住宅街に入ってまわりに誰もいなくなると、唐突に口を開いた。

「お返し、桔梗姉さんにも用意してるんだらう？」

「えっ……ああ、一応……帰りに寄っていこうかと思ってる」

「そうか」

お返しをすることで変に期待させてしまう心配もあるが、もらえばなしにもできないので、東條に渡したチョコレートと同じ種類のものを用意した。それでもわざわざ家にまで行くのは気が重い。

「本当は学校でこっそり渡せたらよかったんだけど」

「いや、もしまわりに知られたら大騒動になりかねないぞ」

「だよなあ」

桔梗は昔から誰にもバレンタインのチョコレートを渡していない。本命はおろか義理チョコも友チョコも。それなのに創真がもらっていたなんて知られたらどうなるか、考えるだけでも恐ろしい。

「まあ、姉さんは外堀を埋められて喜ぶだろうけどな」

翼はそう毒を吐くが、何となく想像がついてしまって創真も否定できなかった。

ただ、どうして自分なのかはいまだにさっぱりわからない。気に入ってるだの買っているだの言われても、とてもじゃないが鵜呑みにすることなんかできなかった。

「こちらでお待ちくださいませ」

創真は軽く会釈して、案内された応接間のソファに腰を下ろした。

本当は玄関先で渡すだけにしかかったのだが、桔梗を呼んでほしいと使用人に伝えたところ、問答無用で応接間まで案内されてしまった。そうするよう桔梗に言いつかっていたのだろう。

「いらっしゃい、創真くん」

ほどなくして桔梗が入ってきた。

すでに私服に着替えている。クラシカルなロングのフレアワンピースというお嬢様らしい格好だ。軽やかながら品のある所作で創真の正面に腰を下ろすと、どこか申し訳なさそうな笑みを浮かべる。

「うちに上がるのは久しぶりかしら」

「そうですね……」

「その機会がなくなったものね」

桔梗が西園寺を継ぐと決まり、翼は後継者になるために受けていた教育をやめてしまった。父親には続けても構わないと言われたものの断ったという。それゆえ同席という立場の創真も必然的にやめざるを得なかったのだ。

もっともそのことについては特に何とも思っていない。新たに翼を支えるために必要なことを模索するだけだ。これからもずっと翼に寄り添っていくつもりでいるし、一緒に人生を歩めたらと思っている。だから――。

「これ、バレンタインのお返しです」

雑談を切り上げるように早口でそう言いながら、すぐに取り出せるように準備していた小箱をローテーブルの上に置いて、立ち上がる。

「待って！」

凜とした声で呼び止められると、まるで魔法にでもかかったように足が動かなくなってしまった。そんな創真をまじろぎもせずまっすぐに見つめたまま、桔梗はすっとソファから腰を上げる。

「西園寺の事情にここまで巻き込んでしまって、創真くんには本当に申し訳ないと思っているわ。でもこのままではあきらめがつかないの。だから……お願い、一日だけあなたの時間を私にちょうだい」

その言葉に、その声に、いつも堂々としている彼女らしからぬ切実さがにじんでいた。漆黒の瞳もこころなしか潤んで揺らいでいるように見える。無視して背を向けることなどできなかった。

「……どういことですか」

「私と過ごして、私を知ってほしいの」

「オレの気持ちは変わらないと思います」

「それならそれであきらめがつくわ」

彼女の言い分もわからないではなかった。幼いころから面識があるとはいえ一緒に過ごした時間はそう多くない。なのに自分のことを知ろうともせず拒絶されたら納得できないだろうし、あきらめもつかないだろう。

まあ、桔梗さんのほうが幻滅するかもしれないし——。

そもそも彼女だって創真のことはたいして知らないはずである。気に入っているだなんて勝手な幻想を抱いているとしか思えない。一日一緒に過ごしてみたら現実が見えてくるのではないだろうか。

「わかりました」

挑むようなまなざしで見つめ返してそう答えると、桔梗は小さく息をついた。その顔にはにかむような笑みが浮かぶ。それを見て、創真の胸にほんのすこし罪悪感のようなものがよぎった。

「お疲れ」

応接間を出ると、壁にもたれながら口元を上げて腕を組んでいる翼がいた。コートは脱いでいるが制服のままである。その落ち着いた様子からもいま来たばかりには見えない。

「どうしたんだ？」

「桔梗姉さんに襲われていないか心配してた」

「そんなことあるわけないだろう」

「だが揉めているような声が聞こえてたぞ」

「ああ……」

話の内容までは聞き取れなかったのだろう。すこし迷ったが、隠しきれるものでもないので正直に話すことにした。

「今度、桔梗さんと一日だけ一緒に出かけることになった。自分のことを知ってほしいって頼まれて、それで納得してくれるならと思って」

「そう、か……」

目を伏せる翼を見て、創真は自分が落胆したことを自覚する。

行くな——そう言ってくれることを無意識のうちに期待していたのだ。ありえないということくらいわかっているはずなのに。そもそも桔梗との結婚を真剣に考えるよう促したのは翼なのだから。

そこはかたない寂しさを感じながらも顔に出さないようにしていると、ふいに翼が腕組みを解き、その下に隠し持っていた白い箱のようなものを軽く放り投げてきた。創真はあわてて両手

で受ける。

えっ、まさか——。

白い箱には控えめな水色のリボンがかかっていた。今日という日から考えて思い当たることはひとつしかないが、とても信じられず、当惑したまま答えを求めるように翼に目を向ける。

「中身はマカロンだ。ただのお返しでそれ以上の意味はないからな」

「でも、お返しはしないんじゃない……」

「そこらへんの女子と同じ扱いをしたら怒るだろう？」

翼はいたずらっぽく肩をすくめて言う。

それはかつて自分がぶつけた言葉を引き合いに出しての揶揄だ——創真はぶわりと顔が熱くなる。いたたまれない気持ちになる一方で、自分の言葉をきちんと受け止めてくれていたことをうれしくも感じていた。

「ありがとう……」

「ああ」

うっすらと笑みを浮かべる翼を目にして、創真の表情もゆるむ。

そのとき——扉ひとつ隔てたすぐそこに桔梗が立っていたことにも、彼女がふたりの会話を黙って聞いていたことにも、創真は気付いていなかった。

第19話 今日一日だけは私を

「お待たせしてごめんなさい」

玄関で待っていると、桔梗があわてたように階段を駆け降りてきて謝罪した。

だが、待ったといってもほんの数分程度のことだし、そもそも創真がすこし早く来てしまったのがいけないのだ。いまがちょうど約束の時間くらいだろう。

「いえ……」

むしろ焦らせてしまったことを申し訳なく思いながら返事をする、それだけで桔梗は安堵したように表情をゆるめた。そしてあらためて創真と目を合わせてにっこりと微笑む。

「おはよう、創真くん」

「おはようございます」

「来てくれてよかった」

「約束したので」

「そうね、約束だものね」

彼女は含みのある言い方をして肩をすくめると、すぐに靴を履き始めた。

それを待っているあいだ、何となく視線を感じたような気がして顔を上げたところ、翼が階段の中ほどに立ったままこちらを窺っていた。目が合うとふっと微笑を浮かべて軽く手を上げる。

瞬間、創真はギュッと胸が締めつけられるのを感じた。

この期に及んでまだ止めてくれることを期待していたのかもしれない。せめてもうすこしつらそうな顔をしてくれればいいのに、などと身勝手なことを思いつつ、同じように手を上げて応じたが――。

「行きましょう」

「あ、はい」

どこか冷ややかな凜然とした声で桔梗に促されたかと思うと、上げていなかったほうの手をつかまれて外に連れ出される。扉が閉まると、彼女は手を離してゆっくりと創真に向きなおった。

「お願い、今日一日だけは私を見てほしいの」

そう言って、まっすぐに縋るようなまなざしを向けてくる。

創真は言葉に詰まり、ただこくりと頷いて了承することしかできなかった。

「えっと、日帰り……ですよね？」

どこへ行くかは当日までに桔梗が決めておくという話になっていたもので、駅に向かう道すがら尋ねてみると、彼女は前を向いたまま隣県にある有名な温泉地の名前をさらりと口にした。

しかし創真としては想定外のことで戸惑う。都内でお昼を食べたり映画を観たりするくらいだと思っていたのだ。そもそも温泉地なんて日帰りで行くところではないような気がするが――。

「日帰りでも楽しめるらしいから安心してちょうだい」

「それなら……まあいいんですけど……」

「創真くんが泊まりにしたいのなら泊まりでも構わないわ」

「いえ、日帰りです！」

食いぎみに答えると、彼女は艶やかな長い黒髪を揺らしながらクスクスと笑った。それを見て創真はようやくからかわれていたことに気づき、軽く口をとがらせて恨めしげに横目で睨んだ。

現地までは新幹線を使えばわりとすぐだった。

駅前の通りに出ると、さっそく桔梗はたくさん並んでいる土産物屋を見てまわる。いかにもお嬢様といった出で立ちなのでいささか浮いているが、本人は気にする素振りもなく楽しそうにしている。

「創真くん、一緒にこれ食べましょうよ」

「えっ、いまここで食べるつもりですか？」

「そういうものでしょう？」

桔梗が指さしたのは単品の温泉まんじゅうだった。

まさか食べ歩きをしたがるなんて思わなかったが、知った人のいないところで羽目を外してみたいのかもしれない。それぞれひとつずつ買くと、通行の邪魔にならないよう隅のほうに寄ってから食べ始める。

「ふふっ、出来たてはおいしいわね」

「はい」

目の前でひとつずつ焼き印を入れてくれたその温泉まんじゅうは、まだほかほかしている。冷めてもおいしいのかもしれないが、出来たては格別だ。風が冷たいので温かいものがおいしく感じるというのもあるだろう。

「あっちのカステラも食べたいわ」

彼女はあらかじめ行きたいところを調べていたらしく、そのあとも目当ての店をいくつかまわって食べ歩いた。お嬢様が温泉街なんかで楽しめるのか心配していたが、杞憂だったようだ。

「おみやげは帰りに買ったほうがいいわよね」

「荷物になるし、そのほうがいいと思います」

「創真くんも買う？」

「……まあ、家族には買っていこうかと」

一瞬、翼の顔が浮かんだものの、素知らぬふりをしてごまかした。

だが、もしかしたら桔梗は気付いたのかもしれない。さきほどまでの無邪気に楽しんでいる表情とは違い、隙のない完璧な笑みを浮かべたのを目にして、そう思った。

「このあとはどうするんですか？」

「温泉に入るわ」

昼過ぎ、ふたりは老舗そば屋で自然薯のかかった冷たい蕎麦を食べた。

そのとき話の流れでこのあとの予定について尋ねてみたところ、桔梗はにっこりと満面の笑みで即答した。やはり下調べをしていたのだろう。ただ、確かに温泉が有名なところではあるのだが――。

「宿泊しなくても入れるんですかね？」

「ええ、もう日帰りで予約してあるの」

「へえ」

何となく旅館に宿泊しないと入れないのかと思っていましたが、日帰りというものがあるらしい。すでに予約まで済ませているのなら間違いはないはずだ。

「私、温泉に入ってみたかったから」

「入ったことないんですか？」

「ええ……創真くんは？」

「オレは三、四回くらいですかね」

「もしかしてここも来たことあった？」

「いえ、いつも草津のほうなんで」

「それならよかったわ」

彼女はニコッと笑うと、置いていた箸を手にとって再び蕎麦を食べ始めた。翼とよく似ている美しい所作で――。

昼食を終えると、予約した温泉旅館へと移動した。

桔梗が手続きをして、仲居のような女性に案内されたところは和風の客室だった。温泉に入るんじゃないのか――創真は困惑するが、桔梗は特に不審がる様子もなく笑顔で応じている。

「それではお時間までごゆっくりお楽しみください」

「ありがとう」

和服の女性が丁寧にお辞儀をして下がると、桔梗はスプリングコートを脱いでハンガーに掛ける。部屋の中は暖房がよく効いていてあたたかい。創真もとりあえずジャケットを脱ぐことにした。

「あの、温泉に入るんですよね？」

ジャケットをハンガーに掛けてから座椅子に腰を下ろし、向かいにいる桔梗を遠慮がちに窺いながらそう切り出すと、彼女はニコッと笑った。

「ええ、さっそく入る？」

「場所は聞いてますか？」

「聞いてるも何も、そこよ」

「え……ええっ?!」

彼女がずっと手を伸ばして示したのは、窓の外だった。

庭だと思っていたそこにはうっすらと湯けむりが上がり、よく見ると、小さいながらも本格的な露天風呂になっていたのだ――。

それは、貸切個室露天風呂というらしい。

つまりここを借りた自分たちだけが使える露天風呂だ。小さいとはいえ少人数なら十分な広さだし、源泉掛け流しだし、半分ほど岩造りできちんと風情もある。露天風呂として特に不満はな

いが——。

「えっと、時間をずらして別々に入るんですよね？」

「別々に入るのならわざわざ個室になんかしないわ」

「……あの、オレ、これでも一応男なんですけど」

「それって私を襲うかもしれないってこと？」

「あ、いえっ……そういうわけじゃなくて……」

「だったら問題ないわ」

桔梗はすっと立ち上がり、うっすらと思わせぶりの微笑を浮かべて座椅子の創真を見下ろす。問題しかない。問題しかないのだけれど——創真はごくりと唾を飲んだまま何も言葉を返すことができなかった。

信用されているのか、それとも試されているのか——。

緩やかに湯がそそがれる音を聞きながら、創真は何も身にまとうことなく桔梗と肩を並べて露天風呂につかっていた。最初はタオルで隠そうとしたのだが、タオルを湯につけるのはマナー違反だとたしなめられてしまった。もちろん言われるまでもなく知ってはいたけれど。

しかし、入ってしまえばそんなに気にならなくなった。真正面を向いているかぎり彼女の体はほとんど視界に入らない。もっとも湯は透明なので目を向けると見えてしまうが、そもそもこの状況を望んだのは桔梗自身なのだから、あまり過剰に気をつかう必要もないだろう。

ふう——。

じんわりと体が温まって心地よさから大きく息を吐く。湯温はだいぶ高めだが、外気が冷たいのでこのくらいでちょうどいい気がした。御影石にもたれかかりながら、ひさしの向こうにわずかに見える水色の空をぼんやりと眺める。温泉街の喧噪が嘘みたくに静かだった。

「創真くん、気持ちいい？」

「はい……とても……」

気の抜けた声で答えると、隣で彼女がくすりと笑うのが気配でわかった。湯もすこしさざめいている。創真は淡い水色の空を眺めたまま言葉を継ぐ。

「桔梗さんは？」

「とても気持ちいいわ」

「それならよかった」

ぼんやりと返事をしたそのとき、ちゃぷ、という何かが動いたような水音が聞こえて反射的に横目を向ける。彼女はすらりとした手を首筋に当ててうつむいたまま、曖昧な微笑を浮かべていた。

「……本当はね、私のほうからおじいさまにお願いしたの。私を次期後継者にするなら創真くんを夫にしてほしいって」

「えっ」

「もちろんお眼鏡にかなったから聞き入れてくれたのよ」

多分、それは事実なのだろう。

徹の独断ではなく、桔梗の希望だというほうがまだ得心がいく。ただ、どうしてあえて創真なのかはやはり不思議でならない。もっと優秀で、もっと見目の良いひとなんていくらでもいるのに。

「もしかして翼へのあてつけですか？」

「あてつけで夫を選ぶような女に見えて？」

「あ、いえ……すみません……」

消え入るように答えると、隣で桔梗はおかしそうにくすくすと笑った。

「創真くんはもっと自分に自信を持ってもいいと思うわ。翼が幼いころからずっと自分のそばに置いて、私が将来をともにしたいと願って、おじいさまが西園寺の婿として認めたひとなんだから」

そう言われても釈然としない。

翼には補佐役として力不足だと認識されていたようだし、桔梗にも徹にも何か裏があるような気がしている。それが何かはいまのところさっぱりわからないし、見当もつかないけれど――。

「近々、おじいさまが正式に次期後継者を発表するわ」

ふいに桔梗が言う。さきほどまでとは違ったあきらかに硬い声で。創真もつられるように緊張が高まっていくのを感じた。

「発表されたら何か変わるんですか？」

「社交の場にも正式に後継者として顔を出していくそうよ。後継者教育も始まるわ。具体的なことはまだ何も聞いていないけれど、きっと翼がしていたようなことをするのでしょうね」

桔梗はどこか他人事のように淡々と語った。そして短い沈黙のあと、こちらを意識しながら遠慮がちに言い添える。

「創真くんと一緒に受けてくれると心強いんだけど」

「……オレ、桔梗さんと結婚するって決めてませんよ」

「もちろんそれとは切り離して考えてくれていいわ」

「そう言いつつ外堀を埋めていこうとしてますよね？」

「ふふっ」

胡乱げな創真の指摘を否定せずに笑う。

おそらく凶星なのだろうが、そうであろうとなかろうとその申し出を受けるつもりはない。創真は小さく溜息をついてから落ち着いた声でゆっくりと切り出す。

「オレ、いま父親の仕事を手伝ってるんです」

「えっ？」

緩く水音がして、桔梗がこちらに振り向くような気配がした。

それでも創真はまっすぐ前を向いたままで言葉を継ぐ。

「翼の勉強がなくなって、それで暇ならやってみないかって父親に誘われて……別に暇ってほどじゃなかったんですけど、すこし興味もあつたし、そのほうが気もまぎれていいかなと思って」

「そう……知らなかったわ」

「翼にもまだ言ってなかったの？」

隠していたわけではなく、何となくきっかけがなくて話していなかっただけだ。しかし先に桔梗に話すことになるとは思わなかった。ほんのすこし罪悪感のようなものが湧き上がる。

「将来はそちらのほうに進むつもりなの？」

「いや、そこまでは……」

父親の仕事はIT系だが、詳しいことはあまりよく知らない。

手伝いにしても、いまのところ指示どおりに操作するだけのデバッグ作業しかやっていない。それでも面白いと感じているし、興味もあるし、勉強してみるのもいいような気はしている。

ただ、将来はやはり翼を支えたい。翼がどういう道を進むのかはまだわからないが、どういう道であれ何かしらの方法で支えることはできるはずだ——などとまだ言うわけにはいかないが。

「いいのよ、好きな職業についても」

ふと吐息まじりの脱力した声が聞こえた。

どういう意味なのかはかりかねてチラリと横目で窺うと、桔梗は顔を火照らせてうつむき加減になっていた。水面を見つめたままゆっくりと呼吸をしてから、ぼんやりとした声で言葉を継ぐ。

「もちろん、西園寺グループに入って私を補佐してくれればありがたいけれど……そこにはこだわらないわ。何なら仕事上のパートナーとして翼を支えてもらっても構わない。それでも……わた、し、を……」

消えゆくように声が小さくなって途切れたかと思うと、じゃぶ、と湯をかき分けるような音とともに、やわらかな体が創真にもたれかかってくる。

「ちょっ……え、桔梗さん?!」

その感触にあたふたとしながら押し返そうとしたが、どうにも様子がおかしい。よく見ると顔も体も火照っており、呼吸も苦しげで、座ることもままならないくらいぐったりとしていた。

「本当に、ごめんなさい……」

桔梗は露天風呂の脇に置かれていたデッキチェアに仰向けになったまま、弱々しく謝罪した。体には白いバスタオルが掛けてある。まだ服を着られる状態ではないので創真が備え付けのものを持ってきたのだ。

「これ、飲めますか？」

「ええ……」

キャップを開けたペットボトルの天然水をひざまずいて差し出すと、彼女はバスタオルを胸元で押さえながらよろりと体を起こして受け取り、何口か飲んで息をついた。

「ありがとう。もう大丈夫よ」

「部屋に戻りますか？」

「もうすこしここにいるわ」

そう答え、ペットボトルを返して再びデッキチェアに仰向けになった。

おそらく彼女はのぼせたのだろう。それほど長く入っていたわけではないが、湯がだいぶ熱か

ったので無理もない。幸い意識はあったので、ひとまずここで休ませて様子を見ることにしたのだ。

創真はペットボトルのキャップを閉め、彼女のほうを向いたまま隣のデッキチェアに腰掛ける。腰にタオルを巻いただけなのでいささか肌寒くは感じるが、まだそこまで体は冷えていない。

「ねえ、創真くん」

「はい」

「……………」

桔梗は口を閉ざしたまま次第に気まずげな表情になり、顔をそむけた。透き通るような白い肌はまだほんのりと紅潮している。気にはなるが、だからといってあまり無神経に催促することもできない。

創真は手にしていたペットボトルのキャップを開けて喉を潤し、そっと息をつく。

「オレ、桔梗さんと今日ここへ来たことは後悔してないんで」

「……そう……それならよかったわ」

顔をそむけたまま、彼女はどこか堪えるような声でそう答えた。

胸元でバスタオルを押さえていた手がそっと握り込まれていく。ほんのすこしだけバスタオルを巻き込みながら。気のせいか、そのすらりとした指先がかすかに震えているように見えた。

第20話 ともに時を刻みたい

「十六歳の誕生日おめでとう」

あらたまって口にするのはすこし照れくさいが、それでも創真はしっかりと目を合わせてそう告げて、洋菓子店のロゴが描かれた白い紙袋を差し出す。

「ありがとう」

翼は小さく笑いながら心得たように受け取り、創真を招き入れた。

翼の誕生日は、今日、四月一日である。

小学生のころから、それぞれの誕生日と一緒にケーキを食べることが恒例行事となっている。今日もそのために来たのだ。このパーティーとも言いがたいふたりだけのささやかなお祝いが、創真は気に入っていた。

「あら、創真くん」

ケーキを使用人に託して、ふたりで翼の部屋に向かおうと二階に上がったところで、桔梗とばったり出くわした。これから出かけるのか、淡いピンク色のスプリングコートを羽織り、ショルダーバッグを肩に掛けている。

「こんにちは」

例の日帰り旅行以来なので若干の気まずさは感じたが、素知らぬふりで挨拶をする。そうしなければもっと気まずくなる気がしたのだ。彼女のほうも何でもないかのように微笑を浮かべる。

「避けられていなくてよかったわ」

「オレが避ける理由はないですし」

「ずいぶん迷惑をかけたもの」

「別に気にしてないです」

「じゃあ、また一緒に入ってくれる？」

「えっ……いや、それは……」

予想外の切り返しに動揺してあたふたしていると、桔梗はくすりと笑った。どうやら本気ではなくからかっただけのようだ。創真は恨めしげにムッと口をとがらせるが、彼女は笑みを崩さない。

「ゆっくりして行ってね」

そう言い置き、艶やかな黒髪をなびかせながら階段を降りていった。

創真は無言のまま大きく溜息をついて前に向きなおる。そのとき、翼の表情が凍りついていることに気付いて息をのんだ。きっと桔梗との会話を聞いて察しがついたのだ。ふたりで温泉に入ったと――。

「ごめん……あ、いや、そうじゃなくて」

「創真は悪くないさ」

さらりと話を打ち切るようにそう告げて、翼は足を進める。

確かに謝罪や弁解をする道理はないのかもしれない。翼とはつきあっているわけでも何でもないのだから。創真はもやもやした気持ちを抱えたまま口をつぐみ、小走りであとを追った。

「どうぞ」

扉を開けた翼に促されて部屋に入る。

学習机、本棚、ベッド、テレビ、テーブル、ソファ——広めではあるが、取り立てて変わったものはないごく普通の部屋だ。何度も来ているのもう見慣れている。ただ、学習机の上にはめずらしく無造作に本が積み上がっていた。

「それ、どうしたんだ？」

「ああ、後継者教育がなくなって時間ができたから、ただ学校の勉強だけするというのもつまらないし、視野を広げるために手当たり次第に読んでるんだ」

へえ、と相槌を打ちながら積まれた本を覗き込む。

手当たり次第という言葉どおり、純文学、ライトノベル、自己啓発、哲学、心理学、宗教学、法律関係など統一感のないラインナップだった。書籍だけでなく映画のブルーレイもいくつか混ざっている。

「興味があるんだったら貸してやるよ」

「これ全部読み終わったのか？」

「ああ、そこに積んであるものはな」

「すごいな」

学校の試験もあったのに、たった一か月半でこんなにたくさん読んだなんて。

創真はいまのところ父親の仕事を手伝うことに時間を費やしているので、借りるつもりはないが、ちょっとした好奇心でいちばん難しそうな法律関係の本を開いてみた。

「うわ……」

「それ一読の価値はあるぞ」

「いや、オレはいい」

渋面になりつつ本を閉じる。やたらと漢字が多くて、文章もややこしくて、日本語なのに読める気がしなかった。そんな創真を見て、翼はおかしそうに笑いながらソファに腰を下ろす。

コンコン——。

ちょうどそのタイミングで扉が叩かれた。

どうぞ、と翼がソファに背中を預けたまま応じると、すぐに扉が開き、母親の瞳子がたおやかな微笑を浮かべて入ってきた。紅茶の準備をする使用人ふたりを従えて。翼は驚いたように立ち上がる。

「母上、いったいどうしたんです？」

「創真くんがいらしてるって聞いてね」

「……創真に何か？」

「とりあえず座りましょうか」

瞳子に促されて、翼は怪訝な面持ちになりながらも無言で腰を下ろした。つづいて創真も会釈

して向かいに座る。そして瞳子自身は迷うことなく翼の隣に席を取った。創真からは斜向かいの位置だ。

「お邪魔をしておめんなさいね」

「いえ……あの、体調はもう大丈夫なんですか？」

「ええ、だいぶよくなってきているのよ」

後継者指名の日以降、体調を崩して寝込んでいると翼から聞いていた。確かにだいぶやつれて憔悴した感はあるものの、顔色は悪くないので、よくなってきたというのも嘘ではないのだろう。

そうこう話しているうちにケーキと紅茶がローテーブルに置かれた。ただ、創真と翼のまえだけで瞳子のところには何も置かれていない。そのまま使用人たちは一礼して退出してしまった。

しんと部屋が静まりかえる。

創真は何となく身の置きどころがないように感じて目を泳がせた。すぐまえにはうっすらと湯気の立ちのぼるティーカップが置かれているが、自分ひとりだけ勝手に飲むわけにもいかない。

「私、どうしても創真くんにご挨拶したいんです」

瞳子がどことなく緊張ぎみにそう切り出した。そして覚悟を決めたように居住まいを正すと、まっすぐに創真を見つめる。

「翼を後継者にするという私個人の勝手な思いで、創真くんの人生まで翻弄することになってしまって、謝ってすみませんとわかってはいますが……本当に申し訳ありませんでした」

「え、あ、いや……」

頭まで下げられて、創真はあわてて体のまえでふるふると両手を振る。

「オレは別に翼といわれれば何でもいいんで」

「でも無意味な勉強をさせてしまったでしょう？」

「これから役に立つこともあるかもしれません」

「それ、は……そうだとはいけれど……」

瞳子はそっと目を伏せて戸惑いがちに応じた。

その隣では、翼がソファにもたれたまま黙って腕を組んでいた。あからさまに何か言いたそうな顔をしているが、口を開こうとはしない。気になったものの、この状況であえて尋ねるようなことはできなかった。

「食べよう」

瞳子が退出すると、翼は肩をすくめて苦笑しながらそう切り出した。

創真は頷き、紅茶をすこし飲んでから自分が買って来たケーキを口に運ぶ。ほのかな酸味のあるイチゴと生クリームがよく合っているし、スポンジはきめが細かくふわふわだ。翼も一口で気に入ってくれたらしく目を輝かせている。

「おいしいよこれ。初めての店だな」

「三丁目のほうに新しくできたんだ」

「へえ」

いつも同じ店ばかりというのもどうかと思ったので、新規開拓してみたのだ。

この一年、良くも悪くもこれまでにないような経験をして、ときには踏み出すことも必要だと思いうようになっていた。不安はあったが、ひとまずケーキは気に入ってもらえたようでほっとする。あとは――。

「おい、聞いているのか？」

「えっ」

我にかえると、翼が怪訝に眉をひそめながら前屈みで覗き込んでいた。思わずドキリとしてフォークを持ったまま体をすこし後ろに引く。

「悪い、ちょっとぼーっとしてて……」

「そろそろ桜が満開になるらしいぞ」

「ああ、そういえば近所の桜も咲いてたな」

「食べ終わったら見に行かないか？」

「ああ……」

返事をしながらも頭では別のことを考えていた。もうひとくちケーキを食べて心を決めると、フォークを置く。

「あのな、翼」

しっかりと力のこもった明瞭な声でそう切り出した。すぐさま足元のボディバッグから包装された小箱を取り出して、すっと両手で差し出す。

「これ誕生日プレゼント。もらってくれ」

「えっ？」

まさかプレゼントだとは思ってもしなかったのだろう。

おそらく負担にならないようにと母親どうしで相談して決めたのだと思うが、この恒例行事を始めた当初から、誕生日ケーキ以外のプレゼントは贈らないということになっていたのだ。けれど――。

「プレゼントなしって小さいときに親が決めたことだし、もういいかげん従わなくてもいいんじゃないかと思って。今回、どうしても翼にプレゼントしたかったんだ」

「……わかった、ありがたくいただくよ」

すこし考えたあと、翼はやわらかく表情をゆるめて小箱を受け取った。

たとえ決まりに反していても、すでに用意してしまったものを断らないだろうという目算はあったが、その目算どおりにいかない可能性もなくはなかったわけで。小箱が手を離れてようやく安堵の息をつく。

「開けてもいいか？」

「ああ」

翼はケーキと紅茶をすこし寄せてスペースを作り、そこに小箱を置くと、包み紙を丁寧に破ることなく外して箱を開ける。

「へえ、懐中時計か」

特徴的な形をしているので一目でわかったのだろう。

新品ながらもどことなくレトロな雰囲気醸し出して、裏蓋を開けると歯車などのムーブメントが見られるようになっている、華やかで精緻なデザインだ。

「翼に似合うと思って……手巻き式だから面倒だし、何気にかさばるし、時計として使いにくいことはわかってるんだけど。ただの自己満足だからもらってくれるだけでいい」

「いや、すごく気に入ったよ」

本心かどうかはわからないが翼はうれしそうにに応じてくれた。そっと手に取り、裏返しにしたり蓋を開けたりと興味深そうに観察する。しかし——その顔はだんだんと訝しむようなものに変わっていった。

「これ……懐中時計に詳しいわけではないが、銀仕上げだし、作りも精巧だし、かなり良い品のような気がするんだが」

そう指摘され、創真はギクリとして目を泳がせる。

確かに数ある懐中時計の中でもそこそこ値の張るものだった。翼に安っぽいものなど贈りたくもないし贈れるはずもない。しかし、まさかそのことを指摘されるだなんて考えもしなかった。

「えっと……翼にはまだ言ってなかったけど、西園寺の勉強がなくなったときに父親に誘われて、会社の手伝いっていかバイトみたいなことをしてて。そのバイト代がちょうど出たところだったから……まあ……ちょっと奮発したっていうか……」

「そうか……」

困惑ぎみだが、納得はしてくれたようでひとまずほっとする。

本当はバイト代だけでは足りなくて貯金もつぎ込んだのだが——そのことは黙っておこうと心に決めると、つやつやの大きなイチゴをフォークで突き刺し、素知らぬ顔をして口に運んだ。

ケーキを食べ終わると、翼の提案で高校へ向かうことになった。

敷地内に見応えのありそうな桜並木があるのだ。もともと関係者しか入れないうえ、春休みなので先生も生徒もあまりいないはずで、のんびりと眺めるだけなら確かにうってつけだろう。

懐中時計はさっそく時刻を合わせて使ってくれている。ときどき隣からチェーンの立てるかすかな音が耳に届いて、ドキリとする。今日だけでもうプレゼントが報われたような気がした。

「あ、学校って私服で入っていいのか？」

「おまえ本当に心配性だな」

ふと制服を着ていないことに気付いて不安になるが、翼には笑い飛ばされた。実際、守衛に学生証を見せるとあっさりと通してもらえた。だが、こんな格好で来ているのは自分たちくらいである。

「西園寺くん、私服でどうしたの？」

部活動のために来たと思われる制服姿の女子たちが、翼に声をかけてきた。

その後ろには遠巻きにはしゃぐ女子たちもいる。私服といっても細身のパンツにジャケットというごくシンプルなものだが、学校でしか接点がなければそう見られるものではないし、気持ちはわからないでもない。

「ちょっと用があつてね」

「その服すっごく似合ってる！」

「ありがとう」

翼はいったん足を止めていつものように如才なく応じると、また新学期に、と甘やかな笑顔を振りまいてから桜並木のほうへ歩き出す。創真もすぐに小走りで追いかけて隣に並んだ。

背後では女子たちが興奮して盛り上がっていたものの、ついてくることはなかった。

桜並木に着くと、そのままのんびりと仰ぎ見ながら歩いていく。

遠目には満開に見えたが、近くに来てみるとつぼみも少なくなかった。七分咲きくらいだろうか。穏やかに晴れた空の下で、たくさんの小さな薄紅色がささやかに揺れ、時折ひらひらと舞い落ちる。

「ここにして正解だな」

「ああ」

桜の名所ほど立派ではないが、混雑していないのできれいに景色が見えるし、人波にもまれることなく自分のペースで眺められる。ゆっくりと息を吸い込むとあたたかな春の匂いがした。

「おまえ、頭に花びらがついてるぞ」

「えっ？」

指でさされたあたりをはらってみるが落ちなかったらしく、翼がおかしそうに笑いながら取ってくれた。その小さな花びらは白い手を離れてひらひらと春風に乗れ、すぐに見えなくなった。

余韻にひたるように翼はふっと微笑む。

瞬間、胸がギュッと締めつけられるのを感じた。幼稚園で出会ったあのころからずっと翼が好きで、翼だけが好きで、これからもずっと間違いなく好きでいる。それなのに、どうして——。

「オレ、桔梗さんとの結婚はもう断ることにする」

グッとこぶしを握り込んでひとり決意を固めると、そう宣言する。

「翼に言われたからオレなりに向き合ってみたけど、桔梗さんと結婚なんてやっぱりどうしても考えられないし、その気持ちがこれからも変わらない自信はある。たった一か月半でって言われそうだけど、もう十分だ」

「そう、か……そこまで言うなら僕には何も言えないな」

翼はすこし驚きながらも軽く肩をすくめて応じた。

反対されなかった——そのことに関してはよかったのかもしれない。ただ、他人事のような物言いにひどく寂しさを感じてしまった。翼にも関係のあることだと思っていたのは自分だけなのか。

シャラ——。

その音につられるように顔を上げると、翼がチェーンのついた懐中時計を手にして時間を確認していた。その仕草がとてもこなれていて美しくて絵画のようで、思わず陶然と見とれていたら

。

「いまなら祖父は家にいるはずだ。帰ろう」

「……えっ？」

話がわからなくてきょとんとする。

そんな創真を見て、翼は懐中時計を手に持ったまま不敵に口元を上げた。

「え……桔梗さん……？」

創真は扉のところで立ちつくしたまま、目を瞬かせる。

執事に案内されて入室した西園寺家当主の書斎に、なぜか桔梗がいたのだ。彼女は流れるような所作で応接ソファから立ち上がり、会釈する。創真も怪訝に思いながらつられるように頭を下げた。

「桔梗にも関係する話なのでな」

「あ、はい……」

奥の執務机にいた徹は、創真のつぶやきにさらりと答えて腰を上げた。

この面会は翼が執事を通して取り付けてくれたのだが、その際に婚約に関する話だと説明していた。だから当事者である桔梗を呼んだのかもしれないが、創真としては完全に想定外である。

もちろん彼女にもあとできちんと話をするつもりではいたが、いまはまだ心の準備ができていない。徹に報告するためによく気持ちを整えたばかりだったのに、また乱れてしまった。

「そちらにお掛けなさい」

「失礼します」

創真はペコリと一礼して、徹に示された一人掛けの応接ソファに腰を下ろした。ローテーブルをはさんだ斜向かいに桔梗がいる。そして真正面にはゆったりと歩いてきた徹が座った。

うっ——。

向かいのふたりから見つめられて、彼らにそういうつもりはないのかもしれないが、何か強い圧のようなものを感じて息が詰まった。だからといって逃げ腰になるわけにはいかない。

「あの、今日までオレなりに真剣に考えてみたんですけど、桔梗さんとはやっぱり結婚できません。桔梗さんが悪いわけじゃなくオレの気持ちの問題です。すみませんがお断りさせていただきます」

待っているあいだに考えていた言葉を口にする。

ふたりともその話だということは予想していたのだろう。ほとんど表情を変えずに冷静に聞いていた。桔梗は話が終わっても何も言おうとしなかったが、徹は一呼吸おいてから言葉を返す。

「結論を出すのが早すぎではないかね」

「オレの気持ちは変わりません」

目をそらすことなく熱く真剣に見据えながら、食いぎみに言い返した。絶対に流されないぞという強い気持ちをこめて。

それでも徹は冷静なまま動じる素振りもない。

「創真くんは十六歳だったな。若いときはまだ視野が狭く思い込みにとらわれがちだ。いま結論を出してしまっただけで後悔するかもしれない。変わらないと思っていた気持ちが変わることはよくある。若ければ若いほどな」

「でも、オレは……」

「だから、ひとまず成人するまで返事を保留してみてもどうだろうか。もちろん、成人しても気持ちが変わらなければ断ってくれて構わない。君のためにもそうするのがいいと思うのだが。念のためな」

言葉に詰まり、創真は膝のうでグッとこぶしを握りしめる。

もちろん気持ちが変わらない自信はあるし、後悔しない自信もあるのだが、若さゆえと言われてしまうと反論するのが難しい。しかも、保留という控えめな提案だからかえって断りづらい。

「創真くん」

ふいにやわらかな声で名前を呼ばれて、顔を上げる。

桔梗はどこか申し訳なさそうに微笑んでいた。

「私のためにもそうしてくれないかしら。そんなにすぐにふられてしまうなんてあまりにみっともないもの。両親にもきつと腫れ物に触るような扱いをされるでしょうし。顔も見たくないほど嫌いだというなら仕方がないけれど」

「別に、嫌いなわけじゃ……」

答える声はだんだんと消え入っていく。

できることなら返事の保留はしたくない。ここできっぱりと断ってしまいたい。けれど徹に反論するだけの言葉を持たず、桔梗の懇願をふりきる勇気もない創真に、断れるかというと――。

「あまり創真をいじめないでもらえます？」

突如、書斎の静寂が破られた。

飽きるほど耳にしてきた声を創真が聞き違えるはずがない。ハッと息をのんで振り向くと、そこには思ったとおり翼がいた。しかし、まさか乱入してくるなんて想定外で言葉が出てこない。

「ノックもしないで無礼よ」

桔梗がうっすらと眉を寄せてたしなめるが、翼は引き下がるところか冷笑を浮かべて向かってきた。応接セットのまえで足を止めると、二人掛けソファに並んで座っている桔梗と徹を見下ろす。

「おふたりとも創真の意思を尊重するという話はお忘れですか？」

「創真くんのためを思って助言をしたまでだ」

答えたのは徹だ。ソファに座ったまま顔色ひとつ変えず平然としている。そんな彼を見つめながら翼はすっと冷ややかに目を細めた。

「助言、ね……上手く言いくるめて返事を保留させたうえで、少しずつ外堀を埋めて逃げられなくする魂胆でしょう。百戦錬磨のおじいさまからすれば、赤子の手をひねるようなものだ」

「私は純粋に助言をしたつもりだがね」

そう受け流されて翼はわずかに眉をひそめたものの、深く追及はしなかった。鷹揚に腕を組みながら今度は手前の桔梗に視線を移す。

「桔梗姉さんは創真の優しさにつけ込むのだからもっとタチが悪い。そのうち既成事実でも作るつもりかな。それも騙し討ちのような方法で。先日の温泉旅行もそういう策略だったのでしょ」

「何の根拠もない妄想でしかないわね」

桔梗はあきれたと言わんばかりにそう切り捨てた。そして背筋を伸ばしたまますっとソファから立ち上がると、ワンピースの裾を揺らしながら一歩二歩と距離を詰めて、翼と対峙する。

「いずれにしてもあなたには関係のないことよ。出て行きなさい」

彼女は毅然と命じた。

しかし、翼は身じろぎもせず腕を組んだまま睨みつける。彼女も負けじとまなざしを鋭くする。ふたりのあいだには激しい火花が散っていた。

「あの、ふたりとも落ち着いて……」

思わず創真は立ち上がって声をかける。

正直、翼の推測が合っているのかどうかは皆目わからない。まさかと思いつつ、言われてみるとあり得なくもない気がしてくる。それでもこれは創真自身が決着をつけるべき問題だろう。

「オレなら大丈夫だから」

「僕が大丈夫じゃないんだ」

「えっ？」

翼は決意を秘めたような真剣な顔になって振り向いた。そしてゆっくりと足を進めて真正面から向かい合うと、その場ですっと片膝をつき、まるで壊れ物でも扱うかのように優しく左手を取る。

「っ……!？」

創真はドキリとしながら、同時にわけがわからなくてひどく当惑してしまう。けれども翼はじっと見つめたまま手を離そうとしない。目をそらすこともできず無意識に唾を飲み込んだ、そのとき――。

「僕と結婚してくれないか」

「……………」

ついに頭の中がまっしろになった。何も考えられないのに、何もわからないのに、心臓だけが勝手にドクドクと早鐘を打っていく。いまにも壊れそうなくらい激しくて息もできない。

「あの日から僕なりに真剣に将来について考えてきた。まだやりたいことは見つけられていないが、ひとつだけ確信していることがある……創真、おまえのいない人生は考えられない」

緊張ぎみに、しかしながらしっかりと目を見つめて翼はそう告げる。

「恋愛感情があるかと言われると微妙だが、人生をともにするなら創真がいい。創真しか考えられない。いまさらながらようやく気付いたんだ。どうか僕と一緒に人生を歩いてほしい」

自分に向けられた真摯に請うようなまなざし。ふれあう手から伝わる体温と感触。確かに現実であると理解はしているはずなのに、なぜか現実感がなく、まるで熱に浮かされたみたいにふわふわしている。

「はい……」

気付けば口から肯定の返事がこぼれていた。

翼は表情をゆるめ、すぐに創真の手をしっかりと握って立ち上がると、応接ソファに座したままの徹に慇懃に一礼する。

「創真はこのとおり僕がいただくことになりましたので、潔くあきらめてください」

そう言うと、返事を待つことなく創真の手を引いて踵を返した。

一連の流れをすぐそばで呆然と眺めていた桔梗は、その瞬間ハッと我にかえり、翼の行く手にまわり込んで立ちふさがった。見たこともないくらい余裕をなくした蒼白な顔をして。

「こんなの認められるわけがないでしょう！」

「桔梗」

たしなめるような重い声が部屋に響く。

桔梗は表情を硬くし、声の主である徹のほうへぎこちなく振り向いた。彼はソファに深く腰掛けたまま腕を組んでいたが、奥底まで見透かすような目を桔梗に向けると、静かに告げる。

「引き際を見誤るな」

「……………」

桔梗はキュッと小さな口を引きむすんだ。くやしそうに眉をひそめながらも一歩二歩と脇に避ける。そうして阻むものがなくなると、翼は創真の手を引きながら扉を開けて書斎をあとにした。

。

「なあ、翼」

手を引かれて長い廊下を歩くうちに創真はだいぶ落ち着いた。脳内ですこし状況を整理してから呼びかけると、歩調を変えることなく「ん？」と聞き返されたので、そのまま話を続ける。

「さっきのって、やっぱりオレを助けるための演技なんだよな？」

「は……？」

翼は足を止めると、つないでいた手を離して創真に向きなおり、困惑したような落胆したような複雑な面持ちで言う。

「僕としては本気でプロポーズをしたつもりだったが」

「え……でも、無理に結婚する必要はもうないだろうか？」

「だから僕が僕自身のためにおまえを望んでいるんだ」

「綾音ちゃんのこと……？」

幼いころからずっと好きだった綾音のことを、ふられたからといって二か月やそこらでふっきれるものだろうか。遠慮がちに尋ねると、翼は気まずそうに目を泳がせながら頭に手をやった。

「まあ、正直、好きだという気持ちはまだ残っているが……」

すこし言いよどんだものの、すぐに気を取り直したように視線を戻して続ける。

「綾音ちゃんは創真のことが好きなんだってな。綾音ちゃんに告白したときに本人から聞いたよ。幼稚園のときからずっと好きで、去年の文化祭のときに告白したけどあっさりふられたって」

「……その……黙ってて悪かった」

まさか綾音がそこまで暴露しているとは思わなかった。申し訳なさや気まずさでいたたまれなくなり、今度は創真が目を泳がせる。

「言えない気持ちはわかるし責めるつもりはないさ。ただ、それを聞いたとき僕は不安で心配でたまらなくなった。創真の気持ちが綾音ちゃんに傾いたらどうしよう、創真が綾音ちゃんに取られたらどうしよう、って」

「えっ……？」

「おかしいだろう？」

そう翼は肩をすくめるが、創真はおかしいというより意味がわからなかった。

もし創真と綾音がつきあったら翼はつらい思いをするだろう。それは理解できるが、創真が綾音に取られるというのは逆のような気がする。混乱して怪訝な顔になると、翼が苦笑した。

「自分でも自分の気持ちがわからなくて戸惑ったよ。だが、おまえと桔梗姉さんの婚約話が出たことではっきりと気付いたんだ。僕が人生をともにしたいのは他の誰でもなく創真なんだって」

「でも、あのとき桔梗さんと結婚しろって……」

「それが創真にとって最善だと思った。けれど熟慮したうえで断るというならもう遠慮はしない。破談になったらプロポーズしようとか一月以上前から決めていたんだ。桔梗姉さんがしつこかったせいで順序が逆になってしまったが」

翼の言い分はとりあえず理解した。けれど——。

「まだ信じられないか？」

「ていうか実感がない」

「実感……ね」

翼は思案をめぐらせるような様子で静かにつぶやくと、あらためて創真を見てふっと笑い、そっと手を伸ばして指先で遊ぶように頬に触れてきた。

「……………？」

創真は困惑のまなざしを送る。

しかし翼はそのまま無言で顔を近づけてきて——ふいに唇に感じたやわらかさとぬくもりで、創真はくちづけられたことに気付いた。思考が停止して呆然としているうちにずっと離れていく。

「実感したか？」

いたずらっぽく問われて、創真は火を噴きそうなくらいぶわりと顔が熱くなった。思わず口元を手で覆う。気のせいなんかじゃなく、本当に、翼と——さきほどの感触がよみがえり頭まで沸騰しそうになる。

「まだ足りないのか？」

「え、いや、もう十分っ！」

「僕は足りないけどな」

「はえっ……」

からかわれたことにも気付かずあわあわとする。もう頭はいっぱいいっぱいだった。そんな創真を見て、翼はひとしきりおかしように笑ったかと思うと、左手を腰に当てながら挑むように口元を上げて言う。

「じゃあ行くぞ」

「行くって……どこへ？」

「ご両親に許しを得ないと」

「ええっ?!」

翼はニヤリとして、困惑している創真の手をしっかりとつかんで駆け出した。創真もよろけつつ足手まといにならないよう必死についていく。驚きはしたものの抗おうという気はない。

そもそも、それは創真がずっと夢見ていたことで――。

翼が扉を開くと、ほのかにあたたかい風がするりと頬をなでていく。思わず創真はふっと表情をゆるめ、そのまま春の陽だまりのもとへと足を踏み出した。今度は自分から翼の手をとって。

第22話 未来への通過点（最終話）

「いらっしゃい、諫早くん」

チャームを押すなり待ち構えていたかのように玄関の扉が開き、東條が出迎える。七分袖のカットソーにデニムパンツというカジュアルな格好だ。創真が汗だくなことに気付いてかハハッと笑う。

「上がれよ。部屋はだいぶ涼しくしてあるぞ」

「おじゃまします」

彼がひとり暮らしをしているこのマンションには、すでに何度も来ているのでいまさら遠慮はない。それでも律儀に挨拶してから、創真は馴染んだスニーカーを脱いで部屋に上がった。

「……鍋？」

ワンルームにしては広めの部屋に入ると、奥の座卓に鍋料理らしきものが用意されているのを見てとれた。中身まではわからないが、カセットコンロにかけられた土鍋からは湯気が立ち上っている。

「冷房をガンガンにかけて食うと美味いんだ」

「ああ、いいかもな」

まだ九月なので驚いたが、彼の言うとおりの部屋はかなり涼しくなっており、確かにこれなら鍋物もおいしくいただけるだろう。軽く返事をして、座卓の脇に荷物を下ろしながらクッションに座る。

冷蔵庫へ向かった東條は、濃緑色のボトルをひとつ取り出して座卓に持ってきた。

「お祝いにはやっぱりシャンパンだよな」

「いや、オレ、あしたがあるし……」

「雰囲気モノだし一杯だけつきあえよ」

「まあ、一杯だけなら」

残念ながら創真はあまりアルコールに強くないのだが、せっかくの気持ちを無下にするのも悪い気がして、そう妥協する。東條はうれしそうに笑みを浮かべて隣に腰を下ろすと、シャンパンの栓を開けた。

「乾杯！」

その音頭で、隣の東條と軽くグラスを合わせてひとくち飲んだ。

わざわざシャンパンのボトルまで用意していたので、あらためてお祝いを述べるのではないかと身構えていたが、何もなくてほっとする。こんなところであらたまったことを言われるのはむしろ痒い。

「けっこう量があるからいっぱい食べろよ」

「ああ」

実際、四人用くらいの土鍋に具材がたっぷり入っている。創真がよく食べるので多めに用意し

てくれたのだろう。遠慮なく鶏つくねや白菜などをとんすいにとって食べていく。

「このつくねうまいな」

「よかった、それ俺が作ったんだ」

「え、自分で作れるのか？」

「ネットでレシピを探してな」

「へえ」

鶏つくねなんていくらでもスーパーに売っているのに、料理はそんなに得意でも好きでもないと言っていたのに、わざわざ調べてまで手作りしてくれた気持ちがうれしい。

「そういえばウチでは鍋やったことないな」

「作るの簡単だし、野菜も摂れるからいいぞ」

「そうだな……土鍋とか買ってみるか」

とりとめのない話をしながら鍋をつついていく。

東條はときどきシャンパンも口に運んでいた。グラスが空になると、冷蔵庫から濃緑色のボトルを持ってきて自分でつぐ。

「翼はどうしてる？」

「いまは勉強がてら法律事務所でバイトしてる」

「へえ、翼がバイトってのも何かすごいな」

どこか面白いように反応した東條につられて、創真も笑った。もちろん金銭的に困窮しているわけではなく、あくまで勉強が目的なのだが、それでも彼が言わんとすることはよくわかる。

東條は身を乗り出し、土鍋から野菜やはんぺんを取りながら話を続ける。

「司法修習はいつから始まるんだ？」

「十二月からって聞いている」

「あれ、めちゃくちゃ大変らしいな」

「そうなのか？」

「俺も詳しくは知らないけど」

大変だとか難しいとかそういうことは聞いていない。もっともまだ始まってもないのだから、本当に大変かどうかは翼本人にもわからないだろう。

「まあ、かなりスケジュールが詰まってるとは言ってたな。だからいまのうちに一緒に遊びに行ったりしてるんだ。夏休みは海外にも……あっ」

創真は箸を置き、脇にまとめてあった荷物から紙袋をつかんで東條に差し出した。

「これ、夏休みに行ったベルギーのおみやげ。チョコ好きだろ？」

「お、ありがとな」

彼はうれしそうに顔をほころばせて受け取った。中から箱を取り出すと、外国語で書かれたパッケージを表裏に返しながら眺める。

「ベルギーってベルギービールくらいしかイメージなかったな」

「ビールがうまいかどうかはわからなかったが、そのチョコはうまかった」

「ははっ、諫早くんが言うなら間違いないな」

再びふたりで鍋をつつきながら、ベルギー、フランス、ドイツ、オランダをまわってきたことや、行ったところや見たことなどを尋ねられるまま話していく。彼は終始楽しそうに聞いていた。

「それにしても翼が裁判官とはなあ」

「なれるって決まったわけじゃないけど」

「なれるだろう、あいつガチで優秀だし」

「まあな」

高校三年生で予備試験に合格、大学一年生で司法試験に合格、そして今年三月には大学三年生で早期卒業した。しかも視野を広げるためにあえて理学部に進んで。すごすぎてもはや意味がわからない。

「今日はあいつどうしてるんだ？」

「綾音ちゃんと飲みに行くって言った」

「えっ……それ、いいのか？」

「別に」

さりりと答えて、まだほとんど減っていなかったシャンパンを口に運ぶ。

正直、複雑な気持ちがないと言ったら嘘になるが、だからといって二人きりで会わないでほしいとは思わない。過去はどうあれ、二人が幼なじみであることに変わりはないのだから。

「まあ、オレが東條のところへ行くって聞いて不機嫌になってたし、きっと当てつけで綾音ちゃんを誘ったんだろうな」

「ああ……」

東條はものすごく納得したような声で相槌を打ち、苦笑する。

翼は意外にもヤキモチやきなのだ。だからといって他人にそれを見せるようなことはしないし、創真にも軽く拗ねるくらいである。ただ、相手が東條や桔梗のときだけはあからさまに不機嫌になるのだ。

「でも綾音ちゃんには彼氏がいるし」

「ああ、あの子なら普通にいそうな感じだよなあ」

「その彼氏ってオレの兄貴なんだけど」

「……マジで？」

東條は心底驚いたように目を見張って振り向いた。創真はまだ中身の残っているグラスを座卓に戻し、こくりと頷く。

「オレも翼もこないだ兄貴から聞いてビックリした」

兄の創一は四歳上だが、弟の友達と一緒に遊んだりするほど面倒見はよくなく、綾音とも面識があるくらいで親しくはなかったはずだ。なれそめも教えてくれなかったのも謎のままである。それに――。

「は一……弟にふられたからって兄に行くとはなあ」

「さすがにそういうわけじゃないだろうけど」

それでもかつて告白された創真としては兄というだけで十分驚いたし、微妙な気持ちにもな

った。翼も複雑な顔をしていた。だからといってももちろん二人とも反対などしていないし、むしろ祝福している。

けれど東條は素直に受け入れられなかったようで、うっすらと眉を寄せた。

「もしかしたら諫早くんとこの財産狙いだったりしてな」

彼は初対面のときから綾音にあまりいい印象を持っていないらしく、何かと見る目が厳しいのだが、すくなくともこの憶測に関してはまったくの見当違いである。

「綾音ちゃんは幸村硝子の創業者一族だぞ。うちより全然上」

「え、幸村硝子って、あの大手企業の幸村硝子？」

「そう。でも普通に就活してたし跡は継がないみたいだな」

「ふうん……」

どこに入社するかは聞いていないが、いくつか内定をもらったという話は翼経由で耳にしていた。コネなどではなく自分で一から就職活動をしての内定らしい。

東條はグラスに口をつけ、隣の創真にちらりと物言いたげな視線を流した。

「なあ、諫早くんは本当に就職しなくていいのか？」

「兄貴のところに就職するけど」

「じゃなくて、大手企業とかに普通に就職したほうがいいんじゃないかって……いや、その、お兄さんの会社がどうこうってわけじゃなくてな……」

ずいぶんと言いつらそうにしているが、言いたいことはわかる。

創真の就職先は、兄の創一が五年前に立ち上げたWebサービス企業なのだ。大学に合格したころからずっとアルバイトとして仕事を手伝っていて、卒業後はそのまま正社員になる予定になっている。

しかし、そんなベンチャー企業より安定した大手企業のほうがいいのではないか、せっかく名のある大学を卒業するのに活かさないのはもったいない、そう東條は考えているのだろう。けれど――。

「兄貴の会社なら融通がきくから何かと都合がいいんだ。リモートで仕事してもいいって言ってくれてるし。裁判官だと何年かおきに全国に転勤があるみたいだから、できればオレもついでいきたいと思って」

「なるほど……そこまで考えてたとはなあ……」

自分一人ではなく、二人の将来を見据えたうえでの選択なのだ。

ちなみに彼は大学院修士課程に進むことになっている。特にこれといった目的があるわけではなく、彼の学科では九割以上の学生が進学するので、まわりにつられて何となくという感じらしい。

それゆえ創真の考えに驚いたのだろう。感じ入ったように相槌を打ちながらグラスを手に取ると、ほとんどない残りを呷り、再び冷蔵庫からシャンパンのボトルを持ってきて無造作にそそぐ。

ついでに創真のグラスにも足していった。一杯だけの約束だったのに、それを指摘することもなくまあいいかと思ってしまったのは、すでにそこそこ酔いがまわっていたせいかもしれない。

「諫早くん、まだ食べられるだろう？ シメは雑炊な」

鍋の具材がなくなりかけたころ、東條はそう言いおいてキッチンのほうへ向かった。冷凍ごはんをレンジで解凍し、卵を溶いて戻ってくると、土鍋に投入して卵雑炊を作っていく。料理が得意でないと言うわりに手際がよかった。

「ん、うまい」

「よかった」

熱々の雑炊をふうふうしながら口に運んで感想を述べると、彼は安堵したように表情をゆるめた。以降はふたりとも無言で食べ進め、そこそこ量はあったのにあっというまに平らげてしまった。

「じゃ、そろそろ片付けるか。諫早くんは座ってて。酔ってるだろ？」

「……ああ」

自分だけ何もしないのもどうかと思ったが、確かにいささか酔っている自覚があるので甘えることにした。何となく見ていたテレビのニュースが終わりかけたころ、片付けを終えた彼がこちらに戻ってきたことに気付いて、声をかける。

「オレ、そろそろ帰るな」

「じゃあ送ってく」

「ひとりで帰れるけど」

「酔ってて心配なんだよ」

いくらなんでもひとりで帰れないほど酔ってはいない。住んでいるマンションはここから徒歩五分くらいだし、成人男性なのには思うが、断るのも面倒になったので素直に送られることにした。

外はもうすっかり夜の帳が降りていた。

それでも日中の熱はまだかなり残っている。さきほどまで冷房のよくきいた部屋にいただけにきつい。じわりと汗がにじみ、どこか体がふわふわとするのを感じながら歩を進めていく。

「いよいよあしただな」

「……ああ」

東條に話を振られ、創真はちらりと横目を向けて静かに相槌を打った。そして小さく息をつくと、淡い三日月が浮かんだ濃紺色の空を見上げて、ひとりごとのようにそっけなく言い添える。

「だからってそんなに何か変わるわけじゃないけど」

「まあ、ずいぶんまえから一緒に住んでるからな」

「でも、やっと式が終わるんだと思うとほっとする」

「ははっ、準備に苦労してたもんな」

「オレも翼も別に式なんて望んでなかったのに」

「そう言うなよ。みんな楽しみにしてるんだからさ」

「わかってるけど……」

そうこう話しているうちに住んでいるマンションに着いた。本当にすぐだ。ひっそりとしたエントランスのまえで彼に向きなおって言う。

「悪かったな、わざわざ送ってもらって」

「部屋までついて行かなくて大丈夫か？」

「そんなに酔ってないって」

「そうか……じゃあ、気をつけろよ」

「ああ」

そう応じ、軽く手を上げて身を翻そうとしたが――。

「諫早くん」

どこか切羽詰まったような声で呼び止められて動きを止めた。何だろうと小首を傾げると、彼はすこし目を泳がせて逡巡する様子を見せたが、長くはない沈黙のあと意を決したように口を開く。

「俺もあしたから創真って呼んでいいか？」

「えっ？」

思いもしないことを言われてきょとんとした。それを見て、東條はあわてて言い訳のように言葉を継ぐ。

「もう諫早くんって呼べなくなるだろ？」

「別にそう呼んでくれて構わないけど」

「え……でも……」

「まあ、名前呼びたいなら名前でもいい」

「わかった」

創真と親しい人間はたいてい名前のほうで呼んでいるので、彼もそうしたかったのかもしれない。許可を出すとほっとしたように表情をゆるめて頷き、またあしたな、と小走りで帰っていた。

翌朝、空はどこまでも青く澄みわたっていた。

あのプロポーズから五年半、この日、創真と翼はとうとう結婚する――。

「おめでとう、創真くんも翼くんもすごく似合ってる！」

ゲストハウスで双方の両親や祖父母に挨拶してまわり、庭に出ると、綾音が待ち構えていたように笑顔でそう声をはずませた。一緒にいた東條と桔梗も、兄の創一も、おめでとうとあらためて祝福の言葉を口にする。

「ありがとう」

翼は手にしていた懐中時計をしまいながらにこやかに応じ、創真も隣ではにかんだ。

ふたりが着ているのは白を基調としたおそろいのタキシードだ。ただしデザインは異なる。それぞれの良さを最大限に引き立てたうえで、ふたり並ぶとよりいっそう華やかになるように、と

いうことらしい。

創真はともかく、翼はすらりとした長身が活かされたデザインで、確かにこれ以上ないくらいよく似合っていた。格好良くて、華やかで、まさに女子が夢見る王子様そのものといった感じである。

「俺、翼のウェディングドレス姿を楽しみにしてたんだけどな」

「翼くんならウェディングドレスもすごく似合ったと思う！」

東條がいたずらな笑みを浮かべてからかうように言うと、綾音はきらきらと目を輝かせて同調した。そんなふたりに翼は軽く苦笑しながら肩をすくめる。

「さすがにドレスは恥ずかしくてな」

もう男装はやめたが、スカートを穿くことはなく常にパンツスタイルなのだ。

それゆえドレスには抵抗があったらしい。参列者が互いの家族と親しい友人だけということもあり、最初から迷わずタキシードを希望した。ウェディングプランナーもとても乗り気になっていた。

だからといって創真がブーケを持たされるのは納得いかない。結婚式のときはなかったが、披露宴に場所を移すとなぜか用意されていて、おまへのほうが似合うと翼に押しつけられてしまったのだ。

「創真、一緒に撮ろうぜ」

「ん、ああ」

翼と綾音が笑いながら会話をはずませている隣で、ひっそりと手元のブーケに目を落としてみると、東條が明るく声をかけてきた。スマートフォンを掲げつつ創真の隣にまわりこみ、顔を寄せる。

カシャッ——撮影した瞬間、東條とは反対側から翼が思いきり顔を寄せてきた。撮影された写真にもしっかりと写り込んでいる。まるで、初めから三人で写真を撮ろうとしていたかのように。

「あーっ！！　なんで勝手に入ってくるんだよ！」

「おまえいつから創真って呼ぶようになったんだ」

「……いつだっていいだろ」

翼に追及されると、東條はほんのりと頬を染めながらふいと顔をそらす。しかし翼は怪訝に眉をひそめたまま追及の手をゆるめない。そんなふたりのあいだから創真はそっと抜け出した。

「創真くん」

すこし離れて遠巻きに見ていた桔梗がにこやかに近づいてきた。創真が軽く頭を下げると、彼女はふふっと笑う。上品なロイヤルブルーのワンピースドレスがふわりと揺れた。

「すこし悔しいけれど翼とお幸せに」

「はい、ありがとうございます」

「私も早く相手を見つけないとね」

「……………」

彼女は次期当主として数年内に結婚するよう言われているらしい。適切な相手がいなければ見

合いをすることになるという。創真が責任を感じる必要はないのだが、それでも彼女との結婚を断った人間として胸がチクリとした。

「あの……よかったら、これどうぞ」

そう言いながらウェディングブーケを差し出す。

こんなことをしても身勝手な自己満足でしかないのかもしれない。罪悪感を払拭したいだけかもしれない。それでも彼女に幸せになってほしいと願う気持ちに嘘はなかった。

桔梗は目を丸くしたが、すぐにふっと表情をゆるめると華やかな笑みを浮かべる。

「ありがとう。本当に私でいいのならいただくことにするわ。でもあとでね。いまはまだ花嫁が持っていないといけないもの」

「花嫁って……」

いたずらっぽく言われて、創真はどう反応していいかわからず曖昧に苦笑する。

そのときふいに後ろからガバリと肩を組まれた。驚きはしたが振り返るまでもなく誰なのか察した。案の定そこにいた翼は、そのまま創真の肩に寄りかかるようにして、ひどく挑発的なまなざしを桔梗に向ける。

「あいかわらず油断のならないひとですね」

「あら、お話をしていただけよ」

桔梗は素気なくあしらうと、不満そうに口をとがらせている翼を無視し、パッと顔をかがやかせて小さく両手を合わせた。

「そうだわ、ここにいるみんなで写真を撮りましょうよ」

「じゃあオレが撮るよ」

そう申し出たのは兄の創一だ。一眼レフのデジタルカメラを掲げたまま、ぐるりとあたりを見まわして場所を決めると、そこに並ぶよう指示を出す。

「兄貴は入らないのか？」

「オレは因縁ないからな」

「因縁？」

首を傾げながらみんなの集まっているほうに目を向ける。東條、綾音、桔梗——彼の言わんとすることが何となくわかってしまい、思わず渋い顔になる。

「いや、そういう趣旨じゃないし」

「いいから、ほら行けよ」

釈然としなかったが、翼に笑いながら手を引かれてみんなの真ん中におさまった。せっかくなのでブーケを見せるように持つ。創真の側には桔梗が、翼の側には綾音が、ふたりの後ろには東條が立っている。

「準備はいいか？　いくぞー……三、二、一、はい」

「わ、ちょっ……！」

シャッターを切る瞬間、示し合わせていたのか周囲の三人が笑いながら抱きついてきた。突然のことに創真も翼も驚いて思わずバランスを崩してしまう。

「ははっ、いい写真が撮れたよ」

創一はデジタルカメラのモニタを見ながら笑った。

みんなも彼に駆け寄って囲むようにモニタを覗き込む。その賑やかな写真は、きっと今日の忘れがたい思い出のひとつになるだろう。どこまでも青く澄みわたった秋空に楽しげな笑い声が拡散した。